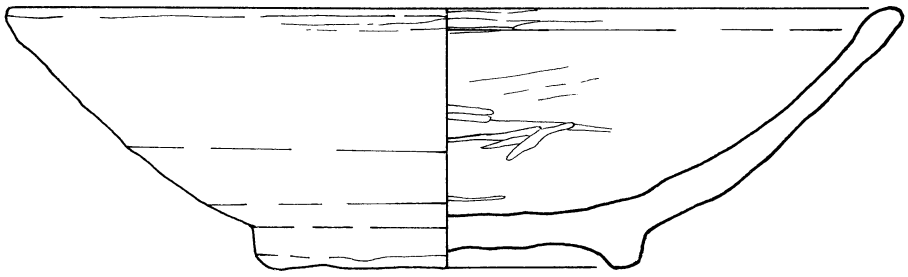
長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第16集

小手田（こてだ）遺跡

主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）
に係る埋蔵文化財発掘調査



２０１６

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第16集

小手田遺跡

主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）
に係る埋蔵文化財発掘調査

２０１６

長崎県教育委員会

SX01（谷状地形）完掘状況（北から）

SX01（谷状地形）土層観察（北から）

SB01、SB02完掘状況（北から）

刊行にあたって

本書は、平戸市田平町において実施された主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書です。

平戸市田平町には、里田原という小盆地があり、ここには、本県の弥生時代の遺跡を代表する里田原遺跡が存在します。また、古代の条里制が現代に残されていると言われ、さらには、松浦党の成立の解明に欠かすことができない里城跡という中世城郭が存在します。このことから、この地域は県北地域の歴史を考える上で、非常に重要な位置を占めると言うことができます。

本書が報告する小手田遺跡は、この里田原遺跡から南に約500メートルと程近く、今回の調査でも、旧石器時代の台形石器や弥生時代の土器、中世の掘立柱建物２棟と谷状地形を埋め立てた痕跡等の貴重な資料を得ることができましたので、今後の研究の進展に期待が持たれるところです。

発掘調査の実施に当たり、ご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成28年３月31日

長崎県教育委員会教育長

池　松　誠　二

例　　言

1　本書は平成26年度主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）に係る埋蔵文化財〔小手田遺跡〕発掘調査報告書である。

2　小手田遺跡は平戸市田平町小手田免に所在する。

3　小手田遺跡の発掘調査は長崎県埋蔵文化財センターが担当し、発掘調査業務を小手田遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体に委託した。

調査組織（所属等は当時）

長崎県埋蔵文化財センター　所長　　山　本　忠　敬
調査課長　　町　田　利　幸
調査課　文化財保護主事　　白　石　渓　冴
調査課　文化財調査員　　今　西　亮　太
調査課　文化財調査員　　後　濱　啓　太

小手田遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体

現場代理人　　渡　辺　宏　司（大成エンジニアリング株式会社）
調　査　員　　宇　井　義　典（大成エンジニアリング株式会社）
調　査　員　　堀　苑　孝　志（大成エンジニアリング株式会社）
調　査　員　　山　中　リュウ（大成エンジニアリング株式会社）
調　査　員　　楠　　秀　行（株式会社創建）

4　小手田遺跡の発掘調査期間

①　範囲確認調査：平成26年２月３日～平成26年２月14日
②　本　　調　　査：平成26年11月25日～平成27年２月27日

5　今回の調査では、専門事項についての下山正一（元九州大学大学院理学研究院助教）の現地指導を得た。

6　本調査の現場記録（写真撮影、実測図作成）、及び遺物の記録は白石が担当した。

7　本書に収録した遺物や記録類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

8　本書で用いた座標は、世界測地系である。

9　本書で用いた方位は座標北である。

10　本書の執筆担当者は、本文目次に（　）で示している。

11　本書の中国語要旨の翻訳は王達来（龍谷大学大学院国際文化学研究科博士後期課程）に、韓国語の翻訳は古澤義久に依頼した。

12　本書の編集は白石渓冴が行った。

13　本書の第１図の作成には、テクノコ白地図イラスト（http://technocco.jp/）を改変、使用した。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯……1（白石渓冴）

Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1．地理的環境……3（白石渓冴）
　2．歴史的環境……4（白石渓冴）

Ⅲ　調査の概要
　1．調査の概要……8（白石渓冴）
　2．層位……15（白石渓冴）

Ⅳ　遺構
　SX01（谷状地形）……19（白石渓冴）
　SX02、SX03……23（白石渓冴）
　SB01、SB02……24（白石渓冴）
　SA01……26（白石渓冴）

Ⅴ　出土遺物
　SX01（谷状地形）出土遺物……27（白石渓冴）
　SB01出土遺物……37（白石渓冴）
　黒色土器出土遺物……37（白石渓冴・古澤義久）
　旧石器時代遺物……41（川道　寛）

Ⅵ　SX01（谷状地形）の埋土について……43（下山正一）

Ⅶ　総括……45（白石渓冴）

挿 図 目 次

第１図　小手田遺跡位置図……1
第２図　小手田遺跡周辺遺跡分布図……4
第３図　小手田遺跡周辺図……8
第４図　小手田遺跡遺構配置図（１/500）……9
第５図　小手田遺跡遺構全体図①（１/200）……10
第６図　小手田遺跡遺構全体図②（１/200）……11
第７図　小手田遺跡遺構全体図③（１/200）……12
第８図　小手田遺跡遺構全体図④（１/200）……13
第９図　小手田遺跡遺構全体図⑤（１/200）……14
第10図　小手田遺跡北壁土層図①（１/60）……16
第11図　小手田遺跡北壁土層図②（１/60）……17
第12図　小手田遺跡北壁土層図③（１/60）……18
第13図　SX01内焼土遺構図（１/20）……19
第14図　SX01暗褐色土除去後状況図（１/100）……20
第15図　SX01完掘状況図（１/100）……21
第16図　SX01土層図（１/60）……22
第17図　SX02遺構図（１/40）……23
第18図　SX03遺構図（１/40）……23
第19図　SB01遺構図、柱穴土層断面図（１/60、１/40）……24
第20図　SB02遺構図（１/60）……25
第21図　SB02柱穴土層断面図（１/40）……26
第22図　SA01遺構図、柱穴土層断面図（１/40）……26
第23図　SX01暗褐色土出土遺物（19は２/３、それ以外は１/３）……27
第24図　SX01暗黒色土、淡暗黒色土、青灰色土出土遺物（26は２/３、45は１/４、それ以外は１/３）……31
第25図　SX01淡暗黒色土出土遺物石器１（46～52は２/３、それ以外は１/３）……34
第26図　SX01淡暗黒色土出土遺物石器２（62は１/４、それ以外は１/３）……36
第27図　SB01、黒色土、表土出土遺物（６、15～22、29は２/３、それ以外は１/３）……37
第28図　表土出土細石刃核（２/３）……40
第29図　旧石器時代遺物（２/３）……42
第30図　SX01（谷状地形）の土層区分……43

表　目　次

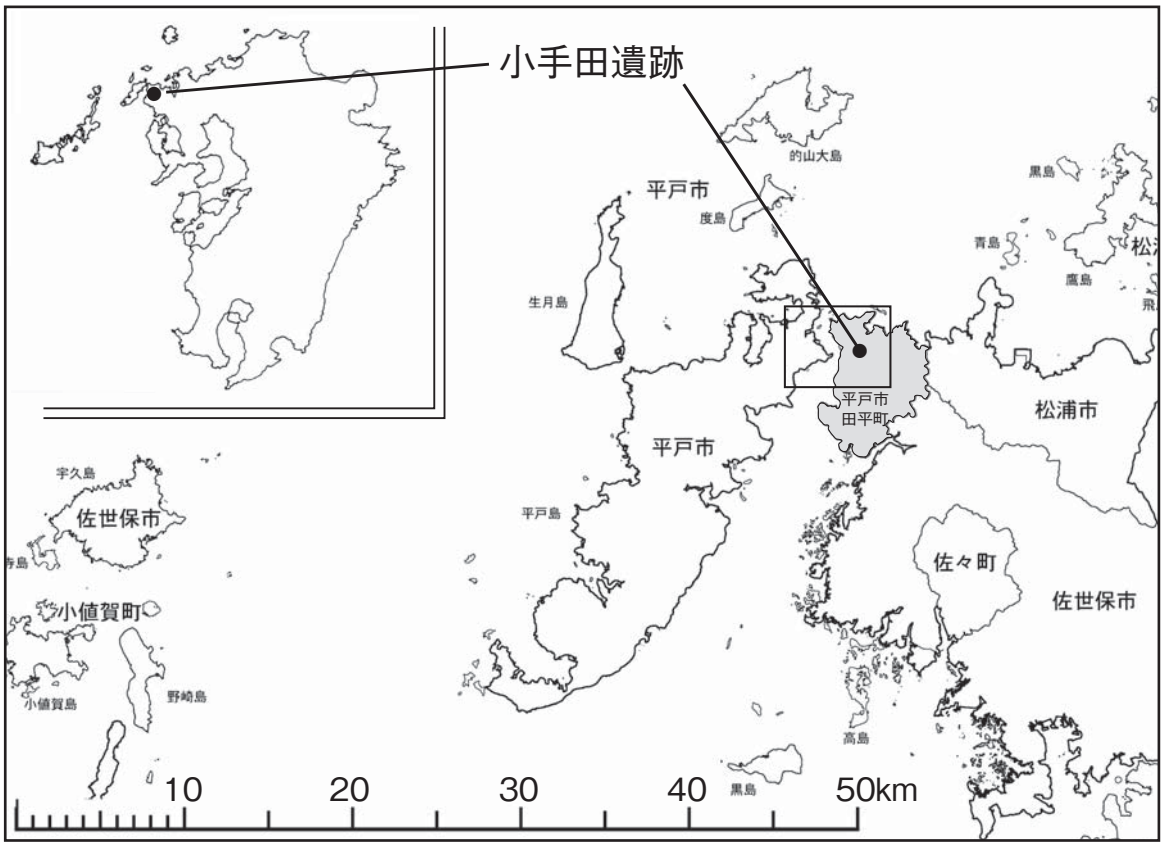
第１表　小手田遺跡周辺遺跡一覧表……6
第２表　SX01暗褐色土、暗黒色土、淡暗黒色土、青灰色土出土土器観察表 ……30
第３表　SX01暗褐色土、暗黒色土出土、淡暗黒色土出土石器観察表 ……33
第４表　SB01及び黒色土、表土出土土器観察表 ……40
第５表　黒色土、表土出土土器観察表……40
第６表　旧石器時代石器観察表……41

図 版 目 次

巻頭カラー１　SX01（谷状地形）完掘状況（北から）
巻頭カラー２　上段　SX01（谷状地形）土層観察（北から）
　　下段　SB01、SB02完掘状況（北から）

図版１　調査区全景（南西から）・SX01（谷状地形）内焼土
図版２　玄武岩露出地点一帯・SX02完掘状況
図版３　SX03完掘状況・SA01完掘状況
図版４　小手田遺跡出土遺物①
図版５　小手田遺跡出土遺物②
図版６　小手田遺跡出土遺物③
図版７　小手田遺跡出土遺物④
図版８　小手田遺跡出土遺物⑤
図版９　小手田遺跡出土遺物⑥
図版10　小手田遺跡出土遺物⑦
図版11　小手田遺跡出土遺物⑧
図版12　小手田遺跡出土遺物⑨
図版13　小手田遺跡出土遺物⑩
図版14　小手田遺跡出土遺物⑪
図版15　小手田遺跡出土遺物⑫
図版16　小手田遺跡出土遺物⑬

Ⅰ　調査に至る経緯



第１図　　小手田遺跡位置図

小手田遺跡は、1975年（昭和51年）に縄文時代の遺物包含地として周知された遺跡である。南から北に向かって緩やかに下る、北向きの斜面上に位置し、東西約350m、南北約280m、標高20～30mの範囲が遺跡として周知されている。

主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）は、長崎県県北振興局道路建設課による、平戸市田平町小手田免から萩田免までを結ぶ幹線道路の建設事業である。平成21年度に県道路建設課から事業計画が提出され、田平工区のうち路線の約300mが小手田遺跡の範囲を東西に横断するように計画されていたことから、同年７月に平戸市教育委員会が分布調査を実施し、工事に際し事前に範囲確認調査が必要であると判断された。

その後、平成25年度に用地買収等調査に入る要件が整ったため、平成26年２月３日から平成26年２月14日にかけて長崎県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施した。遺跡内での工事予定地は長さ約300m、幅約12mの範囲であり、この中に10箇所の試掘坑を設定し、範囲確認調査を行った。その結果、長さ約125mの範囲内に設定した２箇所の試掘坑において遺物包含層を確認した。

範囲確認調査の結果を受けて、平成26年５月に県道路建設課と県北振興局道路建設課、及び学芸文化課により再び協議が行われ、本調査による記録保存を行う方針が決定された。本調査は平成26年11月25日から平成27年２月25日にかけて実施した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

小手田遺跡が所在する平戸市田平町は、九州本土の西北端にある、北松浦半島の西北端に位置する。北側は玄界灘に面し、西側には平戸瀬戸をはさんで平戸島がある。沿岸部は、佐賀県西方からリアス式海岸が連続し、南には国見山地がある。

田平町はなだらかな丘陵地にあり、標高216メートルの吹上山を最高地として、南から北に向かってゆるやかに傾斜している。低地に乏しく畑地・山林原野が海岸線にまで連なっている。これらの丘陵は大部分が国見山系の火山活動により噴出してきた玄武岩で覆われ、随所に玄武岩の露頭が見られる。この玄武岩は松浦玄武岩と呼ばれ、この玄武岩が風化して粘土質の赤土となり、田平町一帯の畑、水田に広く分布している。

この溶岩台地の基盤は、第三紀層とよばれる土砂が堆積してできた水成岩であるが、玄武岩の割れ目から浸透した水が両者の間にたまり、地下水脈が作られている。こうした水脈は井戸水や湧き水となって湧出し、「溜め池」として利用されている。

この溶岩台地を河川が浸食して谷を作り、河川の運搬物が下流に小規模な平地を作っているが、田平地域では、地元の人々が「里田原」あるいは「里」と呼びならわすおおよそ32ha の水田地帯が最大である。この水田地帯の北側には一関川が、南側には新川が流れ、盆地の西側で釜田川と合流しているが、釜田川は里田原の西北部が地峡となっているため、以前は大雨になると水田は一時冠水するような状況であった。歴史的環境で後述するように、この地域の歴史はこの里田原を中心にして展開してきた。小手田遺跡は里田原の南側の、南から北に向かって緩やかに傾斜する斜面上に位置し、現状では耕作地となっている。

参考文献

田平町郷土誌編纂委員会1993『田平町郷土誌』田平町教育委員会
田平町教育委員会2003『里田原遺跡　国営再編整備事業にかかる第37・40・41・44・46次発掘調査の報告』田平町文化財調査報告書　第９集
田平町教育委員会1982『中野ノ辻遺跡　里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第１集
田平町教育委員会1988『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第２集
田平町教育委員会1996『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第７集
田平町教育委員会1992『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第５集
長岡信治1998「第一節　長崎県の地形と地質」『原始古代の長崎県Ⅱ』長崎県教育委員会
長崎県教育委員会1977『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第32集

2．歴史的環境

第２図　　小手田遺跡周辺遺跡分布図

小手田遺跡が所在する九州島最西端の地域から、平戸、五島列島にかけて、旧石器時代には陸続きであった。15,000年前に終焉を向える最終氷期の海水面より100メートル以上海進が進んでいることから、当該期の人類の残した痕跡をすべて把握することは不可能であるが、現状では遺跡の分布は比較的広い平坦面と河川・湿地が広がる場所に認められる。平戸市田平町には、九州旧石器時代研究史上、重要な位置を占める日ノ岳遺跡が存在する。日ノ岳遺跡の調査において姶良 Tn 火山灰（AT）を挟んで分層された大形の「日ノ岳型台形石器」から小型台形石器への変遷は、この地域の石器の編年研究の基礎となっており、ナイフ形石器文化の展開を考える上での指標の一つとして、研究史上の重要な位置を占めている。

旧石器時代から縄文時代への移行期については、佐世保市を中心に分布する福井洞穴や泉福寺洞穴といった洞穴遺跡において、最終氷期の終焉後の温暖化に対応して、人類が生業を変化させている様相が、細石刃から石鏃への石器組成の変化から明らかにされている。田平町周辺においては、この時期の洞窟遺跡は分布していないが、縄文時代早期から中期を中心とした、前目遺跡、つぐめのはな遺跡といった海浜部の遺跡があり、人類の環境適応のあり方を示している。つぐめのはな遺跡からは、クジラ・イルカなどの海獣骨が多く見つかることに加え、石銛や掻削器類といった石製の漁労具が検出されており、大形魚類や海棲哺乳類を対象とした漁労活動を行う場であったと考えられている。つぐめのはな遺跡からは早期後半の塞ノ神式土器が出土しており、九州地方南部地域とのつながりが想

定され、また前期の曽畑式土器と、韓国櫛目文土器との強い関連を想定し、韓半島を含めた広域にわたる交流を想定する考えもある。

この地域において再び人間の活動の痕跡が顕著に見られるようになるのは、縄文時代晩期末あるいは弥生時代早期の夜臼式の段階である。縄文時代晩期末から弥生時代中期前半にかけて、平戸市田平町の里田原と呼ばれる小盆地では、里田原遺跡が展開する。この遺跡では、縄文時代晩期末の土器が検出されており、朝鮮半島系の墓制の一つである支石墓が複数基存在する。弥生時代の遺構としては、ドングリピット、水門といった稲を含めた植物利用を表す遺構が見つかり、甕棺墓からは韓半島系の遺物である多鈕細文鏡が検出されている。また、この遺跡からは広鍬や三又鋤といった木製品が大量に見つかり、その中に未完成品を多く含むことから、木工工人の集団の存在を指摘する見解があり、分業の確立の有無という点で、弥生時代研究に対して重要な問題を提起している。弥生時代の中期後半からは、遺物があまり多くは見つかっておらず、この時期の様相については不明である。上記のように多様な遺構が検出されているものの、現状では竪穴住居跡など、明確な居住空間が確認されておらず、当該期の人々がどこで生活したのか、これまで明らかになっていない。

里田原遺跡のおおよそ２㎞南方には、里田原遺跡の時代から遅れる、弥生時代後期を中心とした墓地として、中野ノ辻遺跡があり、箱式石棺墓21基から、ガラス小玉や管玉、鉄製の刀子など豊富な副葬品が検出されており、当該期の墓制の一端を知ることができる。

このように、現状では弥生時代を通して里田原遺跡の周辺に、生活空間が確認されておらず、集団の盛衰や移動などの変遷が十分に明らかになっていない。後述するように、古墳時代の里田原遺跡周辺には、笠松天神社古墳、岳崎古墳という２基の前方後円墳が築かれていることから、これらとの関連を考える上でも解明すべき問題である。

古墳時代には、中野ノ辻遺跡のような箱式石棺墓を在地の墓制として継承しながら、古墳時代の墓制が採用されていく。松浦地区から平戸地区の海浜部において、古墳が多く見られるのは古墳時代後期から終末期（６世紀中頃～７世紀）になってからであり、これらはほとんどが円墳である。こうした中で、里田原を中心とした地域には笠松天神社古墳、岳崎古墳という２基の前方後円墳が存在し、特異である。笠松天神社古墳は、里田原を見下ろす南側の丘陵上に所在し、墳丘の形状から４世紀後半頃の古墳であると考えられている。また、里田原の北方の、海岸に面した丘陵上に築かれた岳崎古墳は、粘土で被覆した石棺あるいは石室を持つという構造上の特徴から、佐賀県唐津市の久里双水古墳との類似が考えられ、この地域ではとりわけ古い３世紀後半から４世紀初頭の古墳である可能性がある。この古墳については、主体部が未調査であり、また遺物が出土していないことから、時期が確定されない。４世紀末から５世紀ごろに築造されたという見解もあるが、いずれにせよこの地域では古い古墳であることは間違いない。

田平町周辺においては、奈良時代に関する調査成果は今のところ少ないが、「類従三代格」には、肥前国松浦郡に天平七年（745年）には弥勒知識寺があり、僧20人と水田20町が付されたという記録がある。「太宰管内志」には「松浦郡彌勒は田平と云所にあり」という記述があり、現在の里田原内にある地点が比定地とされている。考古資料としては、これとの関連が指摘される布目瓦が表採されており、同地点で採集された須恵器や土師器の年代から、９世紀半ば以降の平安時代前期のものと考えられている。また、この地域では里田原条里と呼ばれる地割の痕跡が確認されている。

平安時代の寛仁三年（1019年）には、刀伊の入寇とよばれる外敵（女真族）からの攻撃を受ける。この事件については、『小右記』と『朝野群載』には事件の経緯や侵攻してきた集団についての詳細な記述があるが、『朝野群載』には、このときに松浦の前介、源知という人物が一族を率いて刀伊と戦い、侵攻を許さなかったという記録があり注目される。『松浦家世伝』によれば、その後1069年に源久という人物が、肥前国松浦郡志佐郷に御厨検校および検非違使として下向され、1096年には、この地に梶谷城跡を築造したと記録されている。梶谷城跡についてはこれまで４次の調査がなされてきたが、この時期に城郭が築かれた明確な痕跡は確認されていない。

この源久の孫である源披は、松浦党の祖とされる人物である。建久三年（1192年）、小手田遺跡の北東１kmに所在する里城に城を構えたとされている。空堀などが残るが、現状では詳しい内容については不明である。

このように、奈良時代から平安時代にかけては、盛衰がありながらも、里田原が田平周辺の中心的

第１表　小手田遺跡周辺遺跡一覧

番号	名称	種別	出土品等	時代	所在地
1	小手田遺跡	散布地		縄文	小手田免字霄祭
2	里田原遺跡	包蔵地	貯蔵穴、土器、須恵器、把頭飾、磨製石剣	縄･弥･古･奈	里免（通称里田原）
3	里田原条里遺構	条里		奈良	〃（〃）
4	里田原支石墓	支石墓	支石墓	縄・弥	〃（〃）
5	里城址石塔群	墓地	五輪塔、宝篋印塔	中世	里免字中畑
6	里城	城跡	本丸、空堀、石塁	〃	〃字城
7	籠手田城	〃	土塁、空堀	中世	山内免字片宗・城山
8	笠松天神社古墳	前方後円墳		古墳	小手田免字椿崎（笠松天神社境内）
9	上里遺跡	散布地		先・縄	里免字上里
10	久吹遺跡	〃	ナイフ形石器、掻器	先土器	〃大津方久吹
11	久吹浜遺跡	包蔵地	土器、須恵器、石鏃	縄・古	岳崎免字久吹（福崎免）と草木原の一部
12	岳崎遺跡	散布地	掻器、石鏃、剥片	縄文	〃字岳崎
13	岳崎古墳	前方後円墳		古墳	〃字榎字網代
14	大崎みやま遺跡	散布地	ナイフ形石器、掻器、石鏃	先・縄	大久保免字田ノ頭・みやま
15	永久保遺跡	〃	黒曜石剥片	縄文	〃字永久保
16	中瀬遺跡	散布地	細石核、台形石器、ナイフ形石器	先土器	〃字ヤブ田・中瀬
17	田ノ岳遺跡	包蔵地	細石刃、細石核、台形石器、ナイフ形石器	〃	〃字大池
18	ハエ崎遺跡	〃	掻器、石錐、石鏃、土器	縄文	野田免字ハエ崎
19	野田遺跡	散布地	台形様石器、細石核、ナイフ形石器	先・縄	〃字上野田
20	つぐめのはな遺跡	包蔵地	土器片、銛先状石器、石鋸	縄文	野田免字ハエ崎（通称つぐめのはな）
21	前目遺跡	散布地		縄文	山内免字前目
22	猿新田遺跡	〃	石鏃、掻器、ナイフ形石器	先・縄	〃字猿新田
23	陣笠城	城跡		中世	日の浦免字城山
24	永田遺跡	散布地	黒曜石剥片、石鋸	縄文	山内免字馬場崎・小手田免字永田
25	坊田遺跡	〃	剥片	先・縄	小手田免字坊田
26	鴨山池遺跡	〃	石鏃、剥片、弥生土器	縄・弥	小手田免字鴨山池（しぎやまいけ）
27	中野ノ辻遺跡	墓址	ガラス玉、管玉、刀子	弥生	荻田免字中野ノ辻
28	天神塚遺跡	包蔵地	土器、石棺	弥・古・中	〃字天神塚
29	狩立遺跡	〃	土器、石包丁、青磁	〃	〃字狩立
30	田代Ａ遺跡	散布地	ナイフ形石器	先土器	田代免字焼山

な地域であったと考えられ、11世紀初頭に見られる源知という人物の子孫がこの地に移り住んで松浦党の祖となり、この地を治めていくようである。

この後、文永十一年（1274年）、弘安四年（1281年）には元軍から二度の襲撃を受けて、松浦地域は甚大な被害を受ける。

小手田という地名に関連して、小手田遺跡の北500mには、籠手田氏の居館であると考えられる籠手田城跡が存在する。籠手田城は、東西28m、南北23mの円形の曲輪を有し、二重の空堀と三重の土塁があり、またこの間に三日月状の曲輪を有している。延徳三年（1491年）から起こった、平戸を所領する弘定と里城の城主である昌による兄弟での争い「平戸・田平合戦」に際して、籠手田城を拠点とした栄は、弘定と結んで里城と戦っている。それぞれ、島原の有馬氏と、筑前の大友氏と結んで合戦を行ったが、大友氏の仲介で和睦に至った。弘定が里城を治めるようになったことで、里城は平戸の支城となり、鎌倉時代初期から続いた、里城の勢力の支配は終焉を迎えることとなったのである。

参考文献

伊藤常足編1989『太宰管内志　下巻』平文社

黒坂勝美編1999『新訂増補國史大系　第二十九巻上　朝野群載』吉川弘文館

神道大系編纂会編1993『神道大系　古典編十　類従三代格』神道大系編纂会

増補「史料大成」刊行会編1975『増補　史料大成別巻（小右記二）』臨川書店

田平町郷土誌編纂委員会1993『田平町郷土誌』田平町教育委員会

土肥利男1965「第一編　条里遺構」『多良山麓研究』

長崎県教育委員会1997『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書　第133集

長崎県教育委員会1999『長崎県埋蔵文化財調査年報６〔平成９年度調査分〕』長崎県文化財調査報告書　第150集

長崎県教育委員会1999『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書　第151集

長崎県教育委員会2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ詳説編』長崎県文化財調査報告書　第207集

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編1997『原始・古代の長崎県資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編1998『原始・古代の長崎県通史編』長崎県教育委員会

長崎県考古学会編2014『長崎県本土部地域における古墳の様相―日本列島西端の古墳の様相―』平成26年度長崎県考古学会大会発表要旨・資料集

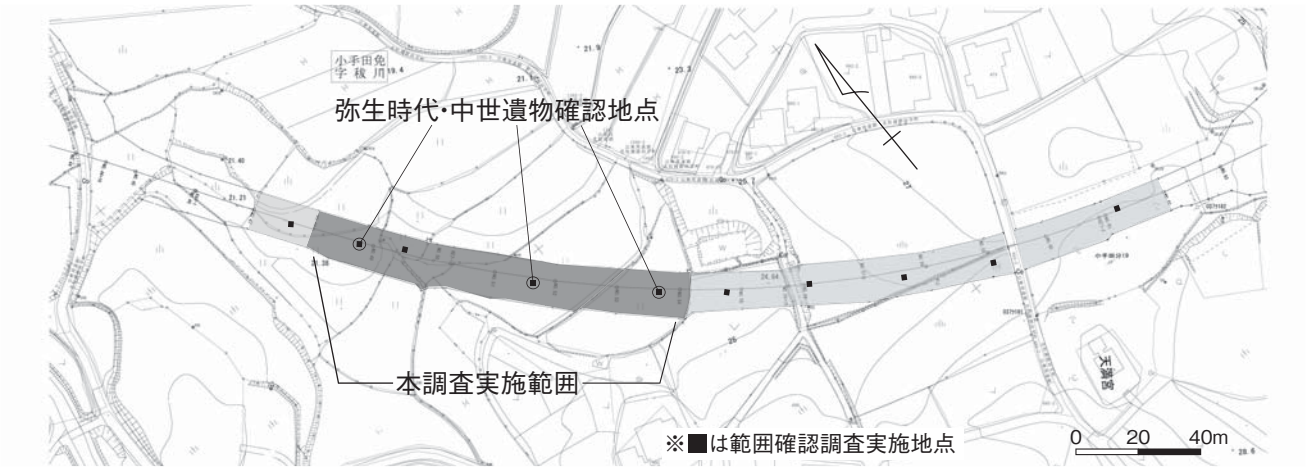
長崎県松浦市教育委員会『松浦市内遺跡確認調査(4)』史跡松浦党梶谷城確認調査報告書第19集

松浦市史編纂委員会編1975『松浦市史』松浦市史編纂委員会

吉田敬市1968「肥前松浦郡西部の歴史地理学的考察」『人文地理』20巻５号

Ⅲ　調査の概要

1．調査の概要



第３図　小手田遺跡周辺図

長さ約125m幅12mの細長い範囲が調査の対象である。調査区は、座標系（世界測地系）により４m×４mグリッドを設定し、東西方向をＡからW、南北方向を１から26と符合した。調査は重機による表土の掘削を行った後、人力による精査を行った。

調査地は、Ⅱ章１節「地理的環境」で述べたように、北に向って緩やかに傾斜する斜面に位置し、現状では耕作地である。

小手田遺跡では、これまで発掘調査がなされておらず、遺跡の内容については明らかにされていない。範囲確認調査では、中世の遺物を多く含む包含層、及び弥生時代の遺物を多く含む層を確認し、周辺に遺物包含層の広がりが想定された。このことから、籠手田城や里城といった中世の城との関係、および丘陵下の平野部に所在する里田原遺跡との関係について明らかにすることを調査の目的として本調査を行った。

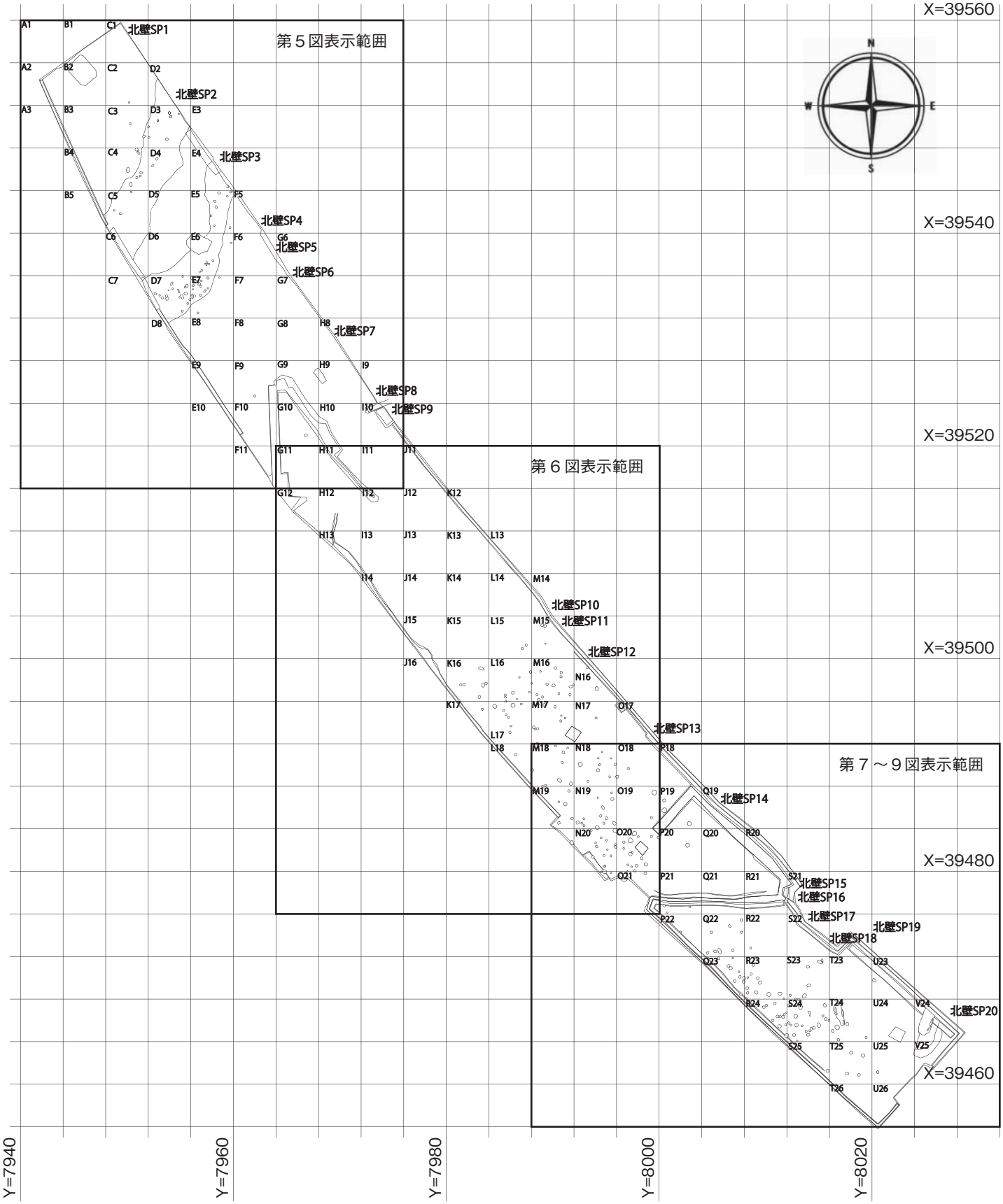
調査地はⅢ章２節「層位」の項で述べるように、風化玄武岩台地の直上に現代耕作土が乗っている場所が多く、降雨のたびに周辺の水が調査地の中に流れ込んだ。また掘削時にも湧水が多く、作業効率は著しく低下した。

調査地は、その特徴から４つに分けられる。以下、調査地の北西から南西に向かって、記述する。

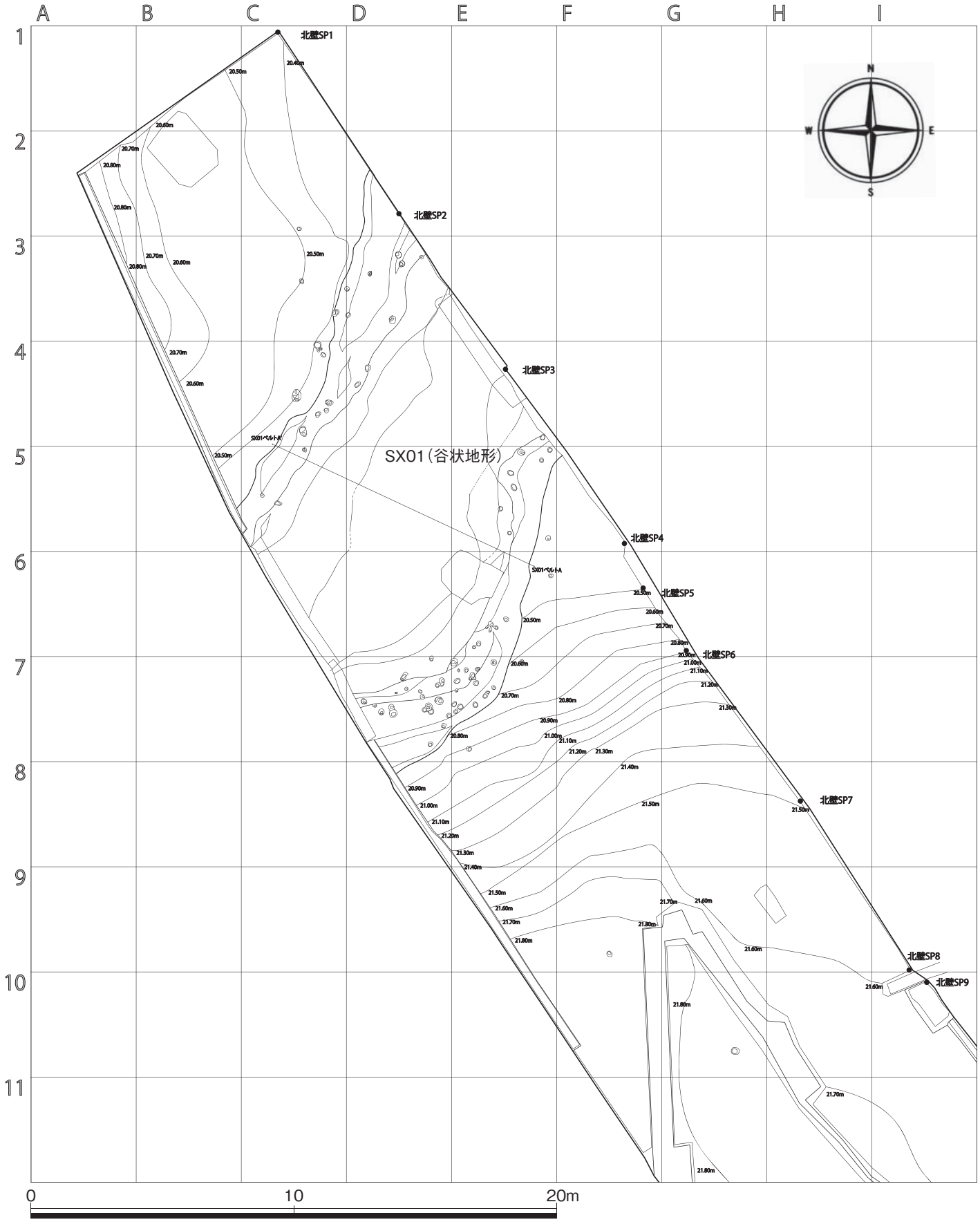
北西端からおおよそ30m（第４図北壁SP１～SP７付近）が、調査区の中で最も低い段であり、ここからはSX01（谷状地形）とその周辺にピットが多く確認された。

次のおおよそ40m（第４図北壁SP７～SP10付近）は、耕作土の直下が地山であった。風化玄武岩の巨石が多く点在しており、近世以降に耕作地の拡大を図るも、こうした風化玄武岩によって拡大を阻まれたと考えられる地形も見られた（図版２）。

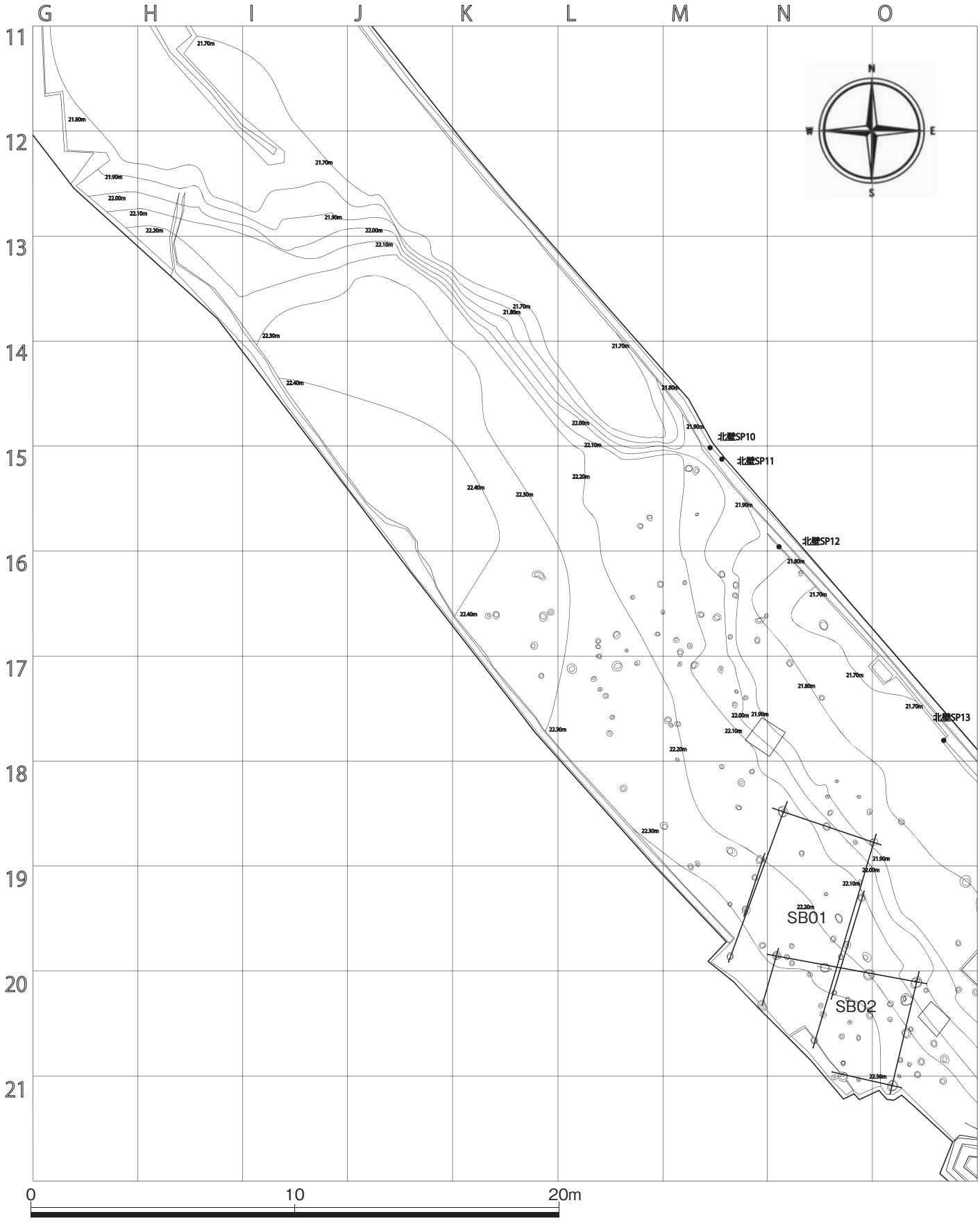
次のおおよそ25～30m（第４図北壁SP10～SP15付近）には、厚く堆積する耕作土の下に、地山に切り込むピットが多く確認され、掘立柱建物２棟（SB01、SB02）が検出された（巻頭カラー２）。



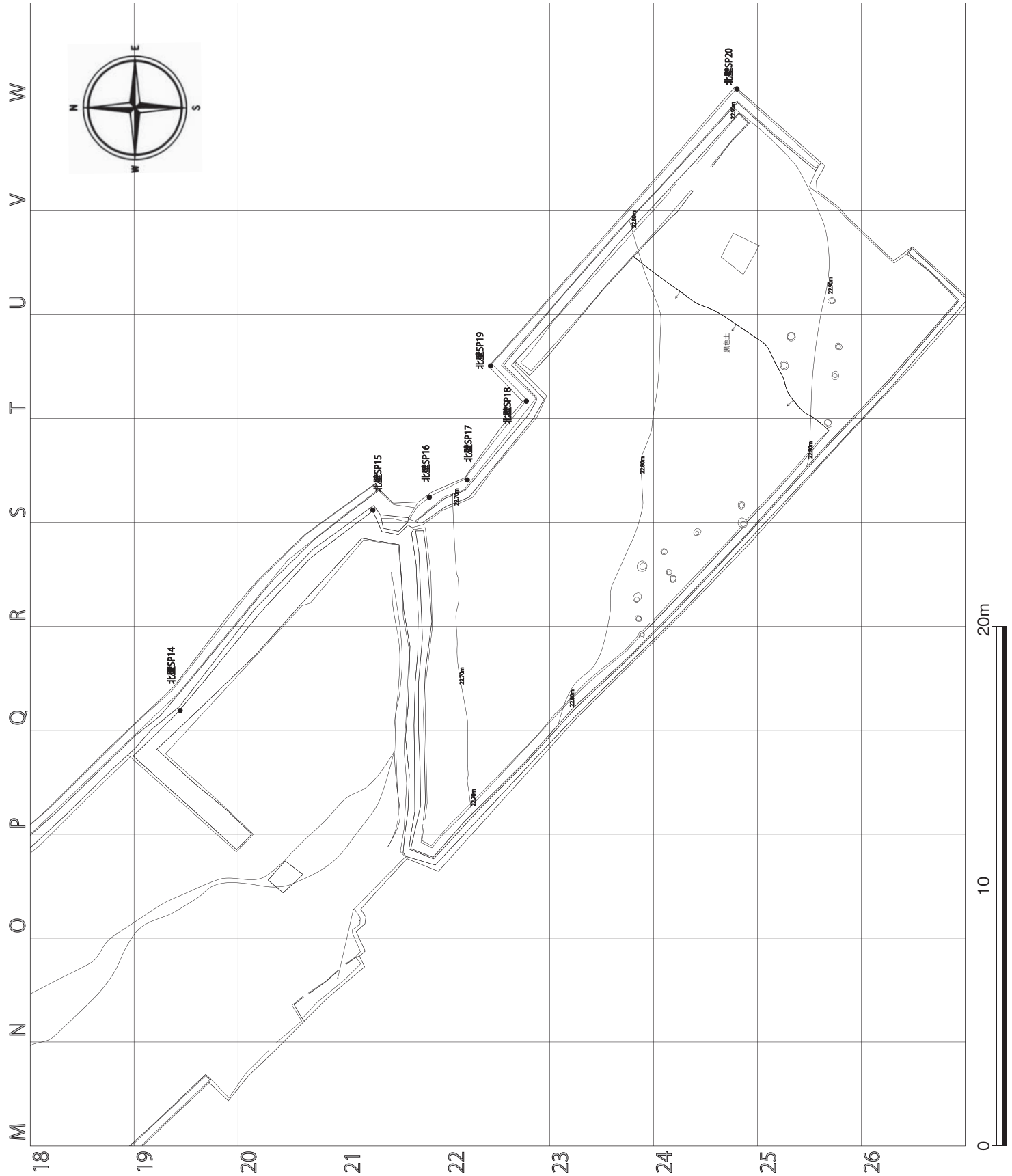
第４図　小手田遺跡遺構配置図（1/500）



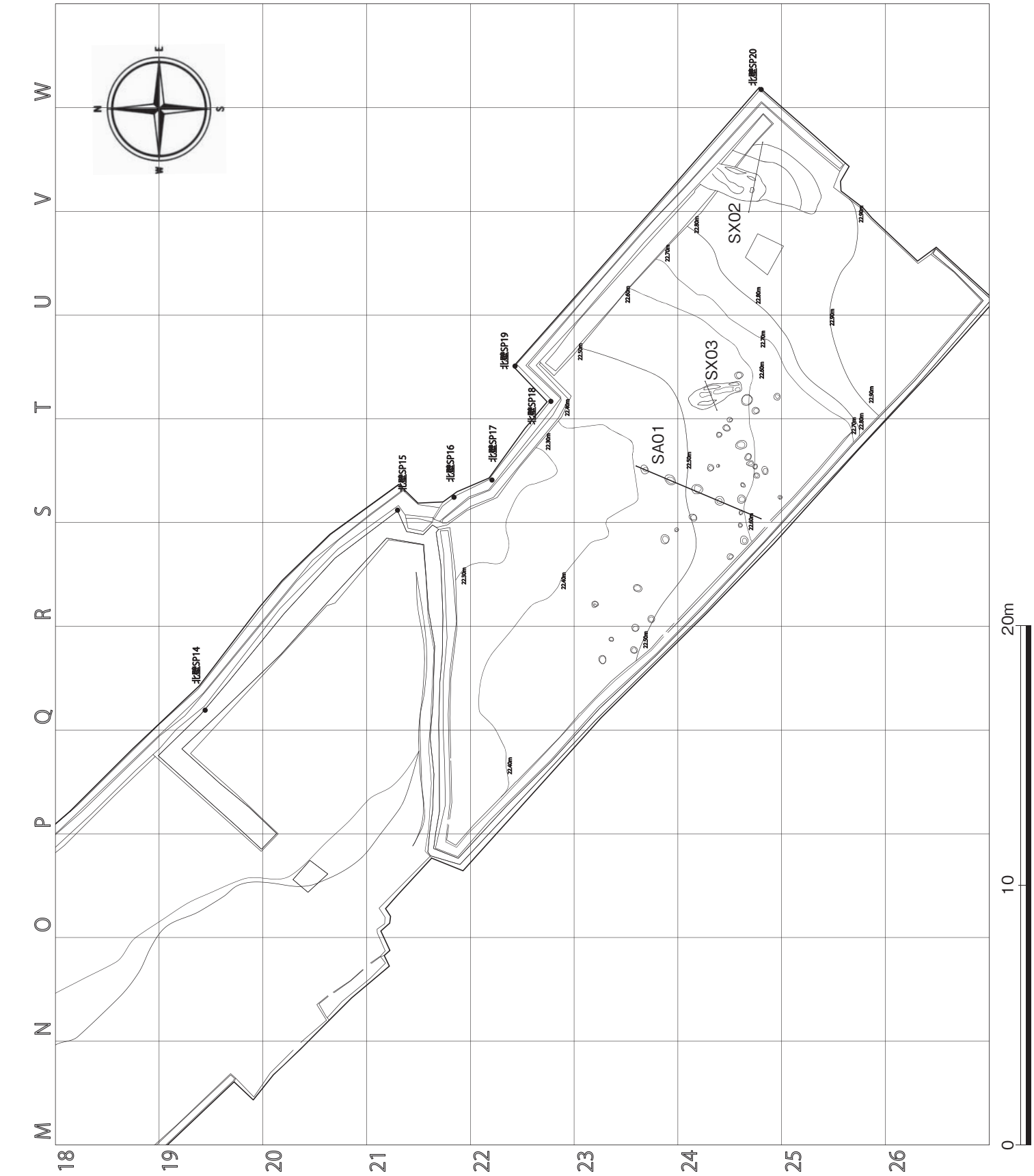
第５図　小手田遺跡遺構全体図①（1/200）



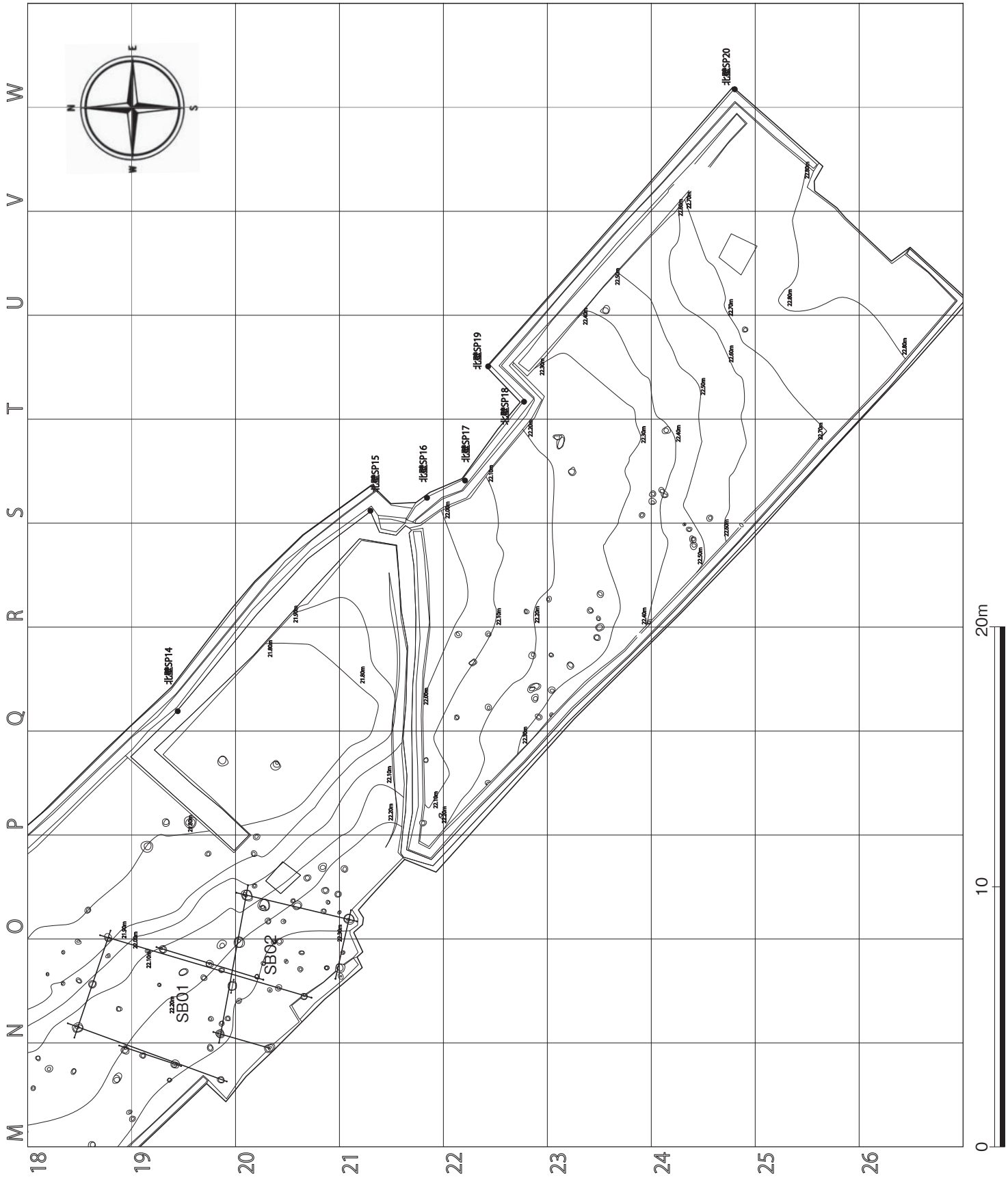
第６図　小手田遺跡遺構全体図②（１/200）



第７図　小手田遺跡遺構全体図③（1/200）



第 8 図　小手田遺跡遺構全体図④（1/200）



第９図　小手田遺跡遺構全体図⑤（1/200）

調査地の最も南東側の25～30m（第４図北壁 SP16～SP20付近）の範囲においては、遺物包含層が確認され黒色土、褐色土、青灰色土の３層に分層して調査を行った。いずれの層位からも、縄文時代から中世にかけての、３～４㎝程度の土器片が検出され、完形の土器は検出されなかった。（第７～９図）

２．層　　位

Ⅲ章２節「調査の概要」で述べたように、近現代層の直下に玄武岩風化土の地山が見られ、大部分の遺構はこれに切り込んでおり、遺構面は地山直上でしか確認されなかった。調査区の南東隅においては、３層に分層され、それぞれに切り込む遺構が確認された。

玄武岩風化土（地山）とその上方にある層との間には、しばしは黒褐色（Hue10YR2/3）の斑点が多く見られ、硬化した層が面的に広がっていた。

北壁 SP１～SP８（図10）

１～３層は、耕作土である。２、３層はにぶい黄褐色（Hue10YR4/3）を呈し、近世以降の微細な土器片を多く含む。４層以下はSX01（谷状地形）の埋土である。Ⅳ章「遺構」で後述するように、４層～７層は13世紀以降の埋立て土、８～10層は、旧石器時代から古墳時代前期までの遺物を含む層であった。11層は地山であり、にぶい褐色（Hue7.5YR5/3）を呈する玄武岩風化土である。

北壁 SP９～SP10（図11）

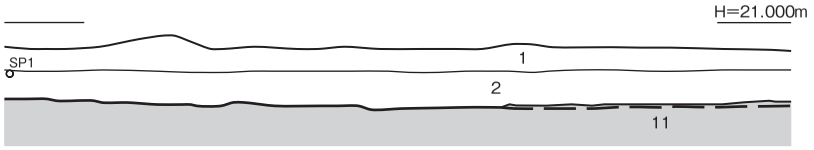
耕作土１～２層の直下に、地山（玄武岩風化土）が見られた。にぶい褐色（Hue7.5YR5/3）呈し、大型の玄武岩礫が多く見られた。

北壁 SP10～SP15（図11、12）

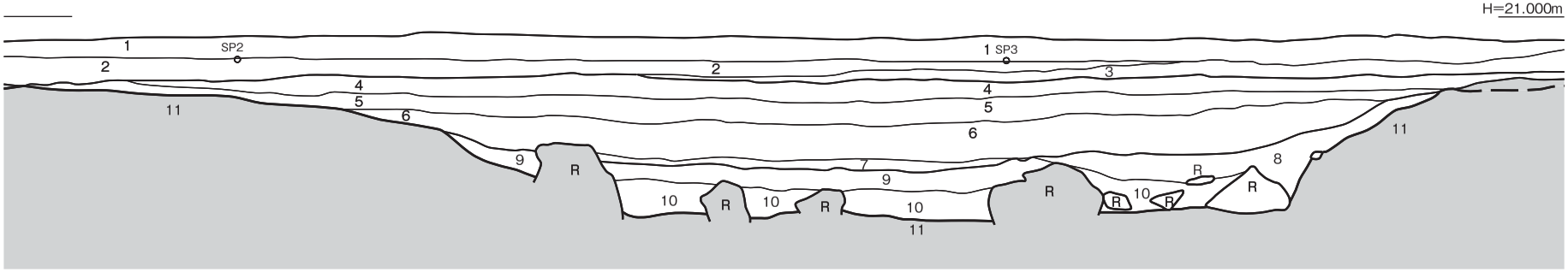
１～７層まで、近世以降の耕作土であり、８～９層は地山である。図４の遺構配置図に見られるように、東西グリッドライン21付近に、農業用水路が流れ、この南北で層位は対応していなかった。後述の黒色土、褐色土、青灰色土は本来、農業用水路の北側まで延びていたと考えられるが、近世以降に耕作によって削平されたものと考えられる。

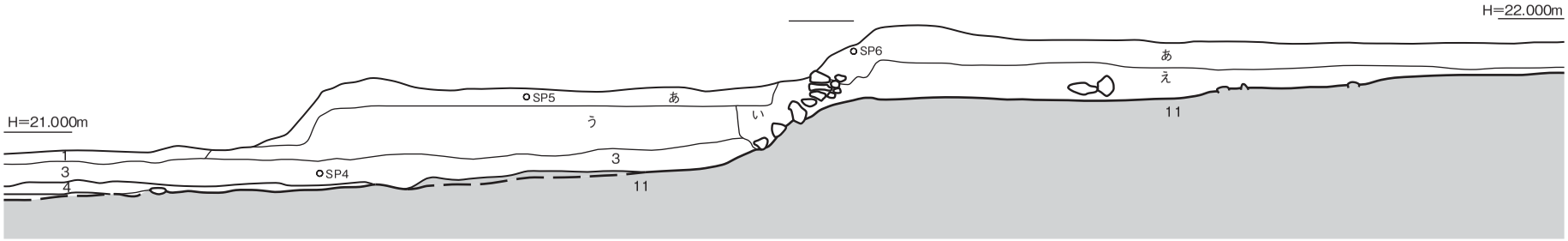
北壁 SP016～SP20（図12）

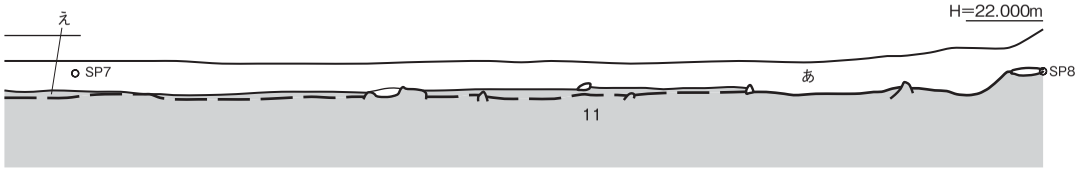
１～３層までは耕作土、４層を黒色土、７～８層を褐色土、９～10層を青灰色土として調査を行った。本書では、Ⅴ章「遺物」において特に報告の必要がある黒色土の遺物について報告するが、黒色土、褐色土、青灰色土はいずれも３～５㎝程度の遺物を包含した。



SP1−SP4　土層注記
1.黄灰色土（Hue2.5YR4/1）　しまりふつう。粘性ふつう。植物の根を多く含む。現代耕作土
2.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。黄褐色の斑点を多く含む。植物の根を多く含む。微細な土器片を多く含む。
3.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。黄褐色の斑点が見られる。2層に似るが、2層よりやや赤黒く暗い色合いを呈する。
4.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。暗褐色の斑点が多く見られる。微細な土器片を含む。炭化物を多く含む。
5.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。
6.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。4、5層に比べて暗い色合いを呈する。
7.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。6層に比べて黄褐色の玄武岩風化礫の微細片を多く含む。
また黒褐色の斑点を多く含み、全体的に暗い色合いを呈する。
8.Hue10YR4/4　（SX01南壁図の8層に対応。）
9.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。明褐色（Hue7.5YR5/6）の縦方向に長い斑点（植物痕）が多く見られる。
10.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。5〜8cm程度の円礫や10〜15cm程度の扁平な角礫、拳大から人頭大の角礫を多く含む。
礫に挟まって、旧石器時代から古墳時代前期にかけての遺物を多く含む。
11.にぶい褐色土（Hue7.5YR5/3）　しまり強い。粘性ふつう。褐色の斑点が多く見られる。







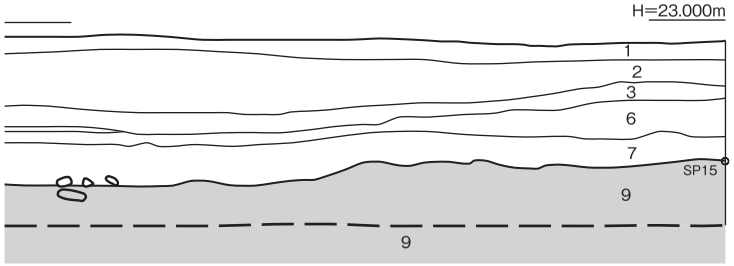
SP4−SP8　土層注記
あ.黄灰色土（Hue2.5YR4/1）（1層に同じ）
い.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまり強い。粘性強い。
う.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。拳大の礫を含む（2層と同質）
え.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。赤褐色の斑点が多く見られる。

0　4m

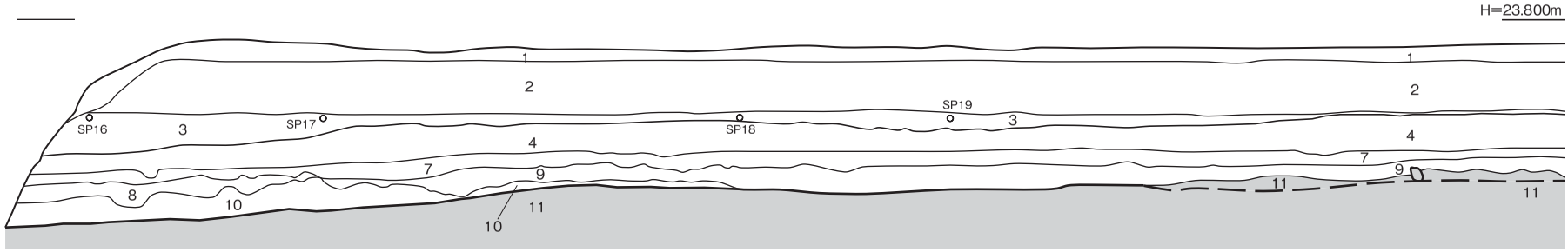
第10図　小手田遺跡北壁土層図①（1/60）

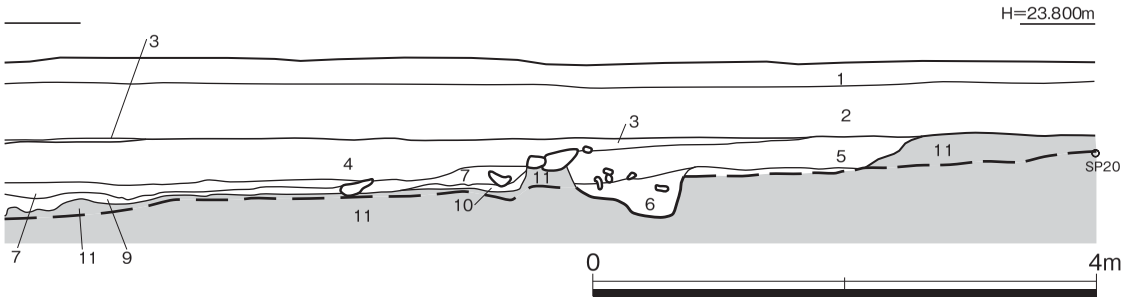
第11図　小手田遺跡北壁土層図②（1/60）

第12図　小手田遺跡北壁土層図③（1/60）



SP11－SP15　土層注記
1.褐色土（Hue7.5YR4/4）　しまり強い。粘性ふつう。植物の根を多く含む。現代耕作土
2.黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。植物の根を含む。炭化物を含む。
3.褐色土（Hue7.5YR4/3）　しまり強い。粘性ふつう。植物の根を含む。2～5cmの角礫を含む。近世遺物を含む。（試掘坑TP2において包含層と認識した層）
4.褐色土（Hue7.5YR4/4）　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。黒褐色、黄褐色の斑点が見られる。
5.褐色土（Hue7.5YR4/3）　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。褐色の斑点が見られる。
6.黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。褐色の斑点が見られる。
7.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。褐色の斑点が見られる。10cm前後の角礫を含む。
8.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。赤褐色の斑点を多く含む。地山
9.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。赤褐色の斑点を多く含む。地山z





SP16－SP20　土層注記
1.褐色土（Hue7.5YR4/4）　しまり強い。粘性ふつう。植物の根を多く含む。現代耕作土
2.黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。褐色の斑点を含む。植物の根を含む。炭化物を含む。微細な土器片を多く含む。
3.黒褐色土（Hue7.5YR4/4）　しまり強い。粘性ふつう。植物の根を含む。3～5cmの角礫を含む。褐色の斑点が横方向に縞状に見られる。
4.黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。3～5cmの角礫を含む。炭化物を含む。土器片を含む。（黒色土として調査）
5.暗褐色土（Hue7.5YR3/4）　しまりやや強い。粘性ふつう。細かく砕けた玄武岩を含む。1～10cmの角礫や20cm程度の角礫も含む。
6.黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。5～10cmの角礫を含む。炭化物を含む。
（SX02の埋土）
7.暗褐色土（Hue7.5YR3/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。3～10cmの角礫を含む。炭を含む。褐色の斑点がまばらに見られる。
8.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまりやや強い。粘性ふつう。1～10cmの角礫を含む。黒褐色の斑点が 見られる。炭と焼土片が多く見られる。
（褐色土として調査）
9.暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　しまりふつう。粘性ふつう。5～10cmの角礫を含む。炭化物を含む。遺物を包含しない。
10.褐色土（Hue7.5YR4/3）　しまりふつう。粘性ふつう。明褐色（Hue7.5YR5/6）の縦方向に長い斑点（植物痕）が多く見られる。
（青灰色として調査）
11.褐色土（Hue7.5YR4/4）　しまりやや強い。粘性ふつう。黒褐色の斑点が多く見られる。5～10cmの角礫を含む。

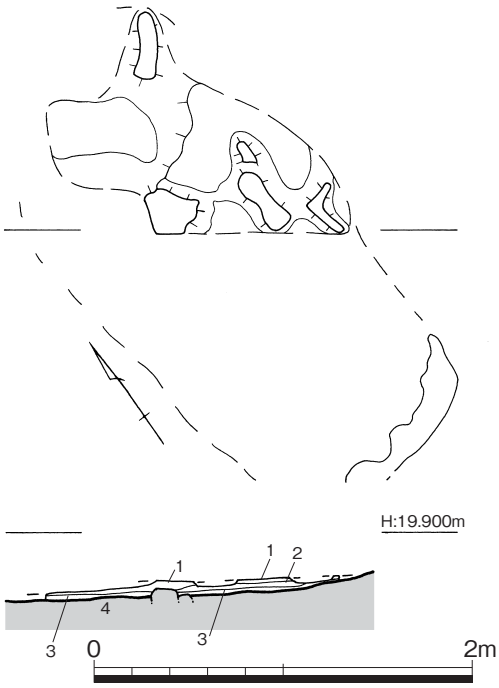
Ⅳ　遺構

SX01（谷状地形）

SX01は調査区の北側に位置する、谷状地形である（巻頭カラー１）。南側を谷頭とし、北側に向って緩やかに傾斜している。谷の最大幅は12.5mで、肩部からの最大深度は1.3mである。谷の最下面には、0.5m～４mの玄武岩の巨石が露出し、その上に①旧石器時代から古墳時代前期までの遺物を含む層（淡暗黒色土、青灰色土；第16図第16～18層）、②弥生土器を中心とし地形に沿って谷の周辺堆積する層（暗黒色土；第16図第10～15層）、③谷の上面に見られる層(暗黒色土；第16図第４～９層)、④破砕が進んだ中世土器の土器や貿易陶磁器類を偏りなく含み､同質の土が厚く堆積する層(暗褐色土；図16第１層～３層）が確認された。②と③については、土層観察用ベルトによって確認できたものの、掘り下げの過程においては弁別することはできなかった。

SX01暗褐色土（第16図下図第１～３層）

SX01は、東西方向にＣ～Ｅ、南北方向に２～７の範囲において、幅12.5mの暗褐色の土層の広がりが確認された（第５図)。埋土は均質な粘質土であり、遺物は中世から弥生時代までの、幅広い時期の遺物が見られた。検出された弥生土器や貿易陶磁器は、ほとんどが３～５㎝程度の砕片であり、埋土の中に大きな偏りを持たず満遍なく散らばっていた。暗褐色土を完掘した17層上面において焼土面が見られた（第13、14図　図版１)。



SX01内焼土土層注記
1. 明赤褐色土 Hue2.5YR５／６　硬く焼きしまる。
2. 黒色土 Hue7.5YR２／１　硬く焼きしまる。
3. 暗褐色土 Hue10YR３／４　焼きしまるが１、２層に比べてややわらかい。２層と３層の境は緩やかに変化する。
4. H 灰黄褐色土 ue10YR５／２　しまりふつう。明黄褐色（Hue10YR６／６）の斑点が多く見られる。

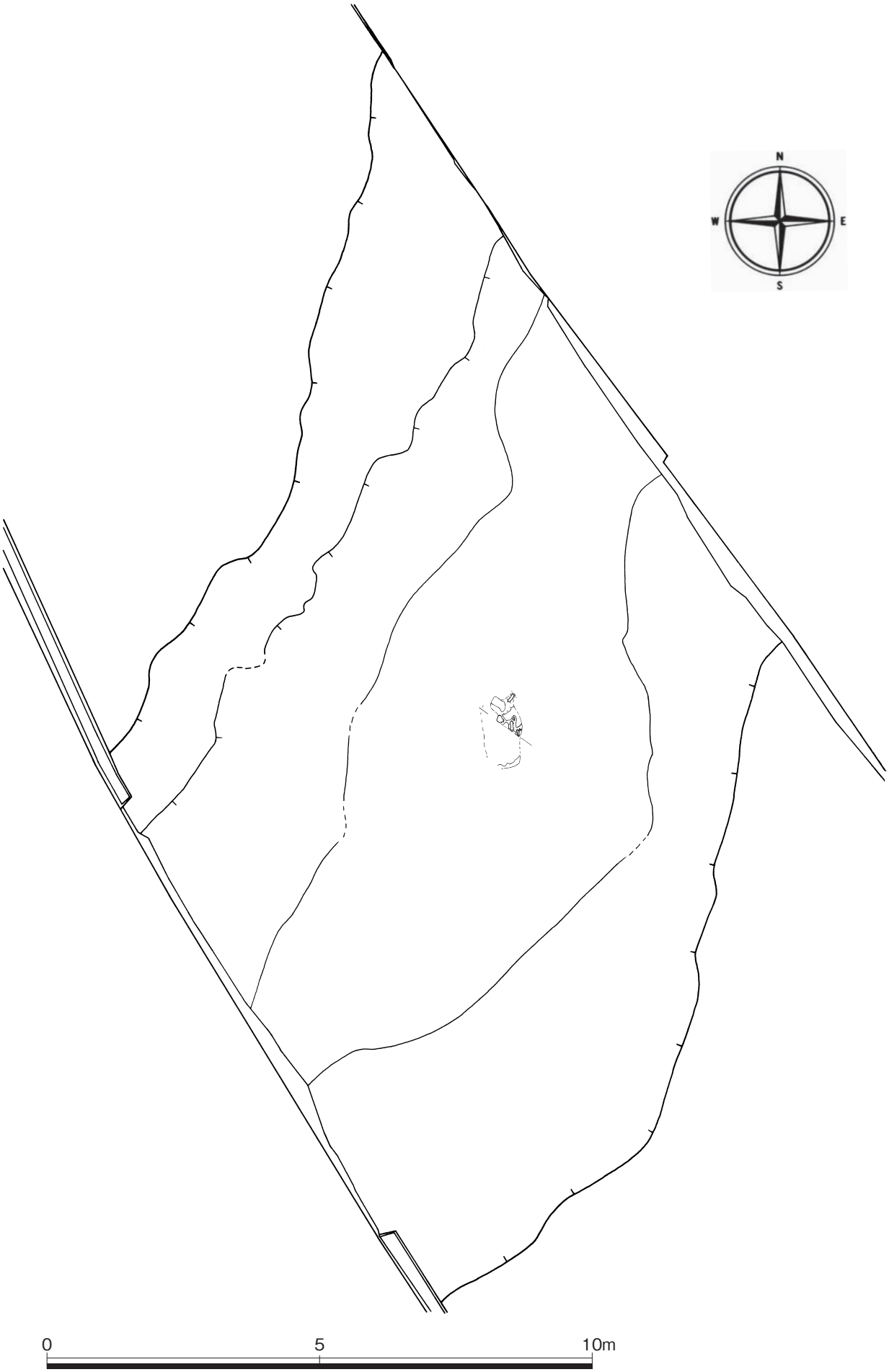
第13図　SX01内焼土遺構図（１/20）

SX01暗黒色土（第16図下図第４～15層）

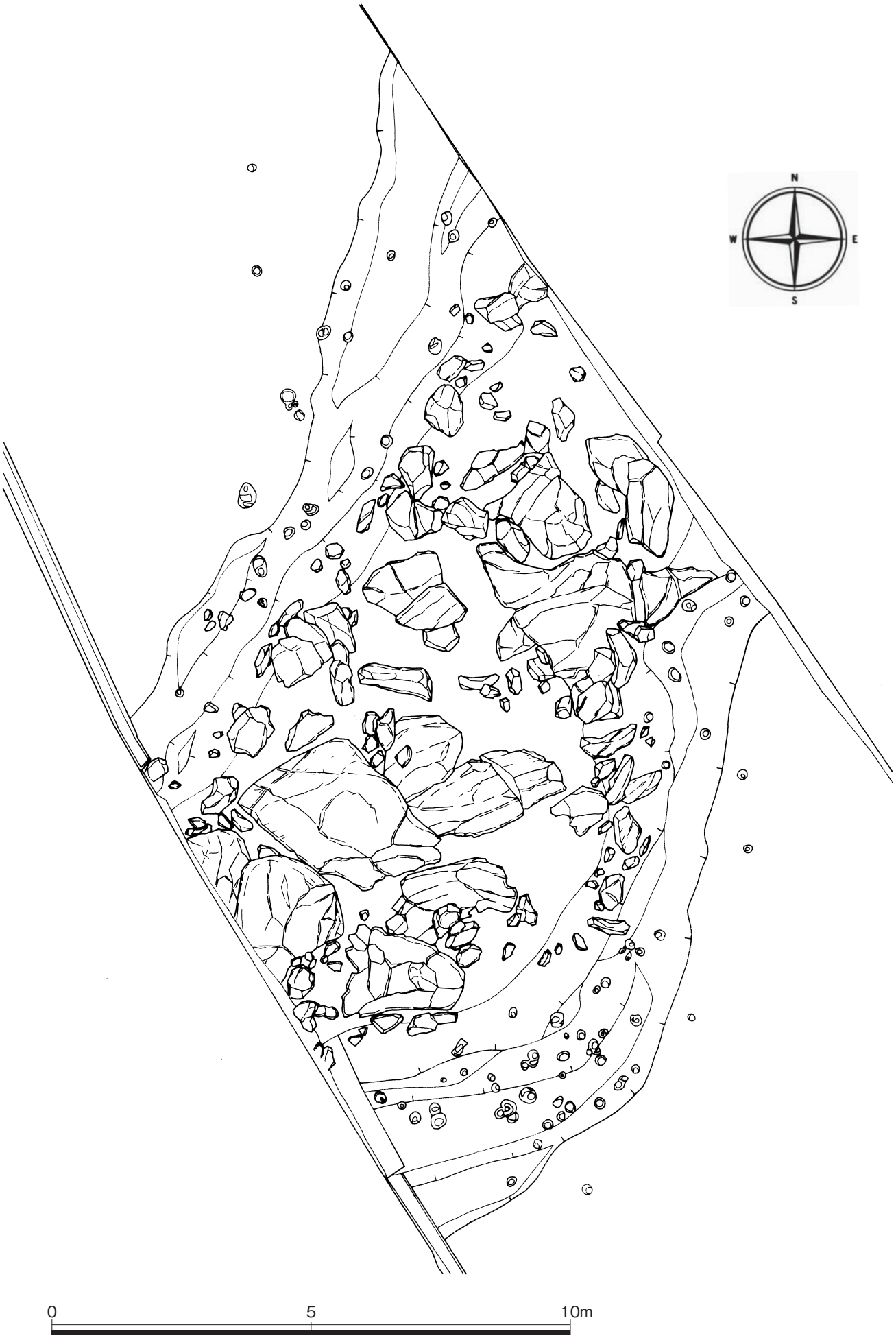
暗褐色土の除去後、谷の肩の部分から谷底付近まで、暗褐色土に比べて暗い色合いを呈する土が堆積していた。風化玄武岩の扁平な角礫に挟まって、弥生土器が多く検出された。暗褐色土に含まれる遺物に比べると、遺物は大形の破片が多い。また谷の右岸と左岸に、ほぼ同質の土が堆積していたものの、遺物はほとんど左岸に集中しており、遺物の分布に偏りが見られた。

SX01淡暗黒色土、青灰色土（第16図下図第16～18層）

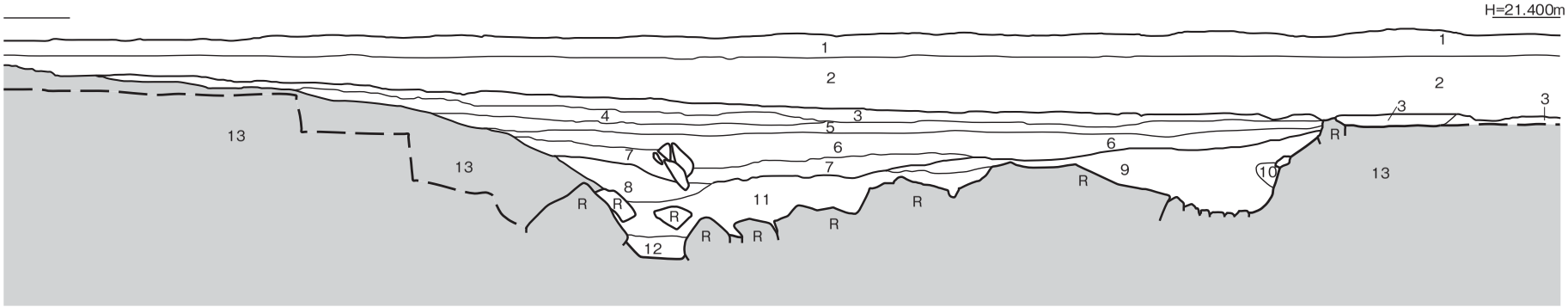
谷の底部には、灰黄褐色の土が堆積していた。さらにこの層の除去後、風化玄武岩の扁平な礫が非常に多く見られる層があり、その下は巨大な風化玄武岩が多く露出する谷底であった。旧石器時代から古墳時代前期にかけての遺物が見られた。

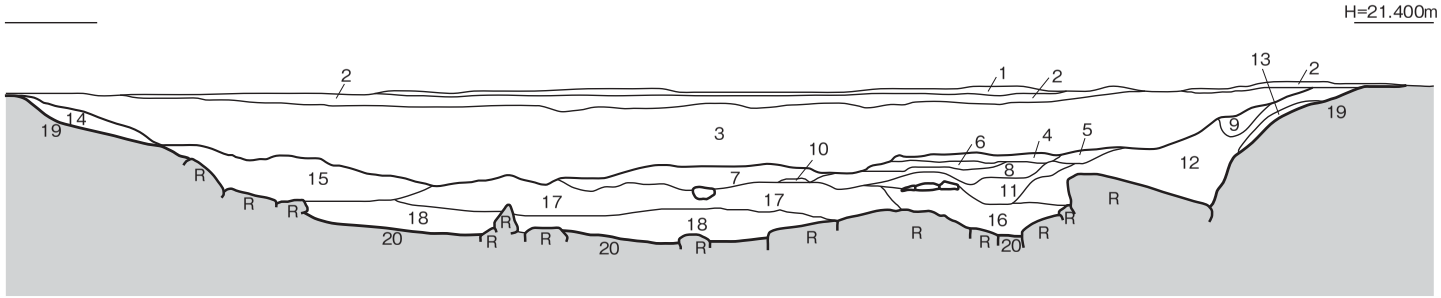


第14図　SX01暗褐色土除去後状況図（1／100）



第15図　SX01完掘状況図（1／100）





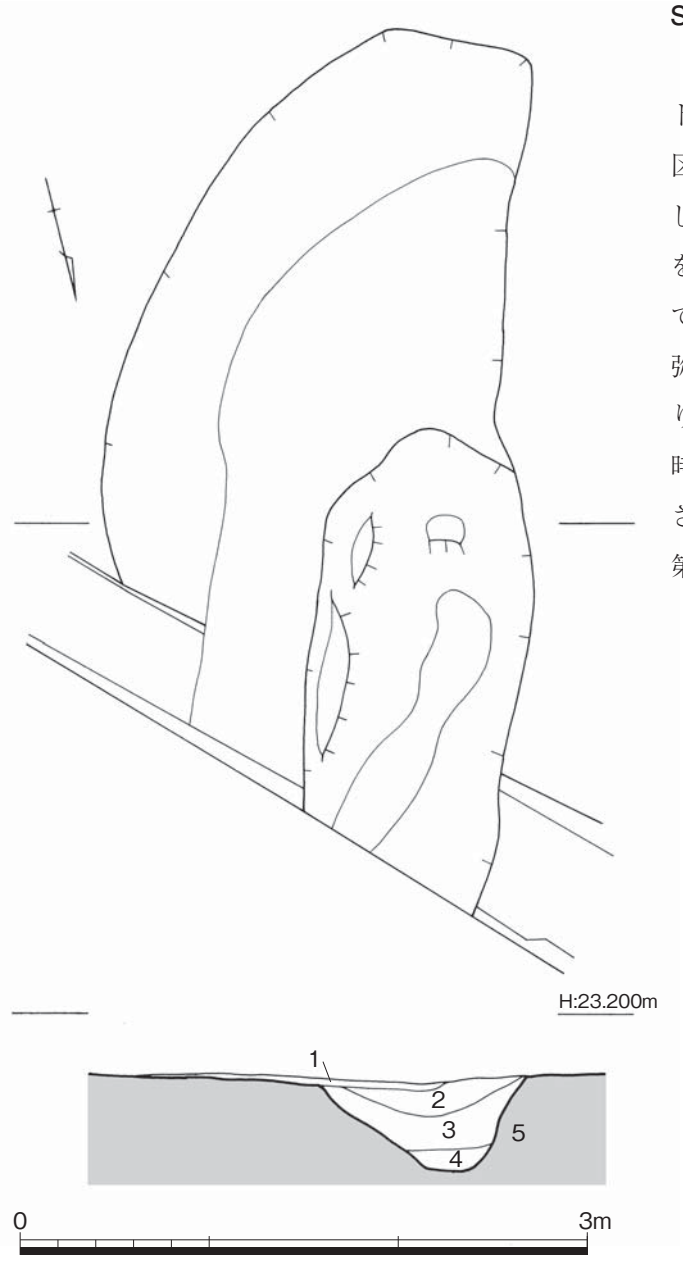
調査区南壁（SX01範囲）土層注記（上図）
1.黄灰色土（Hue2.5YR4/1）　しまりふつう、粘性ふつう、植物の根を多く含む（現代耕作土）
2.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまりやや強い。粘性ふつう、黒褐色の斑点が横方向に縞状に見られる（根の痕跡）
3.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。微細な土器片を含む。2層との間にマンガン粒が多く見られる。4層に比べて黄色がかった色合い呈する。
4.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。赤褐色の斑点が多く見られる。3層に比べてやや黒色がかった色合いを呈する。マンガン粒は3層よりは少ない。
5.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。赤褐色の斑点が見られる。黒褐色の斑点が多く見られる。
6.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。3～5層に比べてきめが細かく、均質である。炭をわずかに含む。
7.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。黒褐色の斑点が見られる。6層に比べて黒味がかった色合いを呈する。
8.褐色土（Hue10YR4/4）　しまりふつう。粘性やや強い。黒褐色の斑点をわずかに含む。炭をわずかに含む。7層に比べてしまりが若干弱い。微細な土器片を含む。
9.褐色土（Hue10YR4/6）　しまりやや強い。粘性ふつう。黒褐色の斑点をわずかに含む。炭をわずかに含む。
10.褐色土（Hue10YR4/4）　しまりやや強い。粘性やや強い。3cm程度の角礫を含む。炭をわずかに含む。
11.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。明褐色（Hue7.5YR5/6）の縦方向に長い斑点（植物痕）が多く見られる。
12.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。5～8cm程度の円礫や10～15cm程度の扁平な角礫、拳大から人頭大の角礫を多く含む。礫に挟まって、旧石器時代から古墳時代前期にかけての遺物を多く含む。
13.にぶい褐色土（Hue7.5YR5/3）　しまり強い。粘性ふつう。褐色の斑点が多く見られる。

SX01土層観察用ベルト北側壁面土層図（下図）
1.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまり強い。粘性ふつう。明黄褐色（Hue10YR6/6）の斑点が見られる。黒褐色（Hue10YR2/3）の斑点が多く見られる。2層との境に上記黒褐色の斑点が横に並ぶ。
2.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまり強い。粘性ふつう、黒褐色の斑点が見られるが、1層に比べてやや少なく、やや明るい色合いを呈する。
3.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまり強い。粘性ふつう。微細な土器片や炭化物を多く含み、1、2層に比べて暗い色合いを呈する。
4.暗褐色土（Hue10YR3/3）　しまりふつう。粘性やや強い。0.5～1.5cm程度の焼土片を非常に多く含む。炭を多く含む。
5.明赤褐色土（Hue5YR5/6）　しまりやや強い。粘性やや強い。11層との間あたりに厚さ1cm程度の炭が見られる。
6.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりふつう。粘性ふつう。焼土片、炭を含むが4、8層に比べると非常に少ない。
7.暗灰黄色土（Hue2.5YR4/2）　しまりやや強い。粘性ふつう。焼土片をわずかに含む。炭化物を含む。17層に見られる明黄褐色（Hue10YR6/6）がくすんだような斑点が多く見られ、17層をベースにした土層である。
8.暗褐色土（Hue10YR3/3）　しまりふつう。粘性やや強い。焼土片、炭を多く含む。4層に似る。
9.褐色土（Hue10YR3/3）　しまりふつう。粘性やや強い。焼土片、炭を非常に多く含む。13層に切り込むピットである。平面では確認できなかった。
10.明赤褐色土（Hue5YR5/8）　しまり強い。粘性ふつう。焼土である。下方は黒色を呈する。
11.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりふつう。粘性ふつう。炭化物を含む。4、6、8層などに比べてキメが細かい。
12.灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　しまりふつう。粘性ふつう。11層と基本的に同質だが直径10～20cm程度の角礫を非常に多く含む。この礫の間に挟まって弥生時代の遺物が多く見られた。
13.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまり強い。粘性やや強い。炭化物をわずかに含む。土の粒子が揃い、キメが細かい。
14.灰褐色土（Hue7.5YR4/2）　しまりふつう。粘性やや強い。
15.にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物をわずかに含む。13層と基本的に同質である。
16.黒褐色土（Hue10YR3/2）　しまりやや強い。粘性やや強い。拳大の扁平な角礫を非常に多く含む。礫の間に挟まって遺物を多く含む。
17.暗灰黄色土（Hue2.5Y5/2）　しまりやや弱い。粘性強い。暗灰黄色のキメの細かい土をベースに明黄褐色（Hue10YR6/6）の2～3cm程度のブロックを多く含む。
18.灰黄褐色土（Hue10YR6/2）　しまり強い。粘性強い。8～15cm程度の角礫が堆積し、その間に粘土がつまる。扁平な円礫も混じる。
19.にぶい褐色土（Hue7.5YR5/4）　しまりふつう。粘性ふつう。白色の細かい砂粒を含む。黒褐色の斑点がやや多く見られる。
20.黄橙色土（Hue10YR5/2）　しまり強い。粘性なし。風化玄武岩が張り付いた層。黒色の鉱物が付着している。

第16図　SX01土層図（1／60）

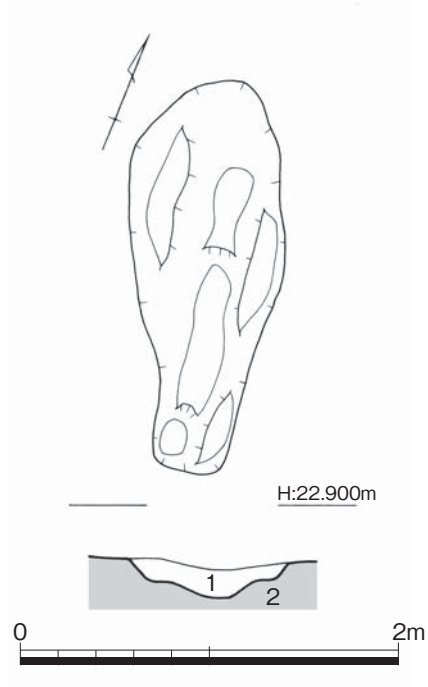
SX02

SX02は調査区の南東隅（Ｖ24、Ｖ25グリッド）において、検出された土坑である。調査区外に伸びる。溝である可能性が残る。検出した部分での長さ４ｍ、幅２ｍ、深さ0.5mを計る。南東側の埋土は非常に薄く、北東側で急激に深くなる。埋土は４層に分層される。弥生時代の遺物を包含していたが、砕片であり、実測に耐えるものではなかった。遺構の時期については、弥生時代の遺物のみが検出されたものの、調査区北壁の土層観察から、第12図、中世の遺構の可能性がある（図版２）。



SX02土層注記
1. にぶい黄褐色土 Hue10YR 4／3　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を含む。1～3㎝の円礫を含む。
2. 褐色土 Hue10YR 4／4　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を含む。1～2㎝の角礫を多少含む。1層に比べてしまりがやや弱い。
3. 暗褐色土 Hue10YR 3／4　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を多少含む。1～5㎝の円礫を多少含む。
4. にぶい黄褐色土 Hue10YR 5／4　しまりふつう。粘性やや強い。
5. 褐色土 Hue7.5YR 4／3　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を含む。1～5㎝程度の礫を多く含む。

第17図　SX02遺構図（1／40）

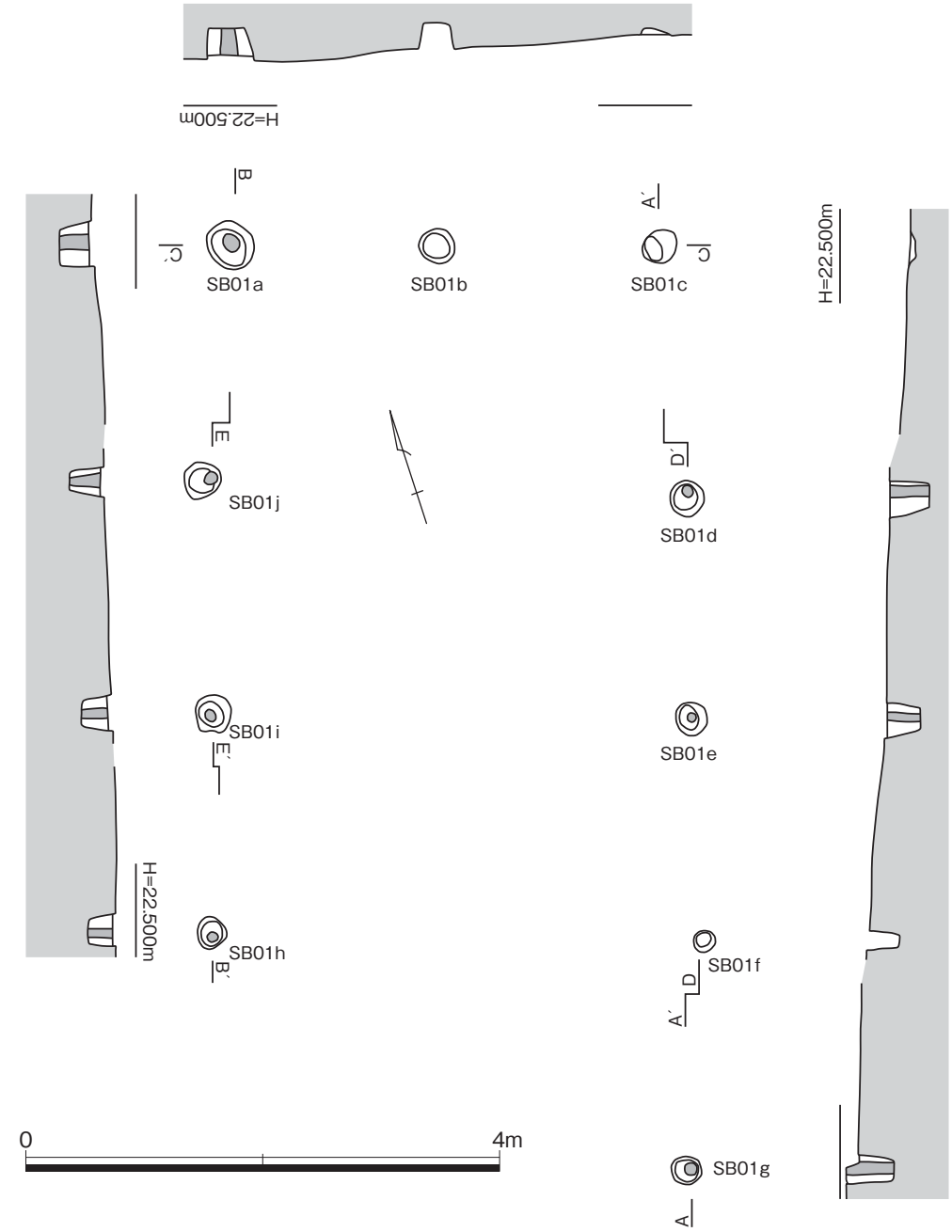


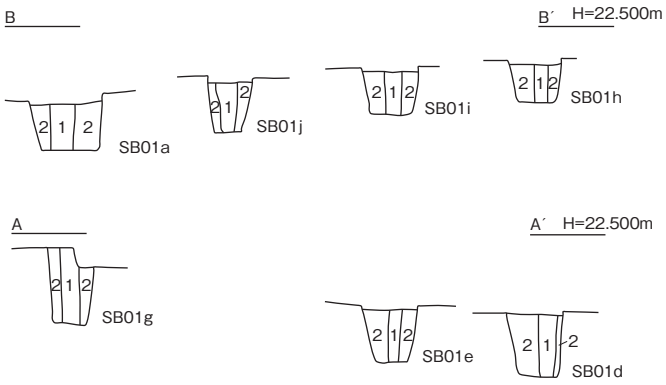
SX03土層注記
1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4／2　しまりふつう。粘性やや強い。炭化物を含む。
2. にぶい褐色土 Hue7.5YR 5／4　しまりやや強い。粘性やや強い。黒褐色の斑点が多く見られる。

第18図　SX03遺構図（1／40）

SX03

SX03は、Ｔ24グリッドにおいて黒色土の除去後、検出された長楕円形の土坑である。長さ2.1m、幅0.8m、深さ0.15mを図る。埋土には一律、炭化物を含む灰黄褐色土（Hue10YR4/2）が堆積しており、遺物は含まれなかった（図版３）。





SB01土層注記

SB01-a
1. 褐色土（Hue7. 5YR 4 / 6 ）　しまりやや強い。粘性やや強い。2 ㎝程度の円礫を含む。
2. 褐色土（Hue7. 5YR 4 / 4 ）　しまりふつう。粘性やや強い。微細な焼土片を含む。

SB01-c
1. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 6　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を含む。

SB01-d
1. 暗褐色土 Hue7. 5YR 3 / 3　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。
2. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 3　しまりふつう。粘性ふつう。炭化物を含む。

SB01-e
1. 暗褐色土 Hue7. 5YR 3 / 4　しまり強い。粘性ふつう。微細な赤色の土を含む。
2. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 4　しまりやや弱い。粘性ふつう。炭化物を多少含む。

SB01-g
1. 暗褐色土 Hue7. 5YR 4 / 6　しまり強い。粘性ふつう。微細な土器片を含む。炭化物を含む。1 ～ 3 ㎜程度の角礫を含む。
2. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 6　しまりやや強い。粘性ふつう。炭化物を含む。微細な赤色の土をわずかに含む。

SB01-h
1. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 4　しまりやや強い。粘性やや強い。
2. 暗褐色土 Hue7. 5YR 3 / 4　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を多少含む。

SB01-i
1. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 6　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を含む。微細な焼土片を含む。
2. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 4　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を含む。

SB01-j
1. 褐色土 Hue7. 5YR 4 / 4　しまり強い。粘性ふつう。炭化物を含む。
2. 暗褐色土 Hue7. 5YR 3 / 4　しまりやや強い。粘性ふつう。炭化物を含む。3 ～ 5 ㎝程度のにぶい黄褐色（Hue10YR 4 / 3 ）の粘土ブロックを含む。

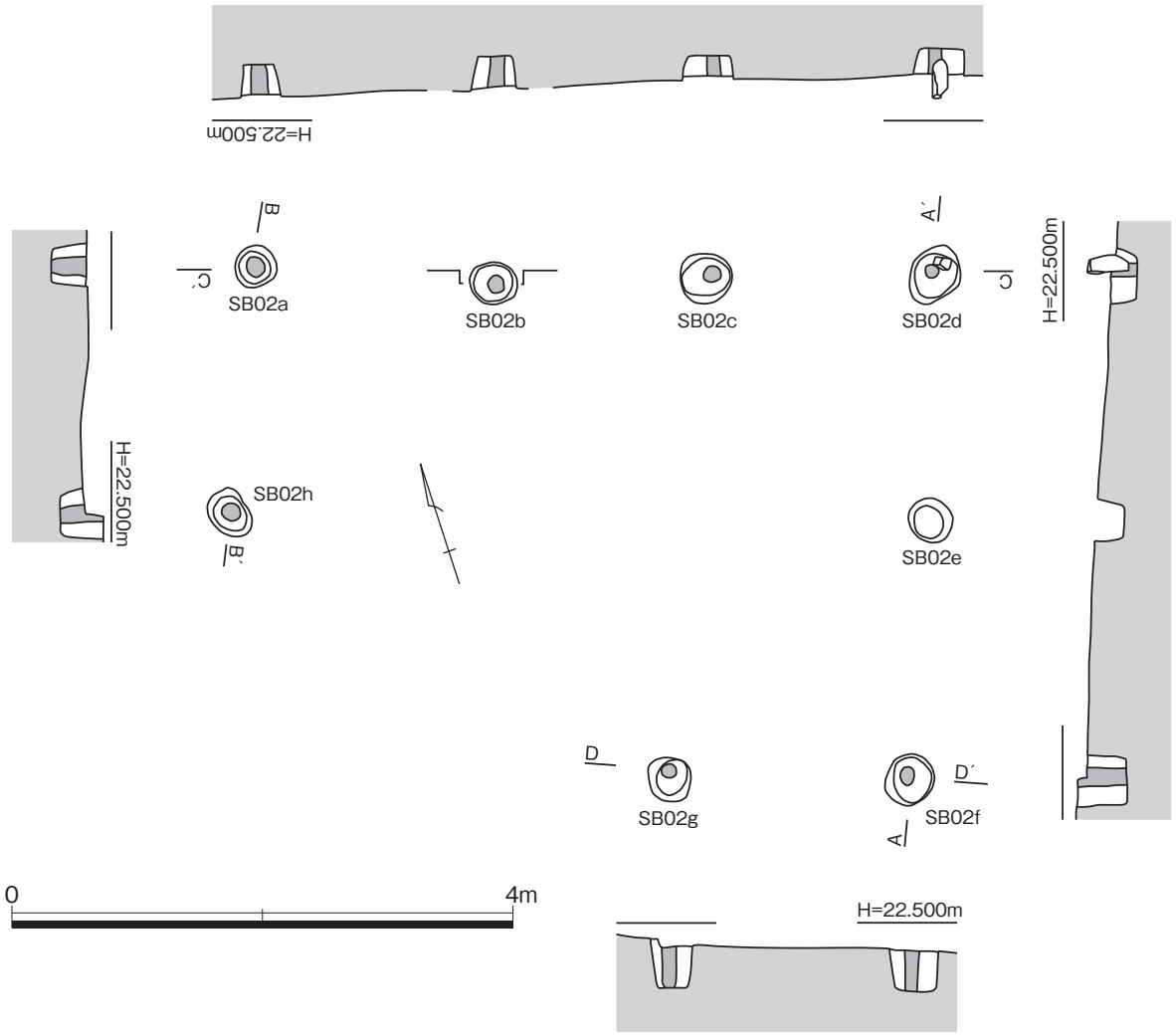
第19図　SB01遺構図、柱穴土層断面図（1 /60、1 /40）

掘立柱建物跡

今回の調査では、N19、N20を中心とした範囲において、２棟の掘立柱建物跡を検出した。柱穴同士の切り合い関係がないことから、新旧について直接は知りえなかった。

SB01（掘立柱建物）（第19図　巻頭カラー２）

SB01は梁行二間、桁行四間以上と考えられる掘立柱建物である。N19を中心とした範囲において検出された。調査区の制約によって、検出しえたのは10基の柱穴であるが、調査区外にも柱穴が存在すると考えられる。梁方向の柱間寸法は1.9m、桁方向の柱間寸法も1.9mを計る。柱穴は直径30cmほどの円形を呈し、柱穴からは太さ10cm程度の柱痕跡が確認された。主軸はN-20°-Eを指針する。柱掘方埋土は、暗褐色土、褐色土で構成される。SB01-gからは白磁片が検出された（第27図-１）。SB02と重なるため時期的な前後関係があるが、両者の前後関係については不明である。SB01-cは、柱穴の下底部のみ残存する。またSB01-aからSB01-cまでの下底部のレベルがおおよそ一致している。

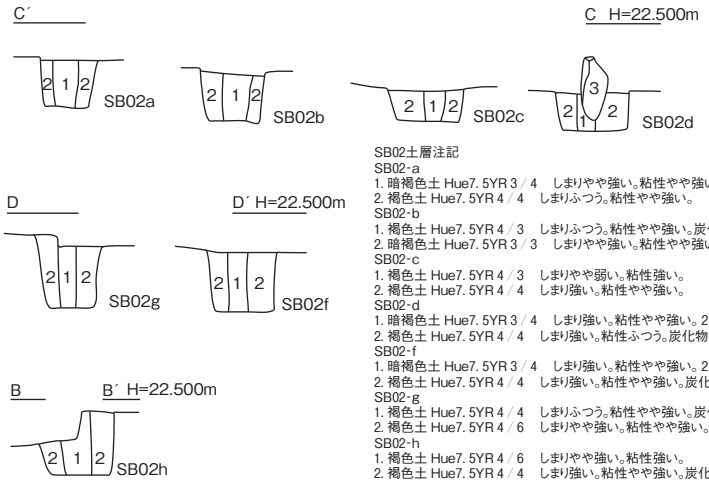


第20図　SB02遺構図（１/60）

SB02（掘立柱建物）

SB02は、梁行二間、桁行三間の掘立柱建物である。梁方向の柱間寸法は2.0m、桁方向の柱間寸法は1.7～1.9mを計る。N20を中心とした範囲において検出された。柱穴は直径10～13cm程度の円形である。SB02dでは、柱痕の横に長さ30cm、幅13cm程度の角柱状の礫が差し込まれていた。柱穴から、

時期のわかる遺物が検出しておらず、時期については不明である。主軸はN-89°-Wを指針する。

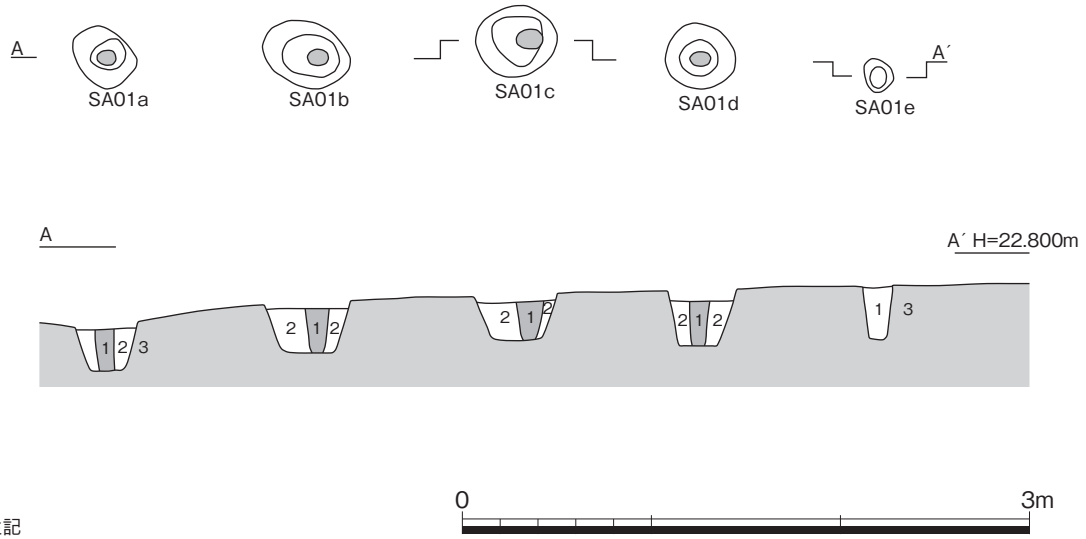


SB02土層注記
SB02-a
1. 暗褐色土 Hue7.5YR 3/4　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を多少含む。2層に比べて、しまりがやや弱い。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまりふつう。粘性やや強い。
SB02-b
1. 褐色土 Hue7.5YR 4/3　しまりふつう。粘性やや強い。炭化物を含む。微細な焼土片を含む。
2. 暗褐色土 Hue7.5YR 3/3　しまりやや強い。粘性やや強い。
SB02-c
1. 褐色土 Hue7.5YR 4/3　しまりやや弱い。粘性強い。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまり強い。粘性やや強い。
SB02-d
1. 暗褐色土 Hue7.5YR 3/4　しまり強い。粘性やや強い。2層に比べて粘性が強い。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまり強い。粘性ふつう。炭化物をやや多く含む。黄褐色の斑点が多く見られる。
SB02-f
1. 暗褐色土 Hue7.5YR 3/4　しまり強い。粘性やや強い。2層に比べて粘性が強い。2層に比べて粘性がやや強く、しまりもやや弱い。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を含む。
SB02-g
1. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまりふつう。粘性やや強い。炭化物をやや多く含む。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/6　しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を多少含む。
SB02-h
1. 褐色土 Hue7.5YR 4/6　しまりやや強い。粘性強い。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/4　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を多少含む。地山由来の土を含む。

第21図　SB02柱穴土層断面図（1/40）

SA01（柵列）

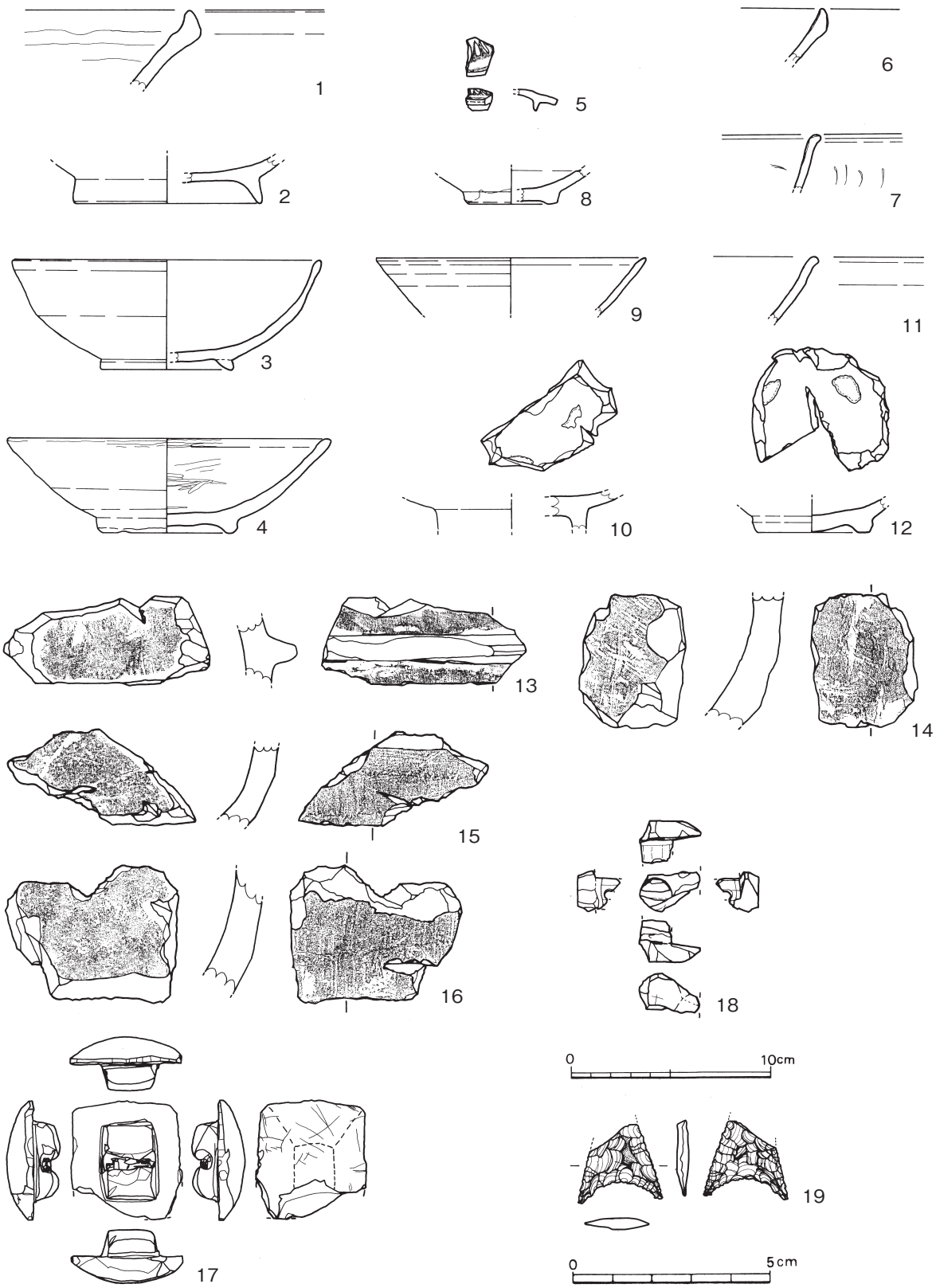
S23、S24グリッドにおいて、黒色土の除去後、4間の柵列を検出した。南北方向に4.3mを計る。柱間寸法は0.9mから1.1mを計る。柱痕が確認されたが、あまり整然と並んでいない。主軸はN-23°-Eを指針する。柱穴は、略円形あるいは楕円形を呈し、直径15cm～45cmを測る。遺物は検出されなかった。



SA01注記
SA01-a
1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4/2　しまり強い。粘性やや強い。黒褐色の斑点が見られる。
2. 褐色土 Hue7.5YR 4/3　しまり強い。粘性やや強い。
SA01-b
1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4/2　しまりやや強い。粘性やや強い。
2. にぶい褐色土 Hue7.5YR 5/3　しまり強い。粘性やや強い。
SA01-c
1. 灰黄褐色土 Hue10YR 4/2　しまり強い。粘性やや強い。炭化物を含む。
2. にぶい褐色土 Hue10YR 4/3　しまりやや強い。粘性やや強い。
SA01-d
1. 暗褐色土 Hue10YR 3/3　しまり弱い。粘性やや強い。炭化物を含む。
2. 暗灰黄色土 Hue2.5YR 4/2　しまりふつう。粘性やや強い。炭化物を含む。
SA01-e
1. にぶい褐色土 Hue7.5YR 5/4　しまりやや強い。粘性やや強い。
3層　にぶい褐色 Hue7.5YR 5/4　しまりやや強い。粘性やや強い。黒褐色の斑点が多く見られる。

第22図　SA01遺構図、柱穴土層断面図（1/40）

Ⅴ　出土遺物



第23図　SX01暗褐色土出土遺物（19は２／３、それ以外は１／３）

SX01（谷状地形）出土遺物

SX01　暗褐色土出土　土器（第23図１～12）

捏鉢（１）

1 は捏鉢の口縁部である。内面は強い回転ナデにより段をなし、外面は平滑に仕上げる。口唇部から外面口唇部のくびれ部直下にかけて、黒色を呈す。

土師器　杯（２～３）

2、**3** は杯の高台部である。**2** は内外面ともにナデ調整が施されている。胎土に砂粒を少量含み、焼きがやや甘い。**3** は胴部で弱く屈曲し、低い高台を持つ。内外面ともに研磨が施され、器面は精緻である。胎土は精良であり焼成も良好である。

黒色土器Ｂ類（４）

4 は内外面が黒色を呈する黒色土器Ｂである。口唇部の内面がやや肥厚し、低い高台を持つ。外面には回転ヘラ削りの痕跡を残す。胎土に含まれる微細な岩石により、器面がキラキラ光る。被熱した結晶片岩の可能性がある。

青白磁　合子蓋（５）

5 は青白磁の合子蓋である。外面にのみ施釉し、内面は露胎とする。

白磁椀（６～８）

6、**7** は白磁の口縁部である。**6** は玉縁口縁である。内外面ともに0.5㎜程度に厚く施釉する。**7** は口唇部が強く屈曲する。口唇端部に厚く施釉し、端部の形状は丸い。内外面を沈線によって縦方向に施文する。**8** は白磁の削りだし高台である。施釉は一部高台部まで及ぶ。外面の杯部と高台部において、釉薬が厚く溜まり、過度に肥厚している箇所もある。釉薬に気泡が多く見られ、粗雑な印象を受ける。素地は黒色の斑点が見られるが、比較的良好である。

越州窯系青磁　椀（９、10）

9 は越州窯系青磁の椀の口縁部である。内面は口唇部が回転ヨコナデによって平滑に仕上げられており、外面は口唇部直下が回転ヨコナデによって弱く窪んでいる。釉薬は非常に発色が悪いが、素地は比較的精良である。**10**は越州窯系青磁の底部から高台部である。見込部と高台部内側に砂目跡が見られる。畳付部分を欠損するため、高台部の整形及び調整については不明である。釉薬は発色が悪い。素地は空隙が多く、粗雑である。

高麗青磁　椀（11、12）

11は高麗青磁の椀の口縁部である。口唇部が緩く外反する。釉薬は灰オリーブ色（Hue5Y5/3）を呈する。素地は黄褐色の粒を多く含み、やや粗雑な印象を受ける。

12は高麗青磁の椀の高台部である。内面見込部に砂目跡が見られ、0.5～1.0㎜程度まで厚く盛り上がっている。にぶい黄色（Hue2.5Y6/3）の釉薬が厚く施される。高台部の内部まで釉薬が及び、畳

付部分は釉薬を強く掻き取る。釉薬は発色が比較的良好である。素地は比較的精良であるが、１㎜程度の黒色の斑点を含み、一部釉薬に影響して滲んでいる。

SX01　暗褐色土出土石器（第23図13～19）

滑石製石鍋（13～18）

13～16は滑石製石鍋である。**13**は石鍋の鍔部である。口縁部はややすぼまり鍔部やや下方において最大径となる。鍔部の上下において縦方向の加工痕が見られる。鍔部の上下端において、工具痕が明瞭に見られる。鍔部の下方には、炭が多く付着している。**14～16**は内面の傾きと形状から、底部に近い胴部であると考えられる。**14**は外面に横方向の粗雑な工具痕が明瞭に見られ、再加工品の可能性がある。煤の付着は見られない。**15**は幅１㎝程度の工具痕が上下方向に施される。**16**は上下方向の工具痕が明瞭に見られる。下端は底部にほど近いと考えられるが、破断面には結晶片岩が露出しており、これを境に底部が破断した可能性がある。**15**、**16**は外面に煤が多く付着する。**17**、**18**はバレン状石製品である。**17**は平面長方形を呈す。突起部は長方形であり、受部上面は平坦、受部下面は凸状である。突起部には両側から穿孔がなされ、穿孔部には金属片が遺存している。受部上面に煤の付着が見られ、石鍋の内面に装着したと考えられる。**18**は円形の突起部である。突起部から受部に向って、ノミ状工具により垂直方向に刺突することによって、突起部を削り出している。突起部の穿孔は、孔の両側からなされる。受部上面に煤の付着が見られ、石鍋の内面に装着したと考えられる。

石鏃（19）

19は局部磨製石鏃である。基部が鋭利に加工される。

SX01　暗黒色土出土遺物（第24図20～26）

弥生土器　甕（20、21）

20、**21**は鋤先状口縁を持つ弥生土器の甕である。**20**は口縁端部において、内外面ともに強いヨコナデがなされ、緩やかな段を持つ。**21**は内面の口縁端部が突出する。

弥生土器　壺（22）

22は弥生土器の壺の鋤先状口縁である。内外面ともにヨコナデの痕跡を強く残す。丹塗りは施されない。

土師器　甕（23）

23は古墳時代前期の甕の口縁部から胴部である。口縁部は直線的に伸びるが、やや内湾している。胴部は内外面ともにナナメ方向のハケメを施す。内面にはハケの工具痕が明瞭に残る。

土師器　壺（24）

24は古式土師器の壺の口縁部である。胴部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がる。口唇部は上端にナデを施し、平坦に仕上げる。器面の磨耗が進み調整は明瞭ではないが、胴部に指頭圧痕が見られる。

第２表　SX01暗褐色土、暗黒色土、淡暗黒色土、青灰色土出土土器観察表

番号	グリッド名※	層位	器種名	文様・成形技法・特徴	胎土	焼成	色調（外面）	色調（内面）
1	Ｅ５	暗褐色土	捏鉢		石英・長石	良好	5YR6/1灰	5YR6/1灰
2	Ｅ４、Ｅ５	〃	土師器椀		石英・長石	良好	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR7/6橙
3	Ｃ５	〃	土師器椀		極僅か石英あるいは長石	良好	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙
4	Ｃ５	〃	黒色土器Ｂ椀		石英・長石	良好	2.5YR3/1黒褐	2.5YR3/1黒褐
5		〃	合子（蓋）		精良	良好	5Y8/1灰白	7.5Y7/2灰白
6		〃	白磁椀		黒色の粒を含む	良好	10Y8/1灰白	10Y8/1灰白
7	Ｃ６	〃	白磁椀	内　外面を沈線で施文	精良	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄
8	Ｃ６	〃	白磁椀		黒色の粒を含む	良好	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白
9	Ｄ６	〃	青磁椀	釉薬の発色が悪い	やや粗雑	ややあまい	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄
10	Ｅ４、Ｄ６	〃	青磁碗	砂目跡が見られる	粗雑　空隙が多い	ややあまい	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄
11		〃	青磁碗		やや粗雑　砂粒多い	良好	5Y5/3灰オリーブ	5Y5/3灰オリーブ
12	Ｄ４	〃	青磁碗	砂目跡が見られる	精良	良好	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄
20	Ｃ５	暗黒色土	甕		石英・長石・金雲母	良好	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/3にぶい黄褐
21	Ｄ４	〃	甕		石英・長石・金雲母・角閃石	良好	10YR6/6明黄褐	10YR3/3暗褐
22	Ｄ４	〃	壺		石英・長石・金雲母	良好	10YR6/6明黄褐	7.5YR6/6橙
23	Ｄ４	〃	甕		石英・長石・角閃石　砂粒多	良好	10YR8/3浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙
24	Ｄ４	〃	壺		微細な砂粒を含む	良好	10YR5/2灰黄褐	2.5YR6/8橙
25	Ｄ４、Ｅ４	〃	土製円盤		石英・長石・金雲母	良好	5YR6/6橙	5YR6/6橙
27	Ｄ３	淡暗黒色土	甕		石英・長石・金雲母	良好	10YR6/4にぶい黄橙	5YR5/6明赤褐
28	Ｅ４	〃	甕	内面口唇部強ヨコナデ	石英・長石・角閃石	良好	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐
29	Ｄ５	〃	甕	口唇部浅沈線	石英・長石・金雲母・角閃石	良好	7.5YR7/6橙	5YR6/6橙
30	Ｅ６	〃	甕	外面頚部下方ヨコナデ	石英・長石・金雲母	良好	7.5YR4/3褐	5YR4/4にぶい赤褐
31	Ｄ３	〃	甕		石英・長石・金雲母	良好	7.5YR5/6明褐	2.5YR5/6明赤褐
32	Ｄ４	〃	甕	端部に強いヨコナデ	石英・長石・金雲母	良好	7.5YR6/6橙	10YR7/4にぶい黄橙
33	Ｅ５	〃	壺		石英・長石・金雲母	良好	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/6橙
34	Ｄ４	〃	壺		石英・長石・金雲母	良好	5Y7/2灰白	2.5Y7/3浅黄 底部5YR6/6橙
35	Ｅ４	〃	壺	底部に穿孔	石英・長石・金雲母	良好	2.5YR5/6明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐
36		〃	袋状口縁壺	外面丹塗り	石英・長石・金雲母	良好	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙
37	Ｄ３	〃	鉢形椀	外面ハケメ	石英・長石・金雲母・角閃石	良好	7.5YR6/6明褐	10YR4/4褐
38		〃	土製円盤		石英・長石・金雲母・角閃石	良好	2.5Y3/2黒褐	2.5Y3/1黒褐
39	Ｄ６	〃	甕		石英・長石・金雲母	良好	10YR5/3にぶい黄褐	10YR3/1黒褐
40	Ｄ６	〃	甕		石英・長石	良好	5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐
41	Ｄ５	〃	壺	内面屈曲部指頭圧痕	石英・長石・金雲母・角閃石	良好	Hue7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/6橙
42		〃	高坏		石英・長石	良好	2.5Y6/2灰黄	5YR6/6橙
43	Ｄ５	青灰色土	甕	外面ヘラ状工具刺突	石英・長石	良好	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐
44	Ｄ５	〃	甕		石英・長石・金雲母	良好	2.5YR4/1黄灰	7.5YR4/1褐灰
45		土層観察ベルト	壺	突帯上端強ヨコナデ	石英・長石・金雲母	良好	5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐

※グリッド名空欄は不明

弥生土器　再加工品（25）

25は弥生土器を打ち欠いて円形に成形した通称「メンコ」と呼ばれる再加工品である。弥生土器の底部から胴部に立ち上がる粘土を打ち欠き、底部中心の円盤状の部分を用いている。底部の外面には、ユビオサエとヘラ状工具による器面調整の痕跡が残る。

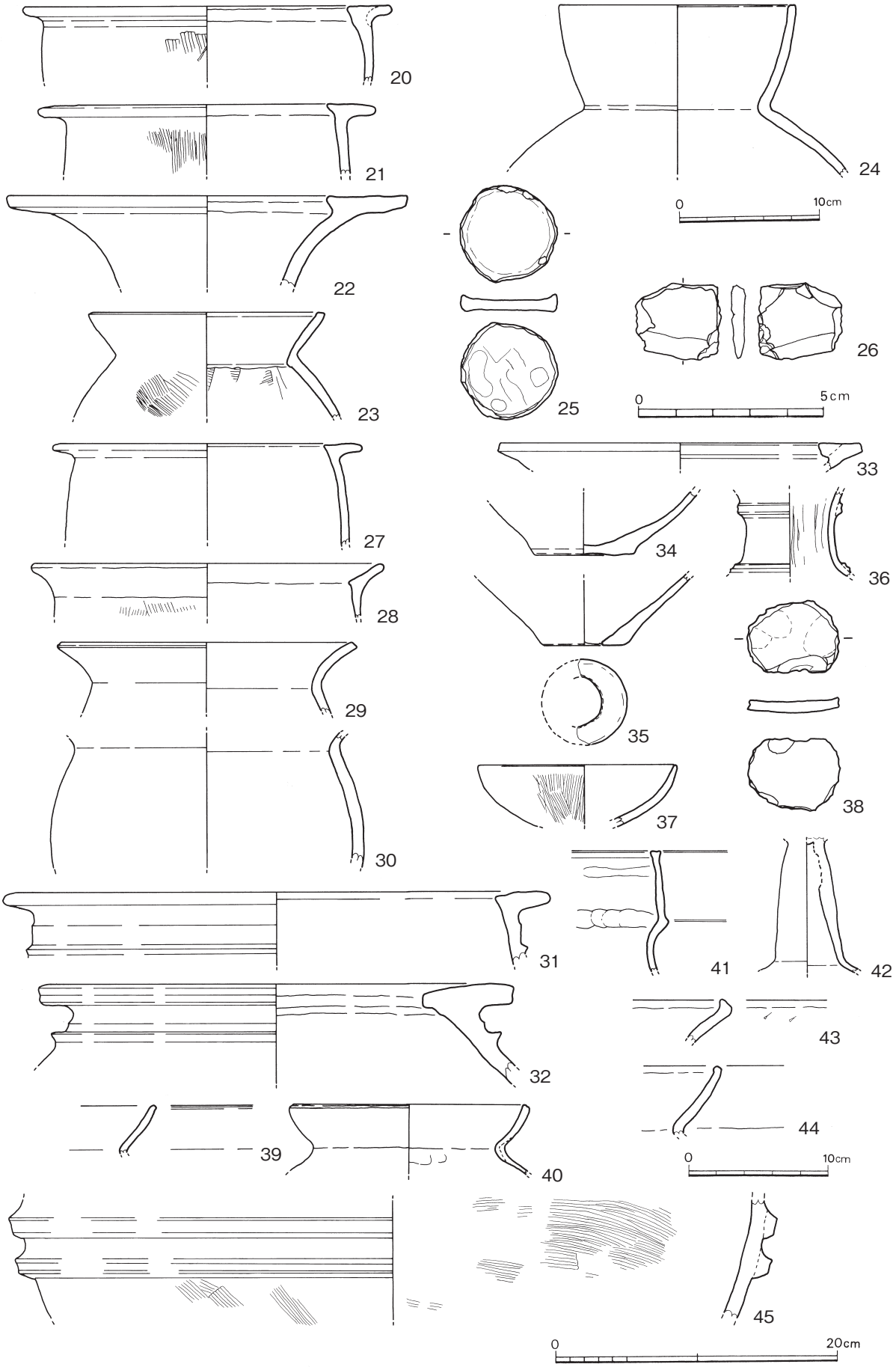
石包丁（26）

26は砂岩製の石包丁である。背部を欠損し形態は不明である。刃部は弧刃であると推測される。残存部において穿孔は認められない。刃部に対して水平方向の研磨によって、刃部を形成している。刃部はかなり鈍い。

SX01　淡暗黒色土出土遺物（第24図27～42）

弥生土器　甕（27～30）

27～29は弥生土器の甕の口縁部である。**27**は鋤先状口縁である。内面の口縁端部に強いヨコナデを施し、端部がややとがっている。**28**はナナメに立ち上がる口縁部である。内面の口縁端部に強いヨコナデを施し、突出部の下方がややくぼむ。外面胴部はハケメ調整を施す。**29**は緩やかに外湾しながら立ち上がる甕の口縁部である。口唇部に浅い沈線が施される。口縁部内面にはナナメ方向のハケメ痕が、外面には横方向のナデが見られる。胴部はナナメ方向のハケメ調整が施される。**30**は弥生土器の甕の胴部である。頚部から胴部にかけて、丸くふくらみを持つ。器壁がやや厚い。外面の頚部下方にヨコナデを施す。



第24図　SX01暗黒色土、淡暗黒色土、青灰色土出土遺物（26は２／３、45は１／４、それ以外は１／３）

弥生土器　大形甕（31～32）

31～32は弥生土器の大形の甕の口縁部である。**31**は鋤先状口縁を持つ。外面の口縁部と突帯の間において、ヨコナデによって緩やかな突出が形成されている。**32**は口縁部が強くすぼまる。内面は口唇端部に強いヨコナデを施し、直下に緩やかな突出が形成されている。外面は口唇端部に浅い沈線が施される。口縁部の下に、やや上を向く突帯が１条めぐる。また口縁部と突帯の間に強いヨコナデが施され、緩やかな突出が形成されている。

弥生土器　壺（33～36）

33は弥生土器の壺の口縁部である。内面への突出が大きく、外面にはあまり突出しない。内面の口唇端部に浅い沈線が施され、この際、突出部下端の粘土が下方にややはみ出すが、そのまま残されている。**34～35**は壺の底部である。**34**は内面に指頭圧痕が残る。外面は胴部との境に段をなし、底面には指頭圧痕を施す。**35**は底部に穿孔が施されている。穿孔は、破断面の形状、および内外面の穿孔部周囲に大きな欠損がないことから、回転穿孔であると判断される。外面には丹塗りが施される。**36**は袋状口縁壺の頸部である。内面には絞り痕が見られる。外面は丹塗りが施される。

弥生土器　椀形鉢（37）

37は椀形鉢である。口縁端部を平坦に仕上げる。内面はナデを施し、外面は縦方向のハケメを施す。口唇部にはヨコナデを施し、外面のハケメ調整をナデ消している。

弥生土器　再加工品（38）

38は弥生土器を打ち欠いて円形に成形した通称「メンコ」と呼ばれる再加工品である。胎土や器面調整、器壁の厚さの特徴から、甕の胴部片を再加工したものと考えられる。

土師器　甕（39～40）

39～40は土師器の口縁部である。**39**は緩やかに内湾しながら直線的に立ち上がる。口唇部の上端を平坦に仕上げる。外面口唇部がわずかに膨らむ。**40**は内湾する口縁部を持つ。口唇部の上端に沈線を持つ。内面の頸部と胴部の境目に、成形時の粘土の貼り付け痕が残っている。

土師器　壺（41）

41は古墳時代の壺の口縁部から頸部である。屈曲部から口唇部にかけて、やや内側に傾く。口唇の上端には浅い沈線がめぐる。内面の屈曲部に連続した指頭圧痕がめぐる。

土師器　高杯（42）

42は土師器の高杯の脚部である。杯部から下方にまっすぐ伸び、下端付近で明瞭に屈曲する。内面の杯部との境界付近において、成形時の指頭圧痕が明瞭に見られる。

青灰色土出土遺物（第24図43～44）

弥生土器　甕（43）

43は弥生土器の甕の口縁部片である。口唇部が上方に肥厚する。肥厚部にはヨコナデが施され、肥厚が明瞭である。外面には三角形の工具痕を残す。賀川以東系須玖式土器の跳ね上げ口縁と考えられる。

土師器　甕（44）

44は土師器の甕の口縁部である。やや内湾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は内面側がやや肥厚する。内外面にヨコナデを施す。

SX01　土層観察用ベルト出土遺物（第24図45）

45は弥生土器の壺の胴部である。内面にはナナメ方向のハケメ調整を施す。外面にはナナメ方向のハケメ調整の後、２条の突帯を貼り付ける。ヨコナデにより突帯の上部を強く圧着する。突帯の上端には沈線がめぐる。

SX01　淡暗黒色土出土石器（第25図、第26図46～62）

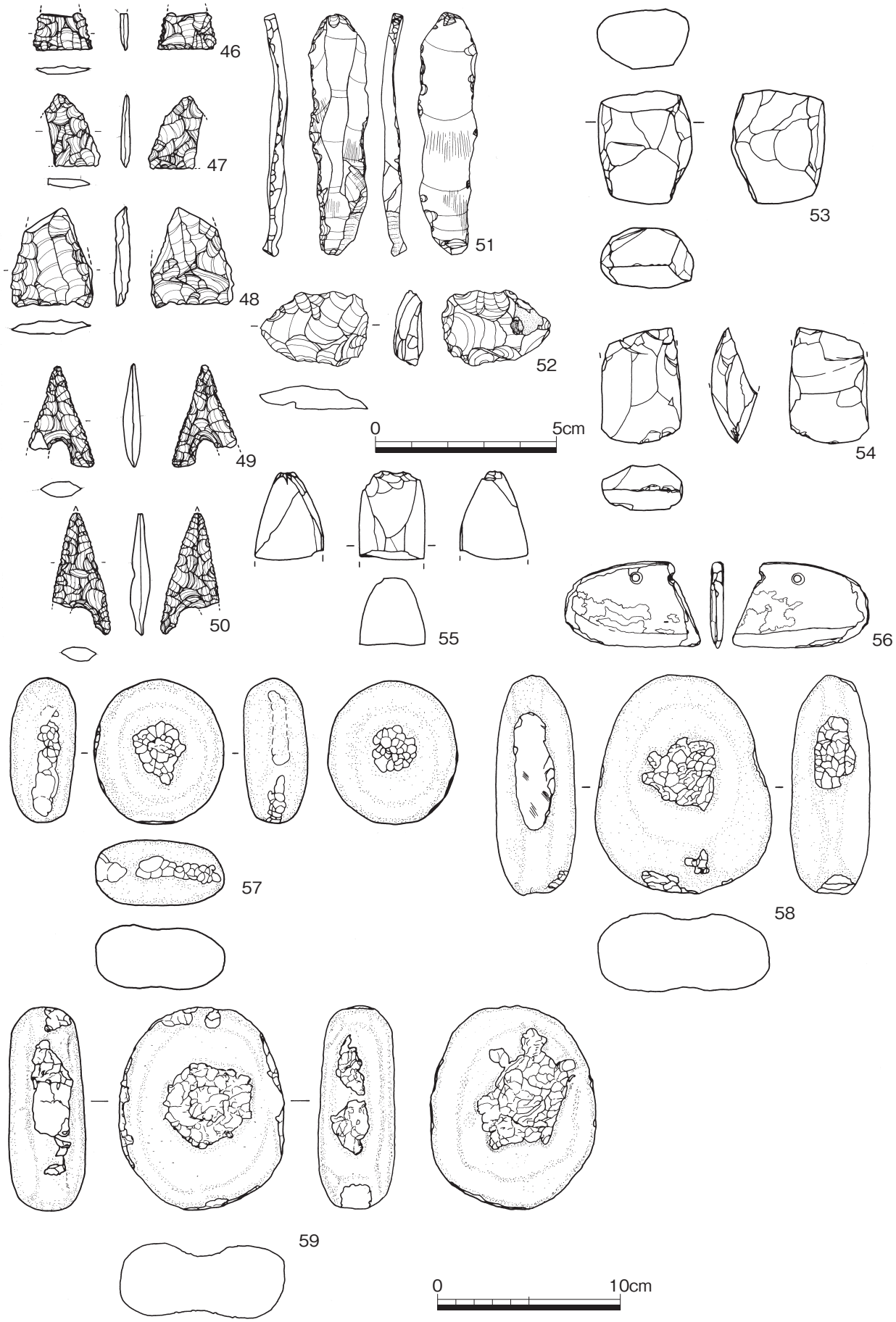
石鏃（46～49）

46～47は平基式の石鏃である。**46**は安山岩製で小型である。**47～48**は黒曜石製である。**49～50**は凹

第３表　SX01暗褐色土、暗黒色土出土、淡暗黒色土出土石器観察表

番号	グリッド名※	層位	器種名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
13	Ｄ４		石鍋	滑石	(4.3)	(10.25)	鍔部2.7 胴部1.3	128.80
14	Ｅ５		石鍋	滑石	(6.6)	(5.3)	1.6	122.56
15	Ｅ５		石鍋	滑石	(4.7)	(9.45)	1.2	89.45
16	Ｄ３、Ｅ４		石鍋	滑石	(6.8)	(8.6)	1.6	157.9
17			バレン状石製品	滑石	(5.95)	(5.50)	2.65	85.79
18			バレン状石製品	滑石	(2.0)	(4.4)	(2.1)	9.86
19	Ｅ５		石鏃	黒曜石	(1.9)	(2.0)	0.3	0.82
26	Ｃ５		石包丁	砂岩	4	4.55	0.85	25.5
46	Ｄ４・Ｅ４		石鏃	安山岩	(1.05)	1.6	0.25	0.42
47	Ｄ４・Ｅ４		石鏃	黒曜石	2.0	(1.3)	0.2	0.73
48	Ｄ６		石鏃	黒曜石	(2.7)	2.25	0.4	2.48
49	Ｄ５		石鏃	黒曜石	2.85	(1.8)	0.5	1.30
50	Ｄ４・Ｅ４		石鏃	黒曜石	3.3	(1.5)	0.45	1.59
51	Ｅ４		石刃	黒曜石	6.65	1.6	0.75	5.92
52	Ｄ７		サイドブレイド	黒曜石	3.05	2.1	0.7	4.32
53	Ｄ５		磨製石斧	砂岩	(6.2)	5.1	3.3	150.68
54	Ｄ５		磨製石斧	泥岩	(6.35)	4.4	2.4	74.02
55	Ｅ４		柱状片刃石斧	泥岩	(4.9)	3.7	3.8	96.59
56	Ｄ４、Ｅ４		石庖丁	泥岩	(7.45)	4.7	0.7	32.68
57	Ｃ３		凹石	安山岩	7.9	7.2	3.5	325
58	Ｄ４		凹石	玄武岩	11.95	9.7	4.4	790
59	Ｅ５		凹石	砂岩	11.2	9.05	4.2	750
60			凹石	玄武岩	11.5	9.1	6.4	1160
61			凹石	花崗岩	6.8	7.0	(4.4)	294.71
62			台石	砂岩	20.6	15.1	9.7	3640

※グリッド名空欄は不明



第25図　SX01淡暗黒色土出土遺物石器１（46～52は２／３、それ以外は１／３）

基式の黒曜石製石鏃である。**49**は抉りがやや深い。

縦長剥片（51）

51は鈴桶型石刃技法によって作られた黒曜石製の縦長剥片である。背面においては原礫面を切るようにして逆方向からの剥離が見られるほかは、同一の打面から剥離がなされる。主剥離面に見られる剥離も同一の打面からである。側面には、使用痕あるいは加工痕と見られる痕跡が確認される。

サイドスクレーパー（52）

52はサイドスクレーパーである。打点の周辺部を除き、背面、腹面ともに周辺から中心に向って薄い剥離を施す。

磨製石斧（53～54）

53～54は磨製石斧である。**53**は砂岩製の磨製石斧である。刃部の一部と基部側を欠損する。刃部から着柄部にかけて刃部と垂直方向に研磨する。側面には敲打痕が残る。**54**は泥岩製の磨製石斧である。刃部から着柄部にかけてはナナメ方向に、側面は刃部に対して垂直方向に研磨する。側面を強く研磨し主面と側面の間に明瞭な陵を持つ。側面には敲打痕を残す。刃部には使用によると思われる刃こぼれが見られる。

柱状片刃石斧（55）

55は泥岩製の柱状片刃石斧の基部である。基部以外を大きく欠損する。基端部側が多く剥落する。

石包丁（56）

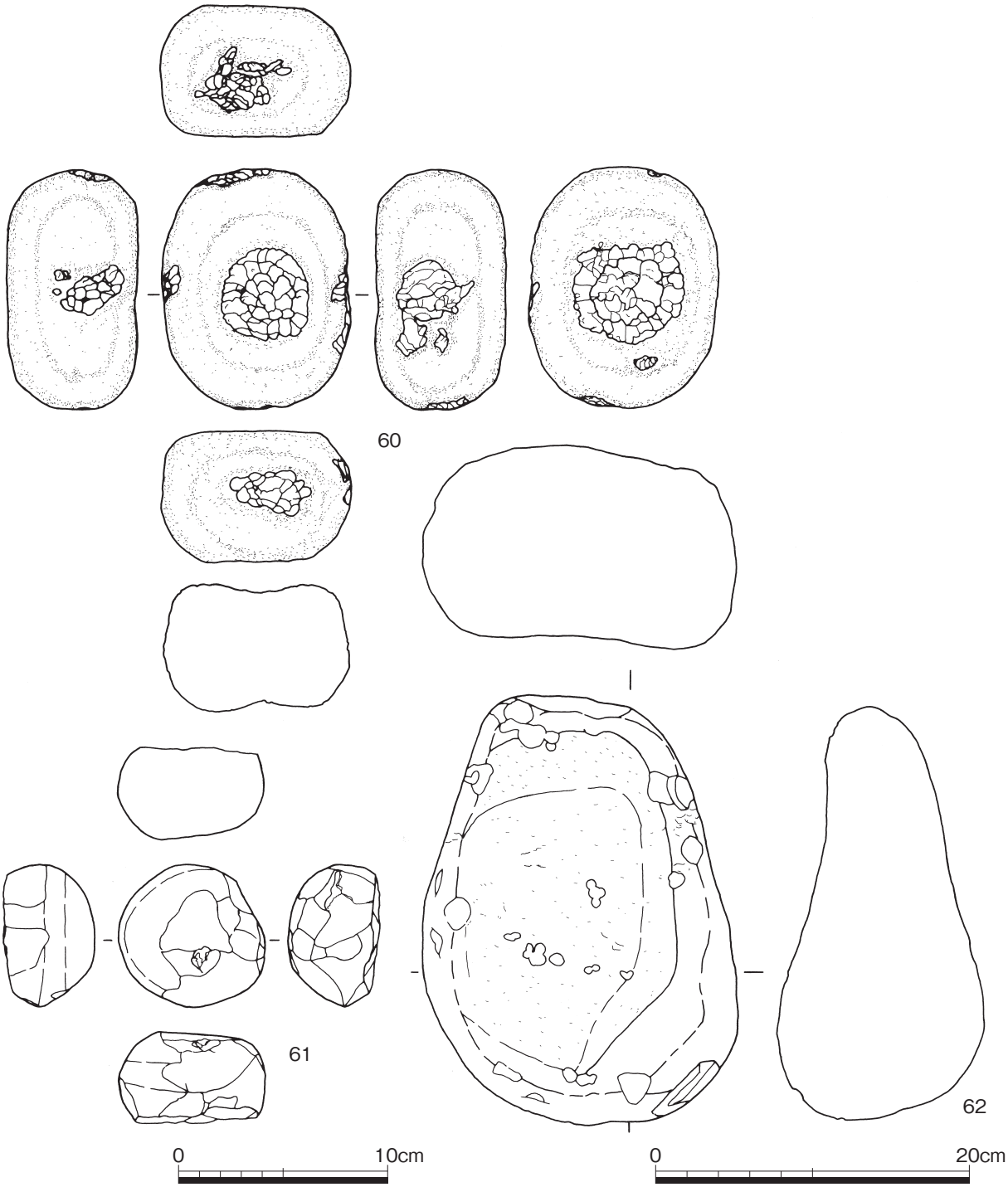
56は泥岩製の石包丁である。弧背弧刃であり長楕円形を呈す。前面を研磨し、刃部との境は明瞭でない。穿孔は穿孔具を用いて両面からなされる。

凹石（57～60）

57～60は凹石である。**57～59**は扁平な円礫を利用しており、**60**は厚みのある円礫を利用している。**57**は安山岩製の凹石である。図の表面・裏面・下面・左面・右面の５面には使用痕が多く認められるが、上面には認められない。**58**は玄武岩製の凹石である。全面に使用痕が見られるが、細くすぼまる上面は使用痕が少なく、一部破断している。左面と下面に擦り跡が見られ、特に左面は摩滅が進む。**59**は安山岩製の凹石である。全面に使用痕が多く見られるが、表面と裏面は特に大きくくぼむ。下面と左面には磨石として用いた痕跡が見られる。**60**は玄武岩製の凹石である。全面に使用痕が多く見られる。

磨石（61）

61は花崗岩製の磨石である。裏面が大きく欠けている。磨面は全体に見られ、ところどころスベスベである。



第26図　SX01淡暗黒色土出土遺物石器２（62は１／４、それ以外は１／３）

台石（62）

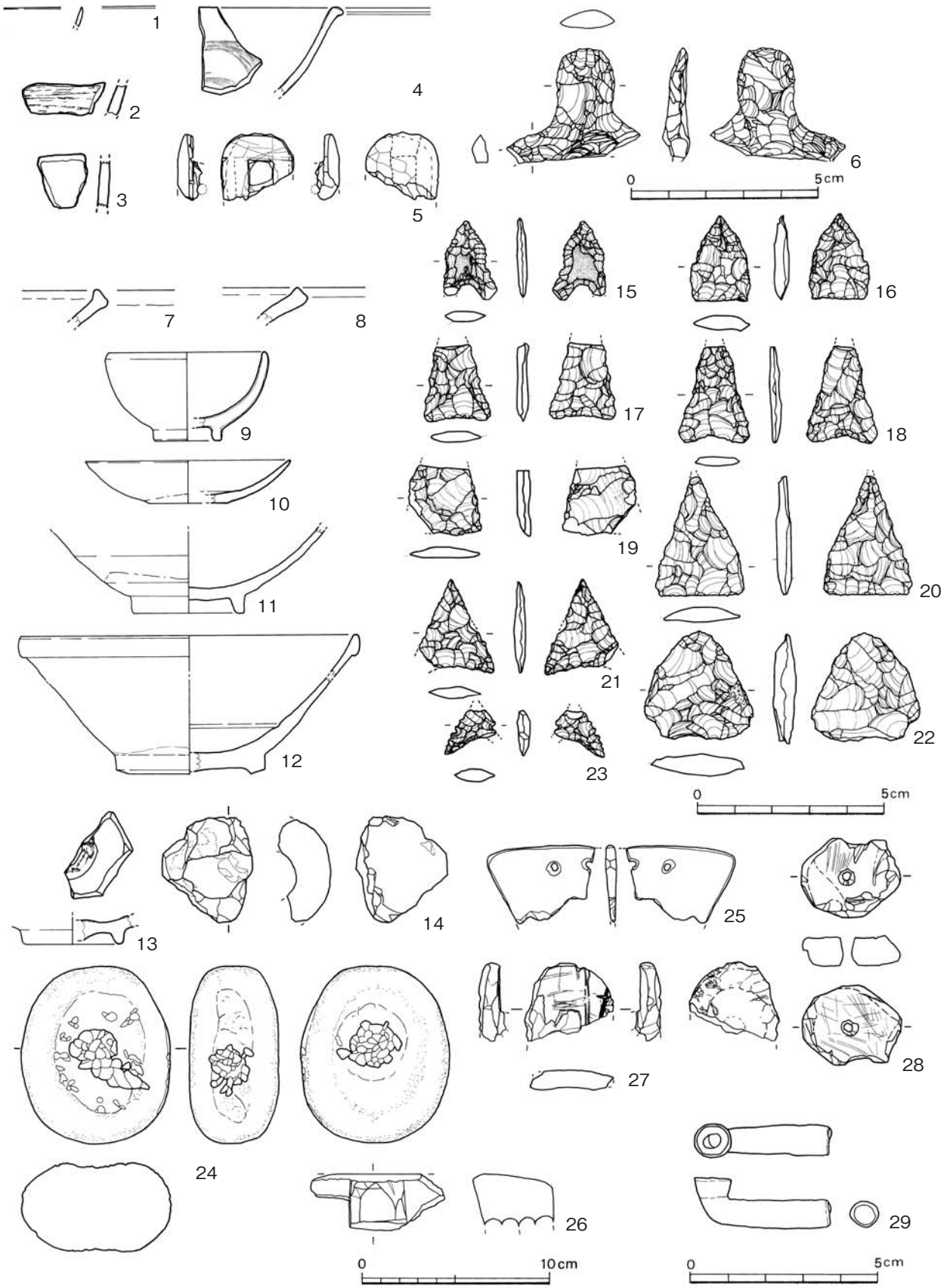
62は台石である。平面楕円形を呈す。石の厚さが全く一定せず、そのまま置いたのでは台石として使用できない。このため、擦り面を平坦になるように据えて使用したものと考えられる。

その他の遺構（第27図１）

SB01

白磁　器種不明（１）

1は器種不明白磁の口縁部である。直口縁であり、口唇部にまで釉薬がかかる。釉薬は光沢を帯び、素地は精良である。



第27図　SB01、黒色土、表土出土遺物（6、15～22、29は2／3、それ以外は1／3）

黒色土出土遺物（第27図２～６）

縄文土器（２～３）

2と**3**は無文の縄文土器片胴部である。ともに多量の滑石が混和されている。**2**の外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整で、**3**は内外面ともナデ調整である。**2**、**3**とも器壁の厚さは5.5cmである。**2**の外面にみられるヘラケズリは坂の下式によくみられる調整であり（田中 1979）、**2**、**3**とも縄文時代後期初頭の阿高式系とみるのが穏当である。（古澤）

白磁　椀（４）

4は白磁椀の口縁部である。口唇部が強く屈曲する。口唇端部に厚く施釉し、端部の形状は丸い。内面に櫛目文を施す。素地は良好であるが、0.5～1.0mm程度の黒色の斑点が見られる。

バレン状石製品（５）

5はバレン状石製品である。受部は隅丸長方形で、突起部は長方形である。受部は上面が平坦で、凸状を呈する。突起部への穿孔は、両側からなされており、突起部に対してナナメ方向になされる。受部上面には、突起部を作出するときに付いたと考えられる工具痕が見られる。煤の付着は確認されず、装着の位置については不明である。

異形石器（６）

6は異形石器である。背面と腹面の両面から楕円形部分と脚部を作出している。抉り部は風化面が見られ平坦である。

表土出土遺物（第27図、第28図７～29、30）

弥生土器　甕（７～８）

7～8は弥生土器の甕の口縁部片である。**7**、**8**ともに口唇部が上方に肥厚する。**7**は肥厚部にヨコナデが施され、内面に緩い段をなし、肥厚が明瞭である。**8**は口唇部の上方が弱く肥厚する。器面が磨耗し、調整は明瞭にはわからない。遠賀川以東系須玖式土器の跳ね上げ口縁と考えられる。

青磁　小椀（９）

9は青磁の小椀である。口縁部はやや内反する直口縁であり、内外面ともに無文である。器壁が厚く、ぼってりした印象を受ける。高台部の外側の器壁が、高台部の内側の器壁よりも分厚い。釉薬は1.0mm程度と厚く施される。口唇部の頂部から内面にかけて、また畳付部において釉薬が掻き落される。釉薬は灰オリーブ色を呈し、釉薬が掻き落とされた箇所と、素地が露出する箇所との境において、赤褐色に発色する。素地は比較的精良であるが、0.5mm以下の黒色の斑点をわずかに含む。

白磁　皿（10）

10は白磁の皿である。口縁部は直口縁である。底部は平底であり、胴部と底部の境は明瞭である。見込部には浅い沈線が巡る。釉薬は内面から胴部下方にまで施される。底部付近には釉薬は及ばない。0.5mm程度の黒色の斑点が見られるが、素地は良好である。

白磁　椀（11～12）

11～12は白磁の椀である。**11**は白磁の胴部から口縁部片である。高台部はやや高めであり、直立する。稜線が明瞭であり、端正である。釉薬は内面と、高台部のやや上方にかけて施される。素地は0.5mm程度の黒色の斑点を多く含み、空隙もやや多く見られる。また高台部が一部ひび割れしており、粗

雑な印象を受ける。**12**は白磁の椀である。口縁部は玉縁口縁であり、高台部は浅く削りだす。見込部には一条の沈線がめぐる。玉縁口縁の直下から、高台部にかけて、回転ヘラ削り痕が明瞭に見られる。釉薬は高台部付近にまで及ぶ。素地は黒色の斑点を多く含み、空隙が多く粗雑である。

明代染付　椀（13）

13は明代染付の椀の削りだし高台部である。釉薬は、見込部は円形に掻き取る。外面は高台部の端部まで及ぶ。高台部の内側には釉薬は施されないが、一部付着している。釉薬はやや赤みがかっており、くすんだ色合いを呈している。素地は明黄褐色を呈し、やや軟質な質感である。

送風管（フイゴの羽口）（14）

14は送風管（フイゴの羽口）である。復元内径3.0cm、復元外径6.2cmを測る。内面は比較的滑らかであるが、外面の整形は粗雑である。胎土は２～３㎜程度の黄色がかった白色の砂粒を多く含み、空隙が多く粗雑である。内外面にはオリーブ灰色（Hue10Y4/2）の鉱物が付着するが、廃棄後に付着した可能性もある。

石鏃（15～23）

15～23は石鏃である。**15**は、局部磨製石鏃である。**16～20**は平基式の石鏃である。**17～19**は浅く抉りを持つ。**21**は基部が鋭利に加工されるものである。**23**は鋸歯鏃である。**22**は平基式石鏃の未成品である。

凹石（24）

24は凹石である。表面と裏面に使用の痕跡が明瞭に見られる。

石包丁（25）

25は石包丁である。背部は緩やかな弧状を呈する。刃部を欠損し、刃部の形態は不明である。背面を平坦に磨くのに加え、側面に対しても平坦に磨いている。このため、残存部の周囲はすべて平坦である。

滑石製石鍋（26）

26は滑石製石鍋の把手部である。口縁部が残存するが、把手部の下方以下を欠損する。口縁部内面はややなだらかに加工されている。内面側から外面側に向って、緩やかに傾斜している。把手部の付け根の部分に、削りだす際の工具痕が見られる。

バレン状石製品（27）

27はバレン状石製品である。長楕円形を呈すると想定される。穿孔部がわずかに残存している。受部上面は平坦であり、受部下面は中央部分が凹状を呈す。外面には突起部を作出するときに付けられたと思われる工具痕が明瞭に残る。石材には孔が多く開く。また不純物も多く一部赤色を呈している。

不明滑石製品（28）

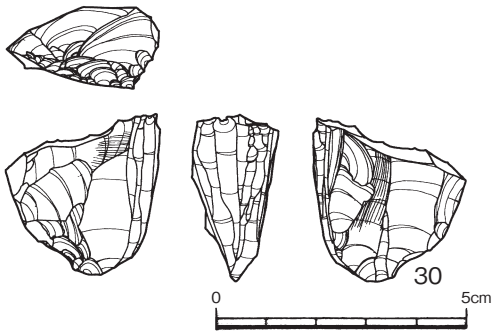
28は不明滑石製品である。長楕円形を呈し、両面からノミ状工具によると思われる穿孔が施される。被熱をした痕跡が見られず、原石から作り出した製品、または石鍋ではない滑石の再加工品であると考えられる。

煙管（29）

29は真鍮製の煙管の雁首である。火皿が小さく、雁首の小口の太さに比べてやや大きい程度である。草木質が付着していたことから、羅宇（らう）部分は草木質であったと考えられる。

細石刃核（30）

典型的な西海技法によって作出された福井型細石刃核である。両側面は丁寧に調整剝離がなされており、背縁には鱗状調整が施されている。打面は横打調整である。県北の平戸・松浦地域の縄文時代草創期の細石刃核は石ヶ元型と呼ばれる縦長の細石刃核が主体であった。この資料は本地域の草創期の様相を考える上で貴重である。（川道）



第28図　表土出土細石刃核（2／3）

第４表　SB01及び黒色土、表土出土土器観察表

番号	グリッド名※	遺構・層位	器種名	文様・成形技法・特徴	胎土	焼成	色調（外面）	色調（内面）
1	N20	SB01－d	白磁椀		精良	良好	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白
2	S22	黒色土	縄文土器	外面ヘラ削り内面ナデ	滑石を多量に含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐 5YR2/1黒褐	5YR5/4にぶい赤褐
3	S22	〃	縄文土器	外面内面ともにナデ	滑石を多量に含む	良好	5YR6/4にぶい赤褐	5YR6/4にぶい赤褐
4	Q22	〃	白磁椀	内面櫛目文	黒色の粒を含む	良好	5YR7/2灰白	5YR7/2灰白
7		表土	甕	跳ね上げ口縁	石英・長石	良好	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙
8	R23	〃	甕	跳ね上げ口縁	石英・長石	良好	5YR6/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐
9	D4	〃	小椀	高台部釉薬掻き落し	黒色の粒を含む	良好	5Y5/2灰オリーブ	5Y5/2灰オリーブ
10		〃	皿	底部付近回転ヘラ削り	わずかに黒色粒	良好	5Y6/2灰オリーブ	5Y7/2灰白
11		〃	白磁椀	高台部無施釉	黒色の粒を含む	良好	5Y8/2灰白	5Y7/1灰白
12		〃	白磁椀	外面削り痕明瞭	黒色の粒を含む	良好	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白
13		〃	明代染付椀か	見込部釉薬の掻き落し	やや粗雑で軟質	良好	10Y7/2灰(釉) 7.5YR7/6橙(底部)	10Y7/2灰(釉1) 10BG4/1暗青灰(釉1) 10YR7/6明赤褐(素地)
14		〃	フイゴ羽口	砂目跡が見られる	粗雑　空隙多　長石・石英	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/1黄灰

※グリッド名空欄は不明

第５表　黒色土、表土出土土器観察表

番号	グリッド名※	遺構・層位	器種名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
5	P21	黒色土	バレン状石製品	滑石	(3.5)	3.9	(1.3)	15.74
6	P22	〃	不明(異形石器)	黒曜石	3.0	(3.6)	0.7	4.33
15		表土	石鏃	黒曜石	2.1	(1.45)	0.25	0.64
16		〃	石鏃	〃	2.25	1.5	0.4	1.22
17		〃	石鏃	〃	(2.05)	1.8	0.3	1.01
18	P21	〃	石鏃	〃	(2.55)	1.9	0.25	1.22
19		〃	石鏃	〃	(1.7)	(1.9)	0.3	1.38
20		〃	石鏃	〃	(3.1)	2.3	0.3	2.17
21		〃	石鏃	〃	(1.25)	(1.3)	0.3	0.33
22		〃	石鏃	〃	2.4	(2.0)	0.3	0.97
23		〃	石鏃	〃	2.85	2.9	0.6	4.12
24			凹石	玄武岩	9.35	7.8	4.7	595
25		〃	石包丁	泥岩か	(5.65)	(4.05)	0.6	17.53
26		〃	滑石製石鍋	滑石	(3.1)	(7.0)	4.1	93.12
27		〃	バレン状石製品	滑石	(4.1)	4.6	(1.1)	24.42
28		〃	不明滑石製品	滑石	4.2	5.3	1.5	54.62
29		〃	煙管雁首	真鍮	3.6	0.9	1.35	4.12
30	U25	〃	細石刃核	黒曜石	3.0	3.2	1.7	12.69

※グリッド名空欄は不明

旧石器時代遺物（第29図27～35）

小手田遺跡から出土した旧石器時代と確認できた遺物は10数点に上るがここでは８点を報告する。いずれもナイフ形石器文化期の所産で、すべて表土からの採集品で、原位置を遊離したものである。以下個別に説明する。

台形石器（第29図１）

1 は原の辻型台形石器である。幅広の分厚い不定形剝片を素材とする。側辺には90°に近い大振りの急傾斜な細調整が、左側辺には主要剝離面側から、右側辺には背面側から施されている。左側辺の抉りが大きく左右非対称である。背面には厚さを減じるための平坦剝離が右から施されている。刃部は左に肩を持つ。良質の腰岳系黒曜石を素材とする。

石核（第29図２～８）

2～7 は原の辻型台形石器の素材生産用の石核である。いずれも良質な漆黒色を呈する腰岳系の松浦市牟田産の円礫の黒曜石を使用している。原石の円礫を大きく分割した剝片を素材としており、底面の一部に礫面を残置する。分割した素材剝片の周囲に分割面側から３ないし４度加撃して面取りを行い、その面を打面として、求心的な剝離を行って素材剝片を剝取する。そのため分割した際の剝離面はほとんど残されていない。

8 は縦長剝片を生産する一般的な形状の石核である。作業面転移が行われている。やや大きめの良質な腰岳系の円礫を素材とする。

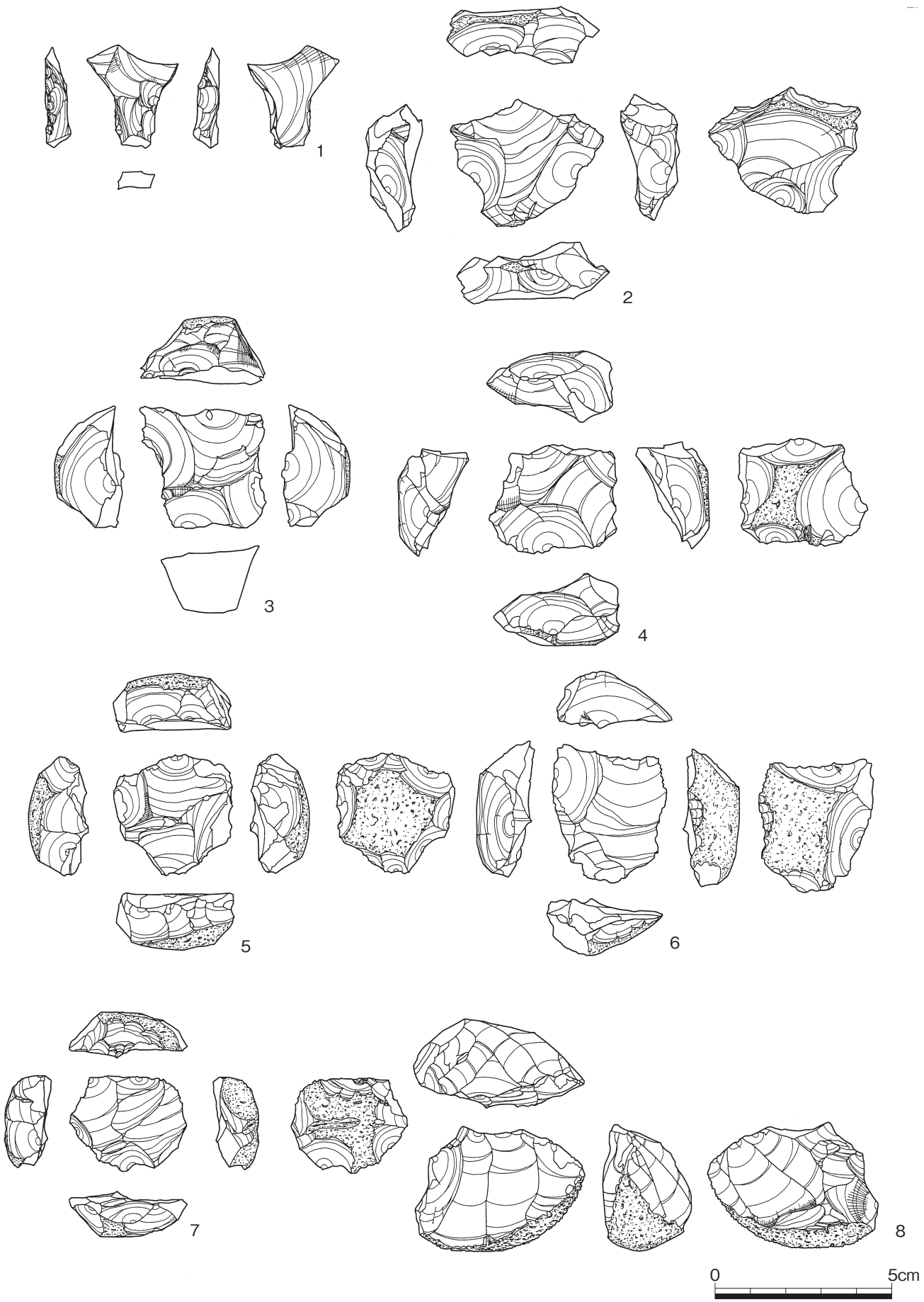
小手田遺跡から出土した旧石器時代遺物の多くは原の辻型台形石器とその石核である。この台形石器は1975年に調査された原の辻遺跡苣ノ木地区第１試掘壙からまとまって出土した台形石器を基準資料として萩原博文によって型式設定がなされた（萩原 1983）。その後同志社大学による百花台東遺跡の調査では終末期の剝片尖頭器と共伴した。小手田遺跡の周辺では、平戸市田助遺跡、同市入口遺跡から好資料が出土している。台形石器としては形態的に特異なため認識が容易であり、AT 降灰から間もない時期の石器群として位置づけられている。（川道）

田中良之1979「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』６
萩原博文1983「原の辻型台形石器について」『人間・遺跡・遺物　わが考古論集』発掘者談話会
萩原博文1995「第２章　平戸の旧石器時代」『平戸市史　自然・考古編』長崎県平戸市

第６表　旧石器時代石器観察表

番号	グリッド名※	層位	器種名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
1		表土	台形石器	黒曜石	3.9	2.5	0.7	3.04
2		〃	石核	黒曜石	3.55	4.3	1.55	15.26
3		〃	石核	黒曜石	3.4	3.5	1.95	21.15
4		〃	石核	黒曜石	3.5	3.0	1.9	16.5
5		〃	石核	黒曜石	3.35	3.35	1.6	17.55
6		〃	石核	黒曜石	2.65	3.25	1.3	10.58
7		〃	石核	黒曜石	3.8	3.2	1.55	14.84
8		〃	石核	黒曜石	3.5	4.8	2.5	40.61

※グリッド名空欄は不明



第29図　旧石器時代遺物（2／3）

Ⅵ　SX01（谷状地形）の埋土について

土層観察所見

SX01（谷状地形）は低い丘陵状の緩傾斜地で、沖積面から１－２段高い位置にある。埋蔵文化財の発掘調査の結果、埋没した窪地と土器片を含む土層が発見された。発掘された窪地は上流側が地形的に馬蹄形をしており、窪地の底面から湧水が認められることから谷の先端を意味する谷頭（こくとう）と呼ばれる微地形である。窪地は谷頭凹地から谷底面にあたる。

窪地内の土層を区分した結果、土層断面では上位から下位に、水田床土層の灰色粘土層（第１層）、黄褐色細粒土層（第２層）、黒褐色細粒土層（第３層）、黄灰色細粒土層（第４層）、褐色細粒土層（第５層）、淡黄灰色粘土層（第６層）、玄武岩転石礫層の７層が認められる（第30図）。

第30図　SX01（谷状地形）の土層区分

第６層の玄武岩の風化土には未土壌化の玄武岩の転石が点在している。転石は巨礫状のブロックやこぶし大の礫状のものまであり、水流による分級は認められない。上部の谷壁斜面には玄武岩転石と玄武岩風化土が存在するが、この窪地には玄武岩風化土がほとんど認められない。これらの状況は、地下水のしみ出しと周囲の台地から雨水の集中によって谷頭凹地から玄武岩風化土土壌のみが流出し、大小の転石がその底部に残留し、集中したことを示唆している。第６層の淡黄灰色粘土層は堆積構造のない均質な細粒土層で、横に追跡可能で、埋没地形をなぞるように薄く堆積しており、第７層の頂部を覆っていることから、玄武岩台地上に降下堆積した黄砂堆積物（風積土）である可能性が高い。

第６層からは旧石器時代の石器および弥生時代終末までの時期の土器片が出土しており、土層には垂直方向に根茎（ルートレット）が発達していることから、第６層の形成時期には地形の浸食が休止し、黄砂が堆積するような安定した時期だったと考えられる。第５層は谷頭凹地の谷の落ちぎわにのみ認められ、弥生時代の土器片を多く含むことから、谷の周囲に堆積した風積土が、少しずつ流れ込んで二次堆積したものと考えられる。第４層、第３層、第２層は色調の違いや境界の堅い鉄マンガン複合体の沈積殻の存在から区分可能である。多くの斑点は植物の根茎に沈積した難溶性の鉱物であるが、これらの配列にも違いが見られる。しかしそれら以外の区別は難しい。色調や沈積殻は地下水の水位変動によって二次的に形成されるものなので本質的な違いとは言えない。これらの差異を除けば、第４層、第３層、第２層は木炭片や古代から中世の土器片を含み堆積構造はない、という共通の特徴を示す。また、第６層と第４層の境界は明瞭であるが水流での浸食の証拠が認められないこと、谷頭凹地を埋めており、水田床土で水平に覆われていることから、第４層、第３層は耕作地の拡大のため人為的に短時間に埋め立てた、埋め立て土である可能性がある。もし人為的な層だとすると、細粒土のみが使われていることから周囲の緩傾斜面上の風積土や森林土が集められた可能性がある。（下山）

Ⅶ　総括

旧石器時代

遺物は表土からの出土であり、旧石器時代の包含層は確認されなかった。大部分が原の辻型台形石器とその石核を主体としており、縦長剥片を生産する石核はわずかであった。日ノ岳型台形石器は確認されず、検出した遺物はある程度の時間的なまとまりを持つ資料群であった。

縄文時代

石器は、石鏃や鈴桶技法の縦長剥片、異形石器等を検出した。石鏃は縄文時代早期から縄文時代後晩期までの時期幅を持つ。

土器は、調査で出土した、すべての資料の中で、後期初頭の阿高式系土器片２点のみを検出した。

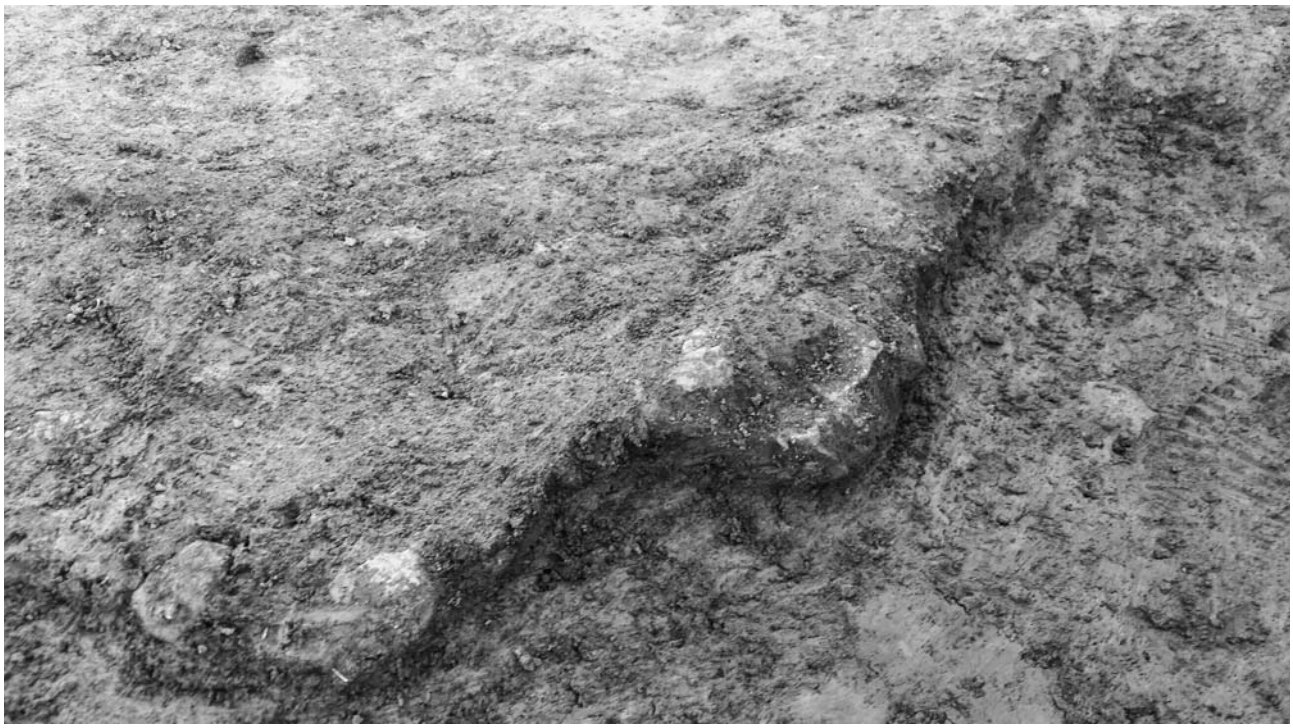
弥生時代

Ⅱ章２節「歴史的環境」で述べたように、里田原遺跡周辺において、竪穴住居址等の明確な生活空間がこれまで検出されていないことから、小盆地の南側の丘陵に生活空間の発見を期待したが、調査の結果、弥生時代の遺構は検出されなかった。しかしながら、SX01（谷状遺構）に周囲から流れ込んだと考えられる層（第16図下図の13、15層）において、弥生時代の大型の土器が多く見られたことから、この近くにこうした遺物の供給源があった可能性がある。また、時期の特定はできないが、凹石や台石といった遺物も見つかっており、生活空間に近い可能性が残される。また、里田原遺跡が弥生時代中期前半を中心とした遺跡であるのに対して、小手田遺跡の弥生時代遺物は弥生時代中期後半から後期にかけての遺物を多く検出しており、里田原遺跡周辺の弥生時代の展開を考える上で、良好な情報を得ることができた。また、遠賀川以東系の跳ね上げ口縁の甕の口縁部片を検出しており、周辺地域との交流のあり方を検討する上で、良好な資料である。

平安～鎌倉時代

耕作土やSX01（谷状地形）の埋土の中に、貿易陶器の小片が多く見られた。図27の12のような全体の器形がわかる資料はごく少量で、ほとんどは破砕片であった。この中で高麗青磁が出土しており、この地域の交易の様相を考える資料として重要である。SX01（谷状地形）から黒色土器Ｂ類が検出されているが、在地系の特徴を持つ個体であり、瓦器椀に器形が類似している。Ⅳ章「遺構」で記述したが、SX01（谷状地形）は、図16－２に示したように、１～３層には同質の土が一律堆積している。遺物は砕片が多く、埋土の中に偏りなく見られた。遺物の年代の上限は13世紀である。このため埋没の下限は13世紀頃と考えられる。またⅥ章での下山氏の観察所見のあるように、この埋土は耕作地の拡大のため人為的に短時間に埋め立てた、埋め立て土である可能性がある。Ⅱ章２節「歴史的環境」に記したように、12世紀の末には、この地域への松浦党の進出が始まっているのであり、その後13世紀以降の松浦党を中心とした勢力の伸張を考えるとき、こうした集団の活動、特に荘園領主として可耕地を広げる活動を表す可能性があり、重要な成果である。

調査区全景（南西から）



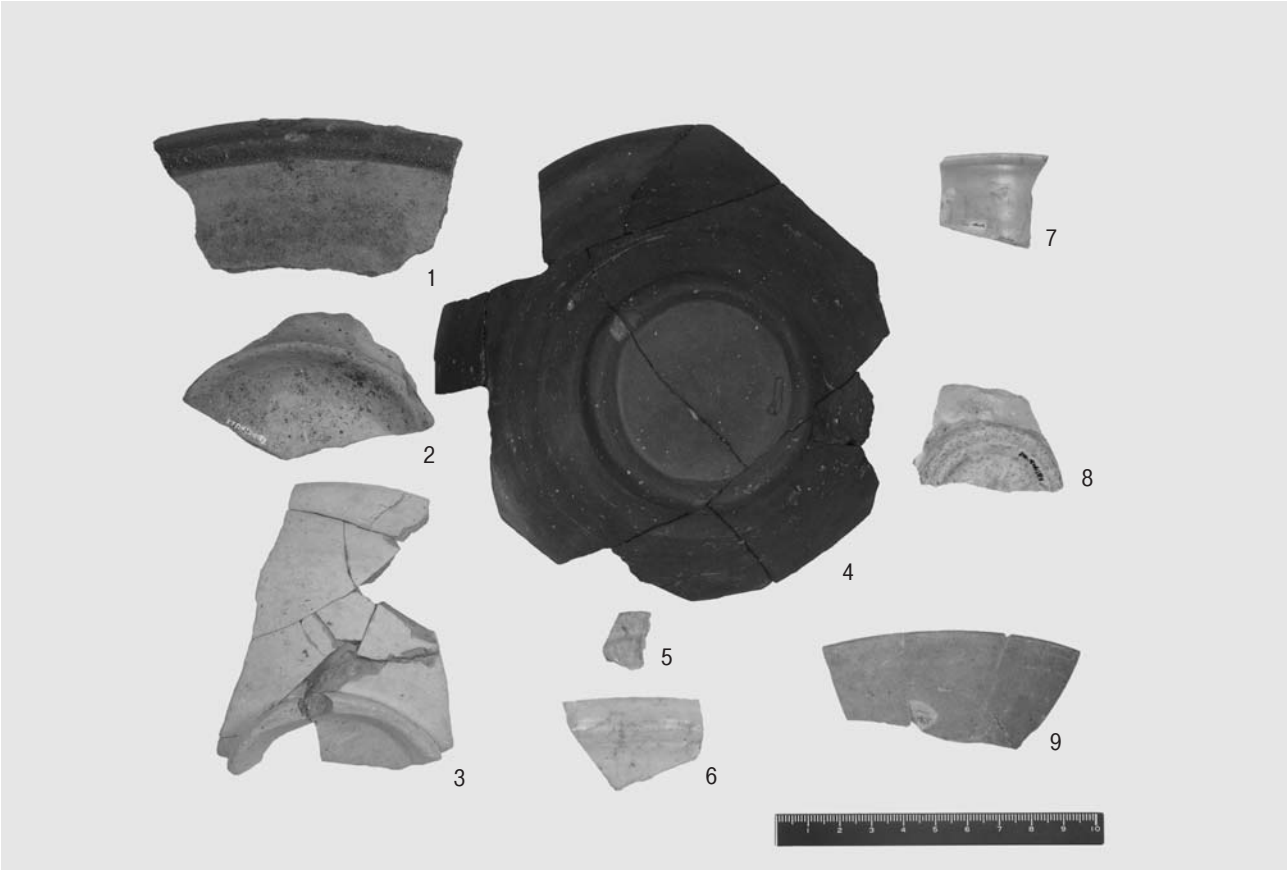
図版 1　　SX01（谷状地形）内焼土

玄武岩露出地点一帯

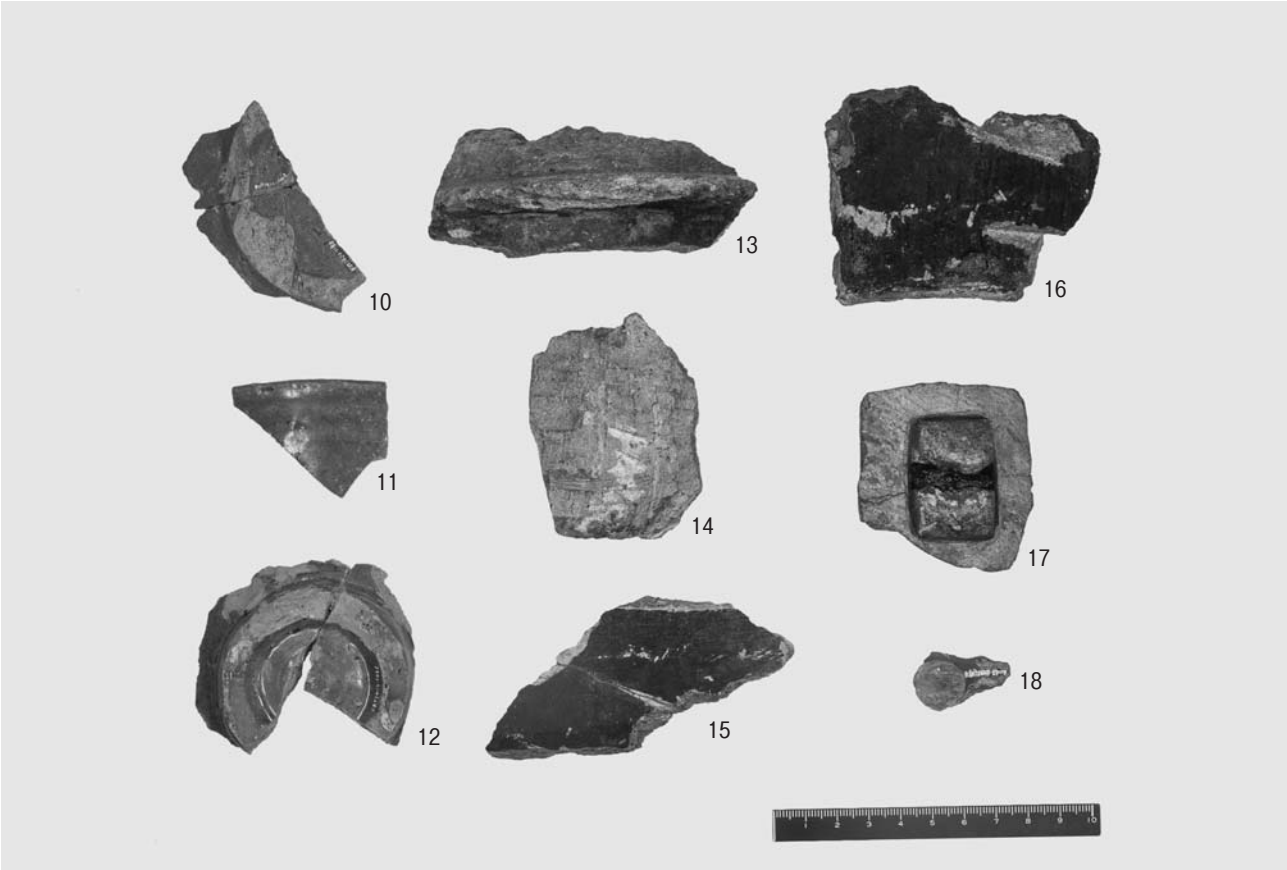
図版 2　　SX02完掘状況

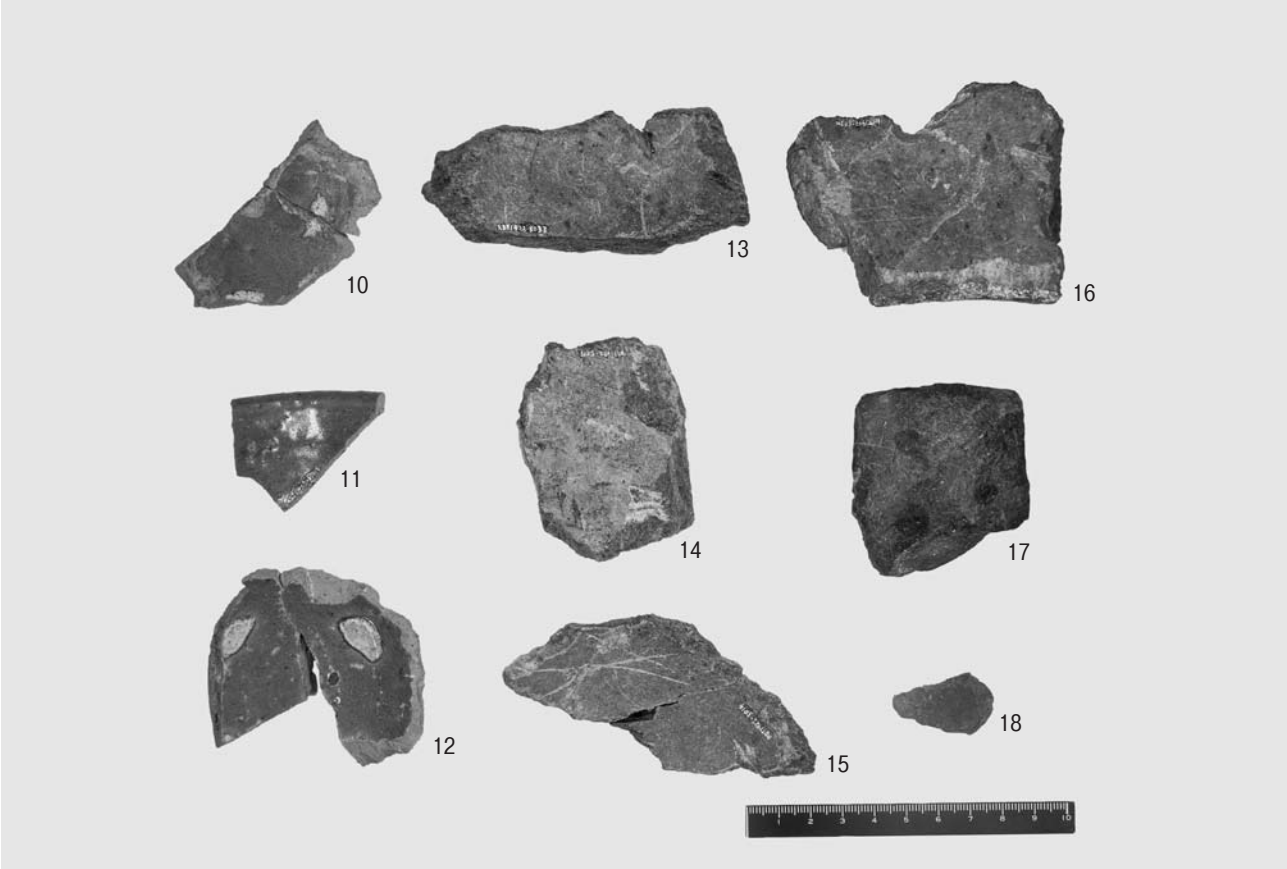
SX03完掘状況

図版 3　　SA01完掘状況

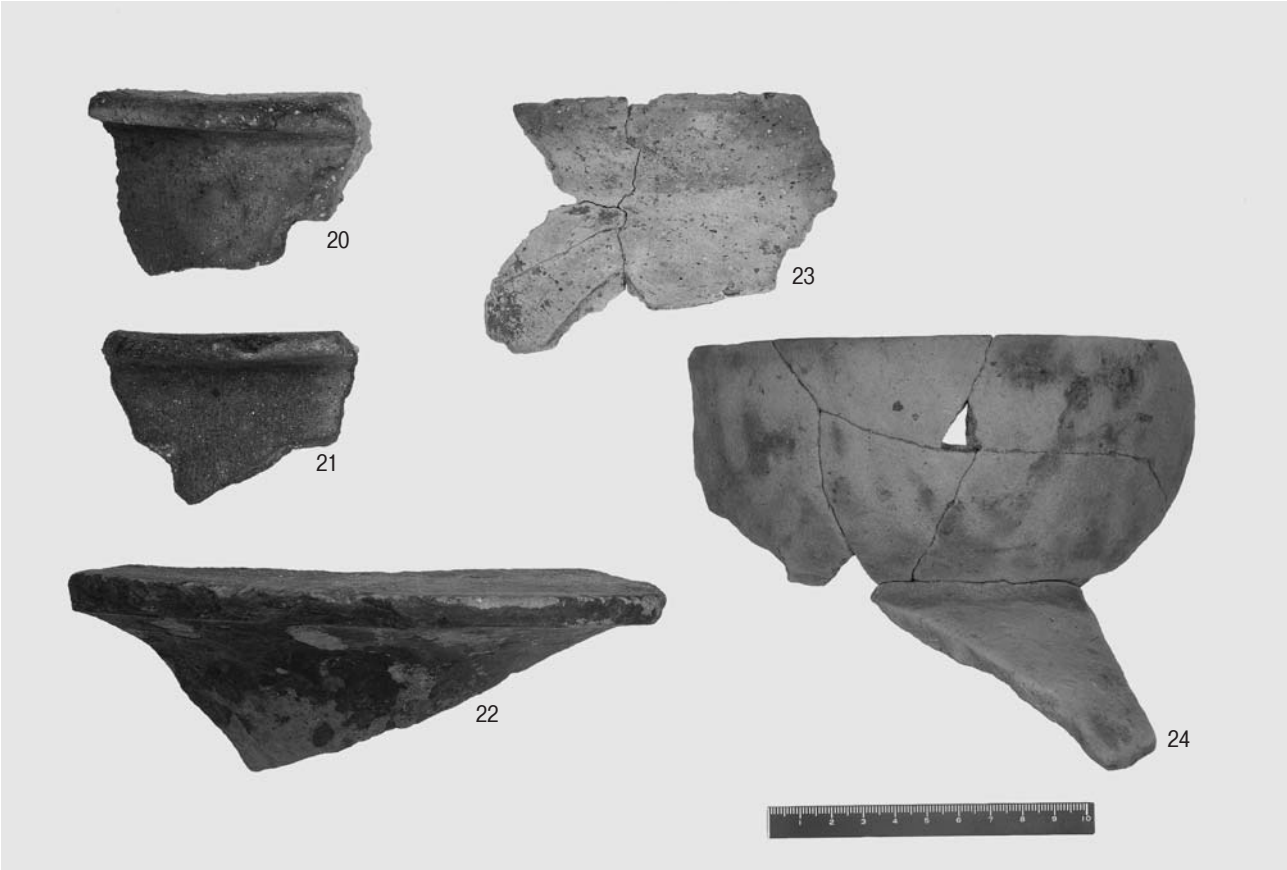


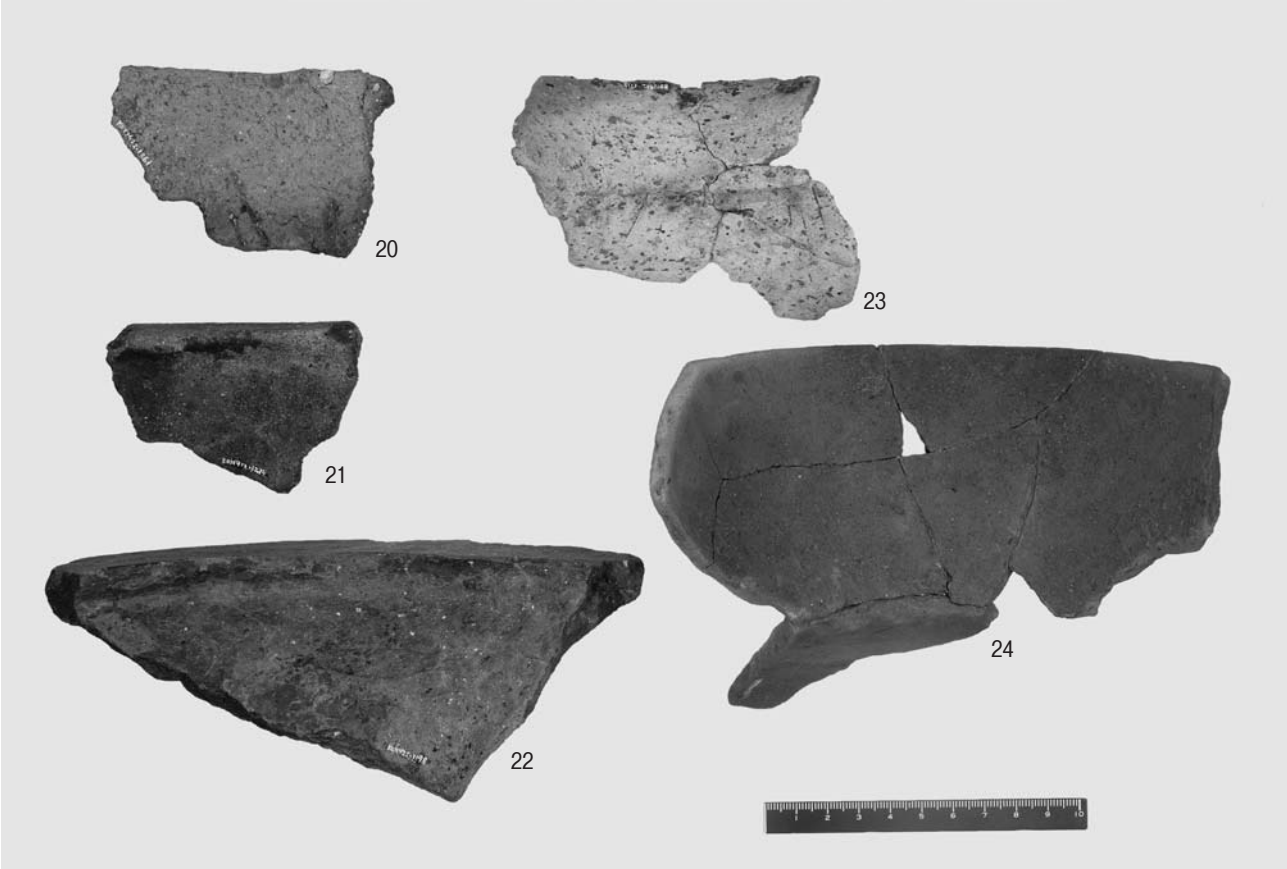
図版 4　小手田遺跡出土遺物①



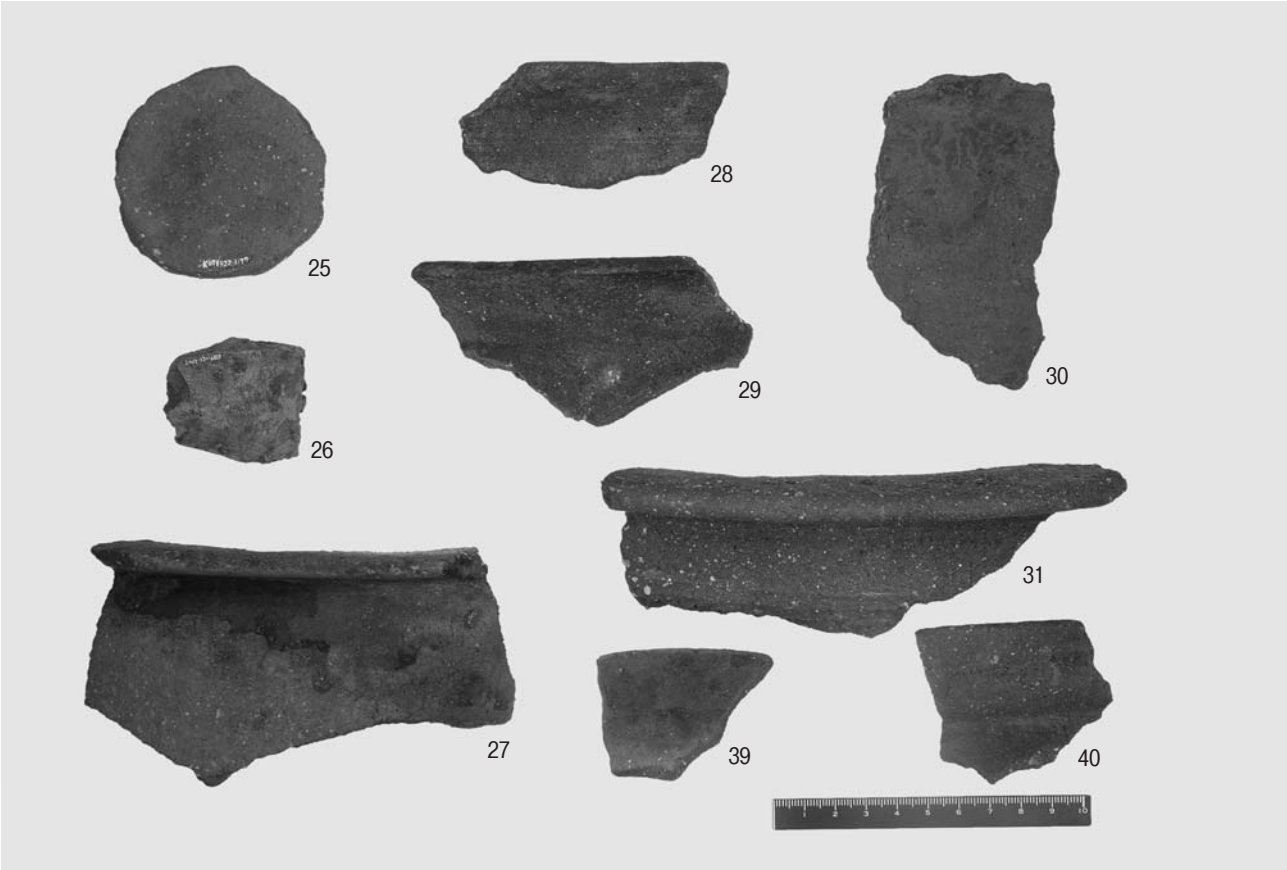


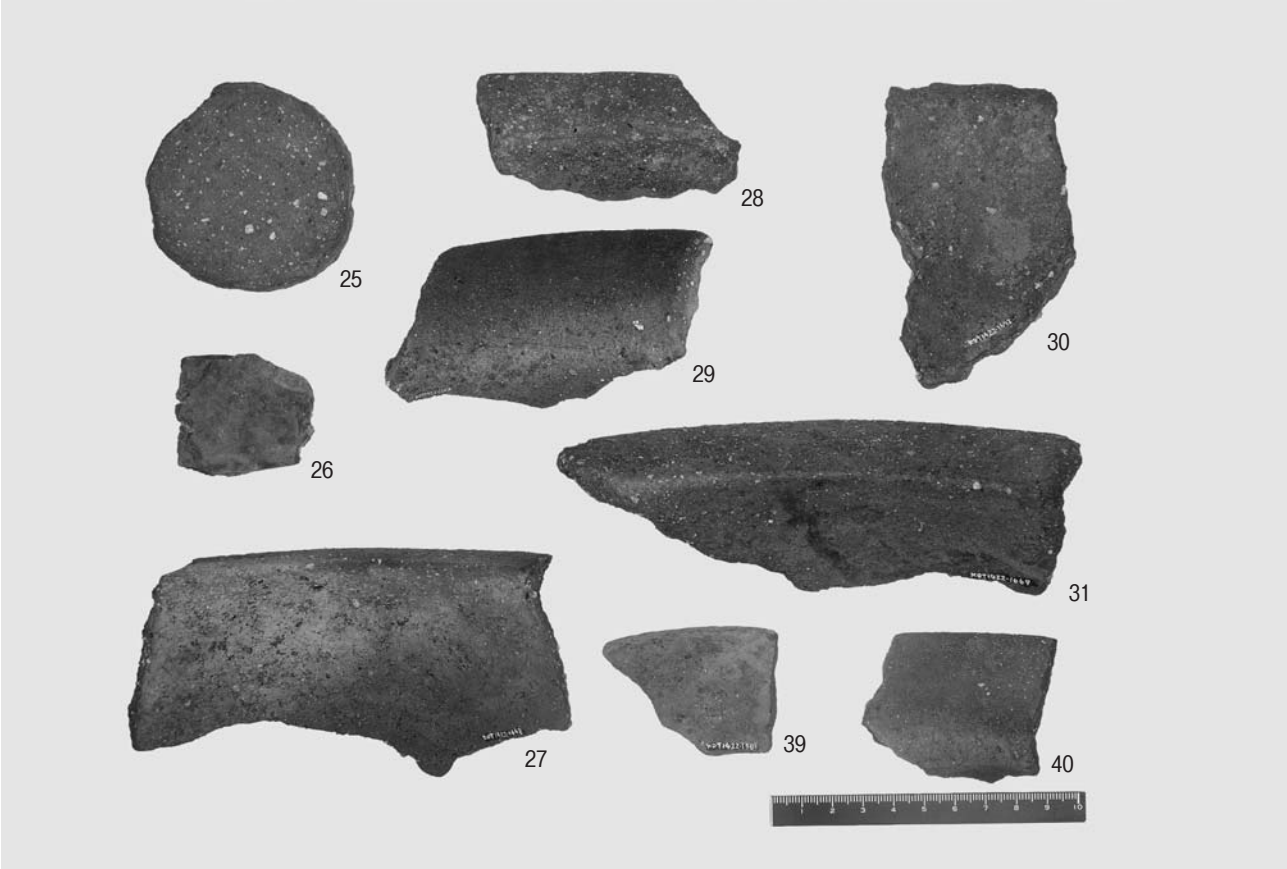
図版 5　小手田遺跡出土遺物②



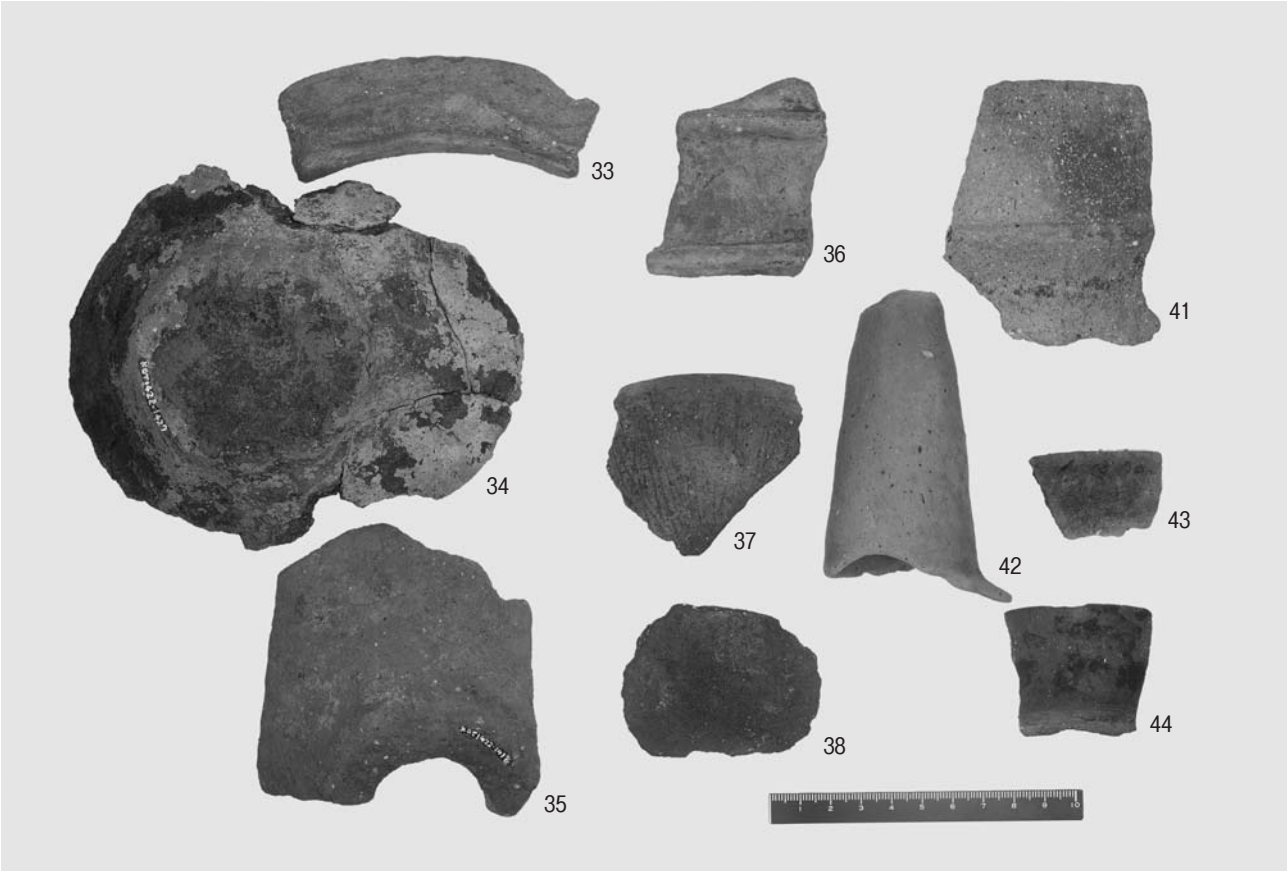


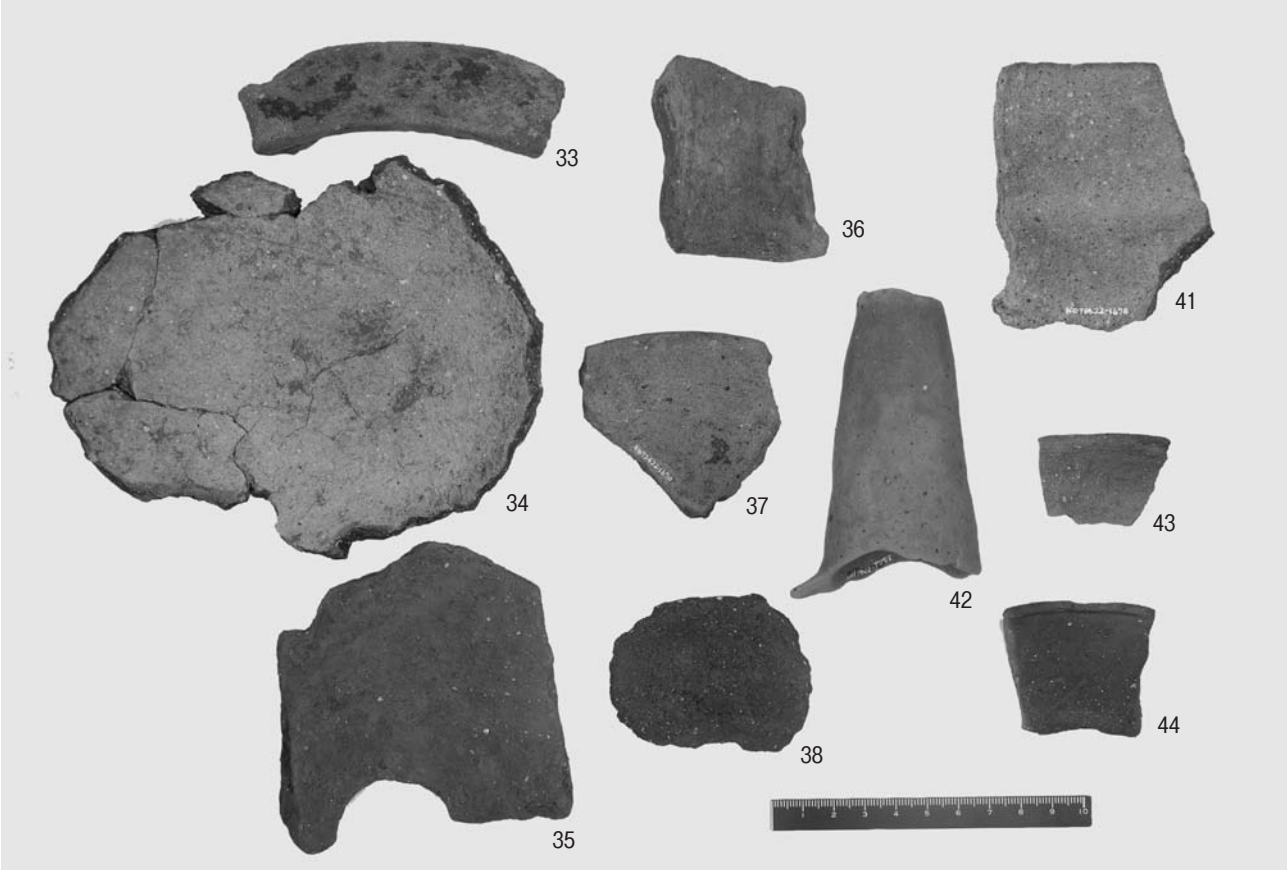
図版 6　小手田遺跡出土遺物③





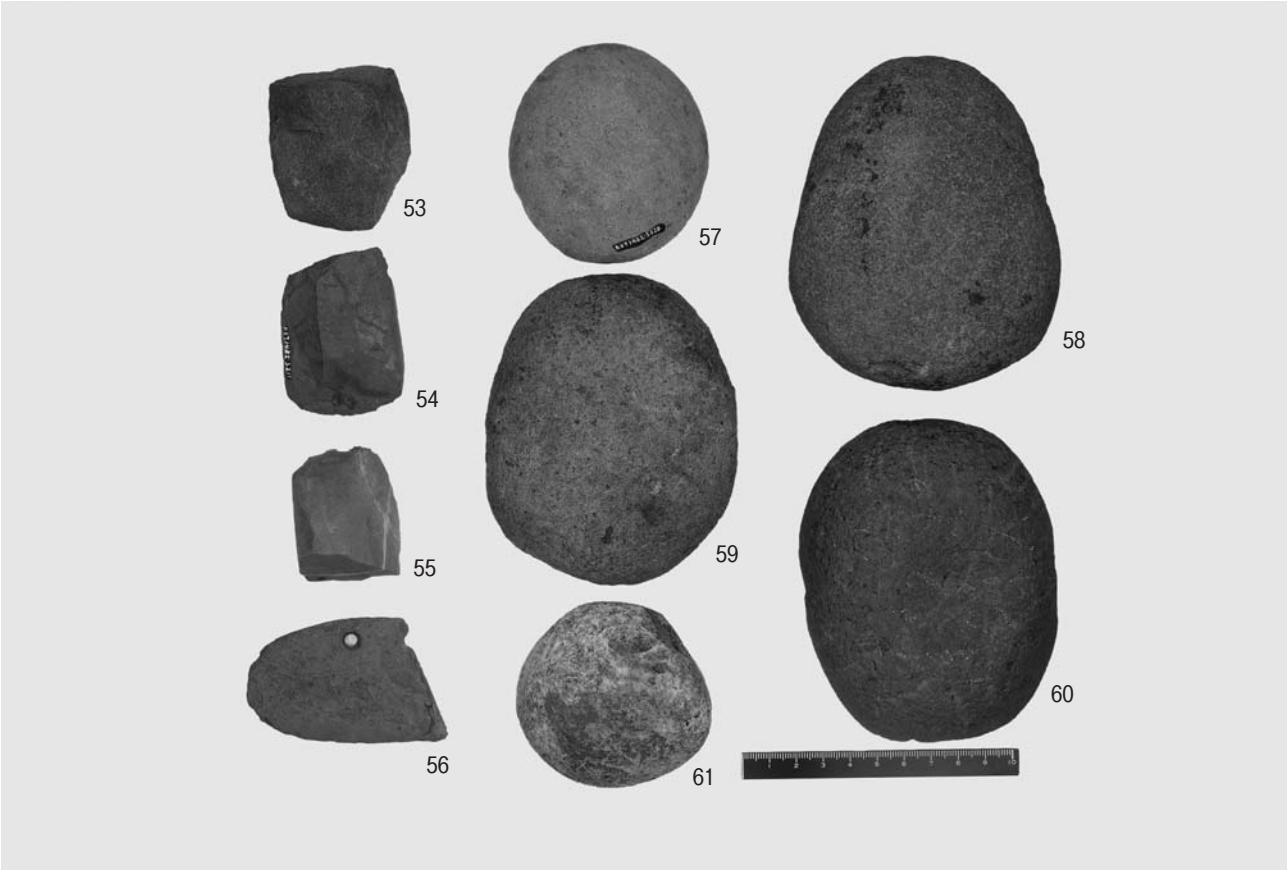
図版 7　小手田遺跡出土遺物④

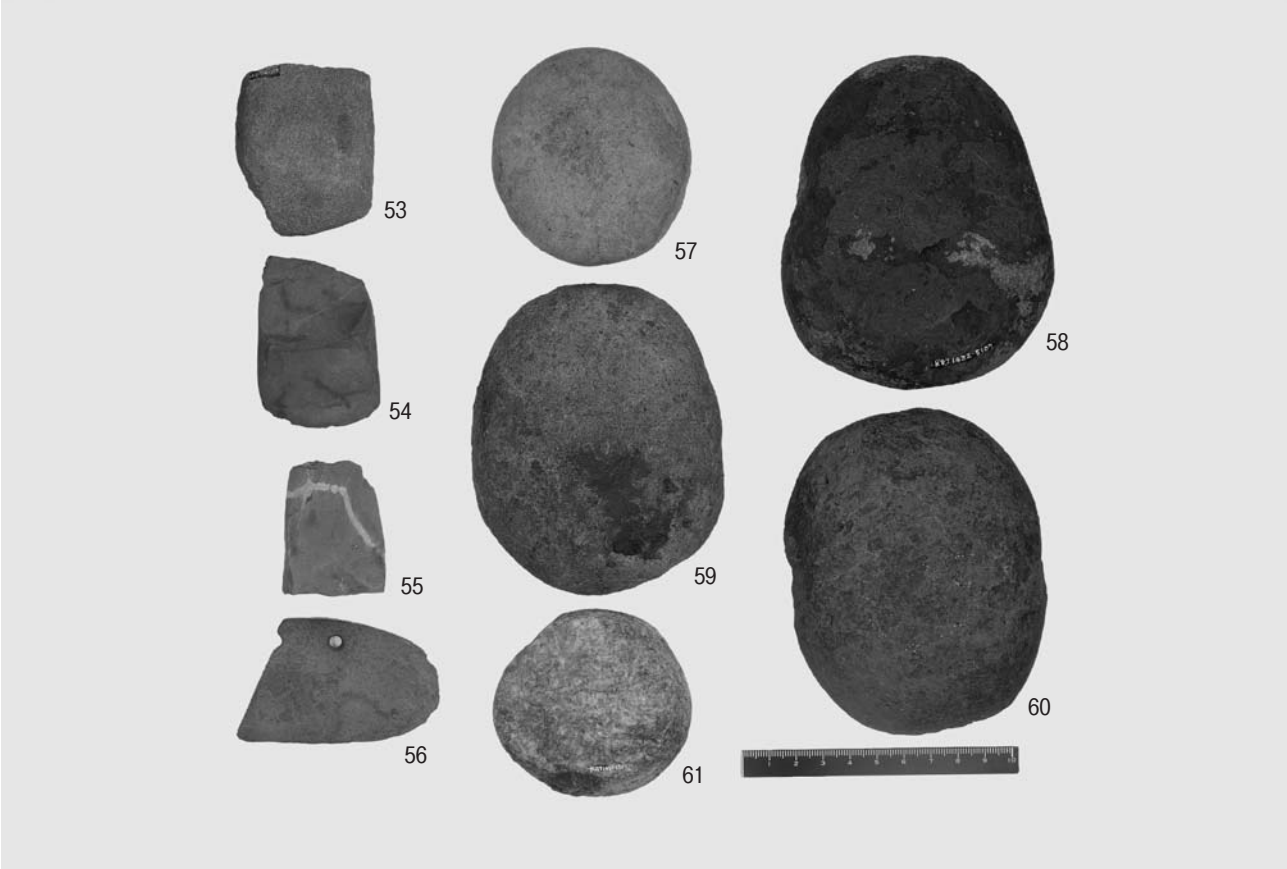




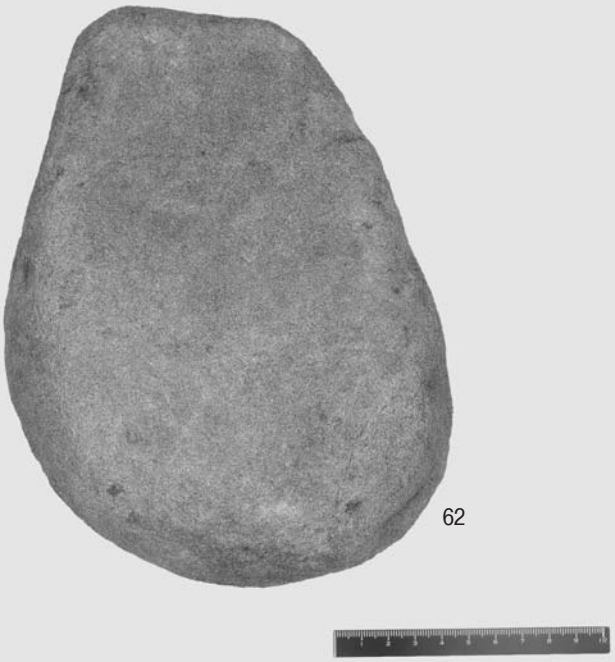
図版 8　小手田遺跡出土遺物⑤

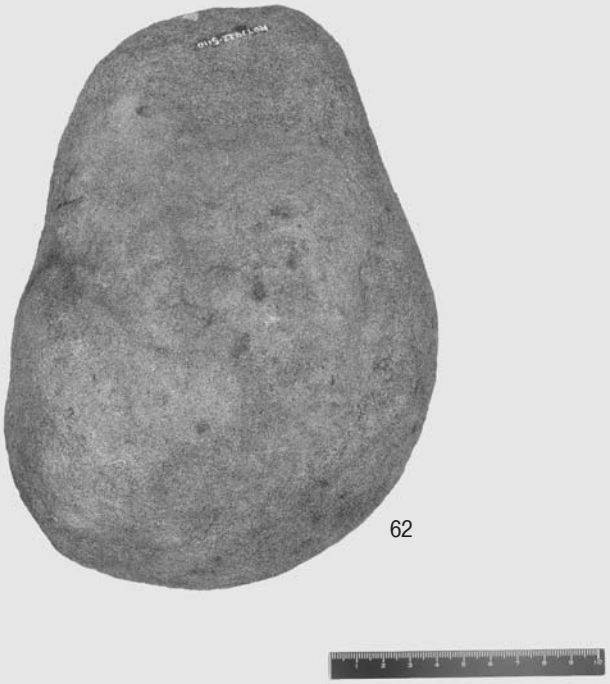
図版 9　小手田遺跡出土遺物⑥



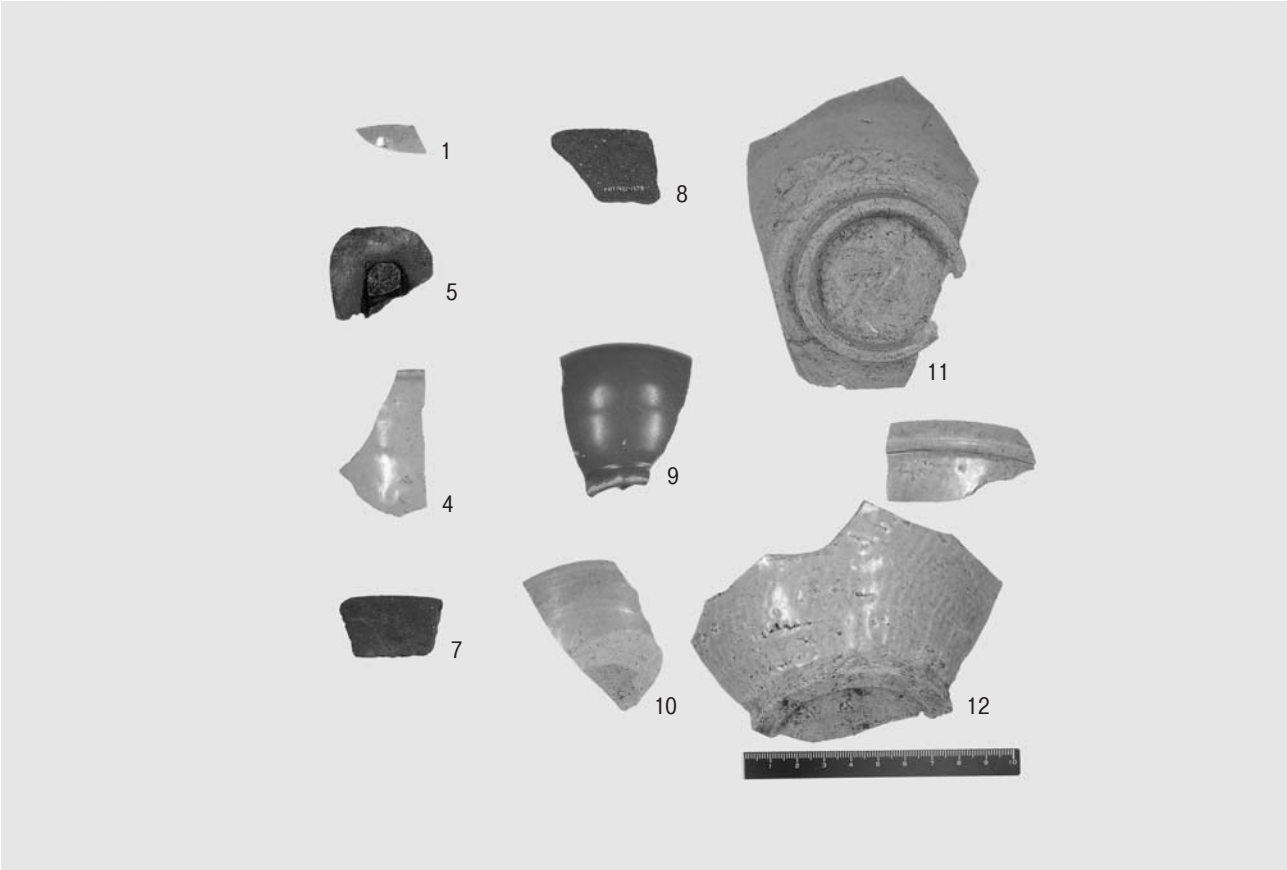


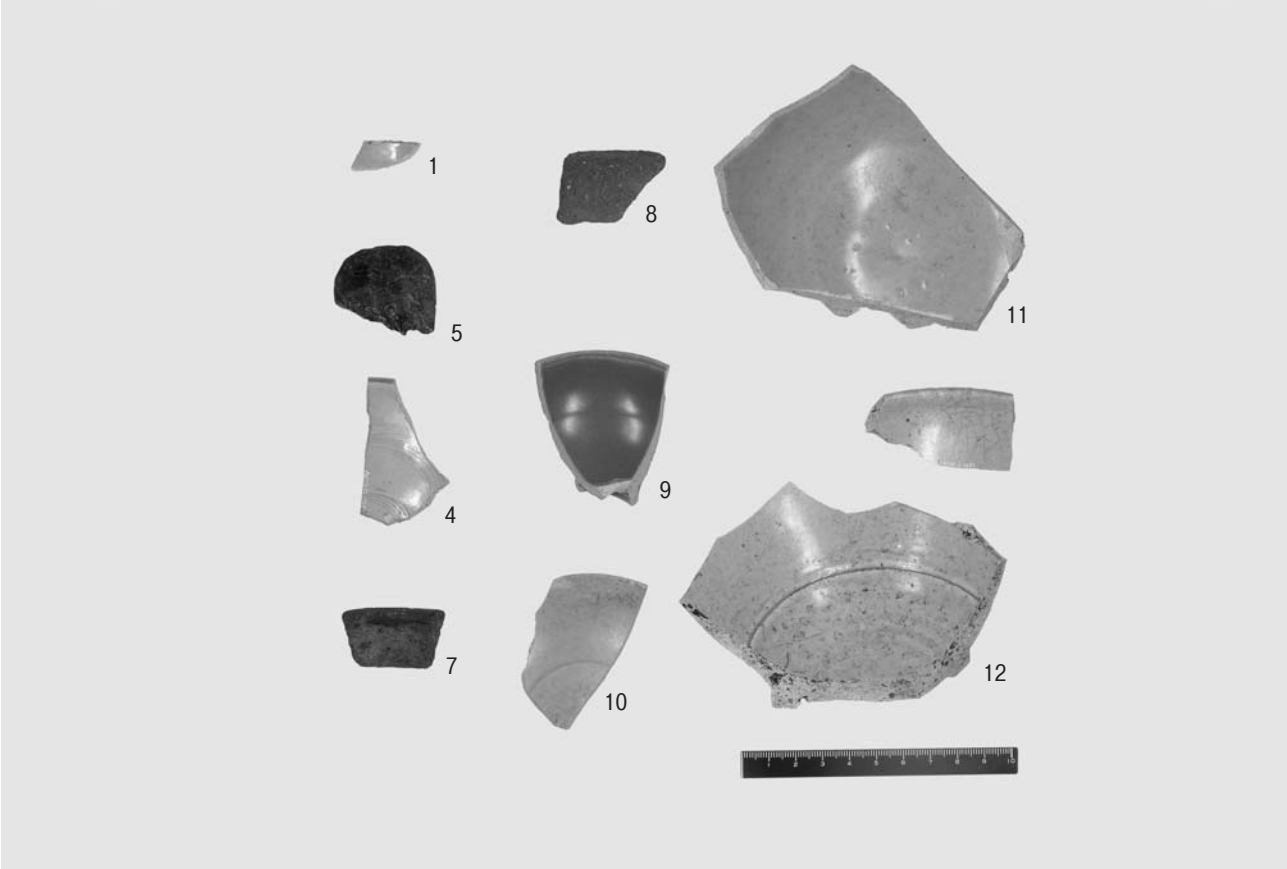
図版10　小手田遺跡出土遺物⑦



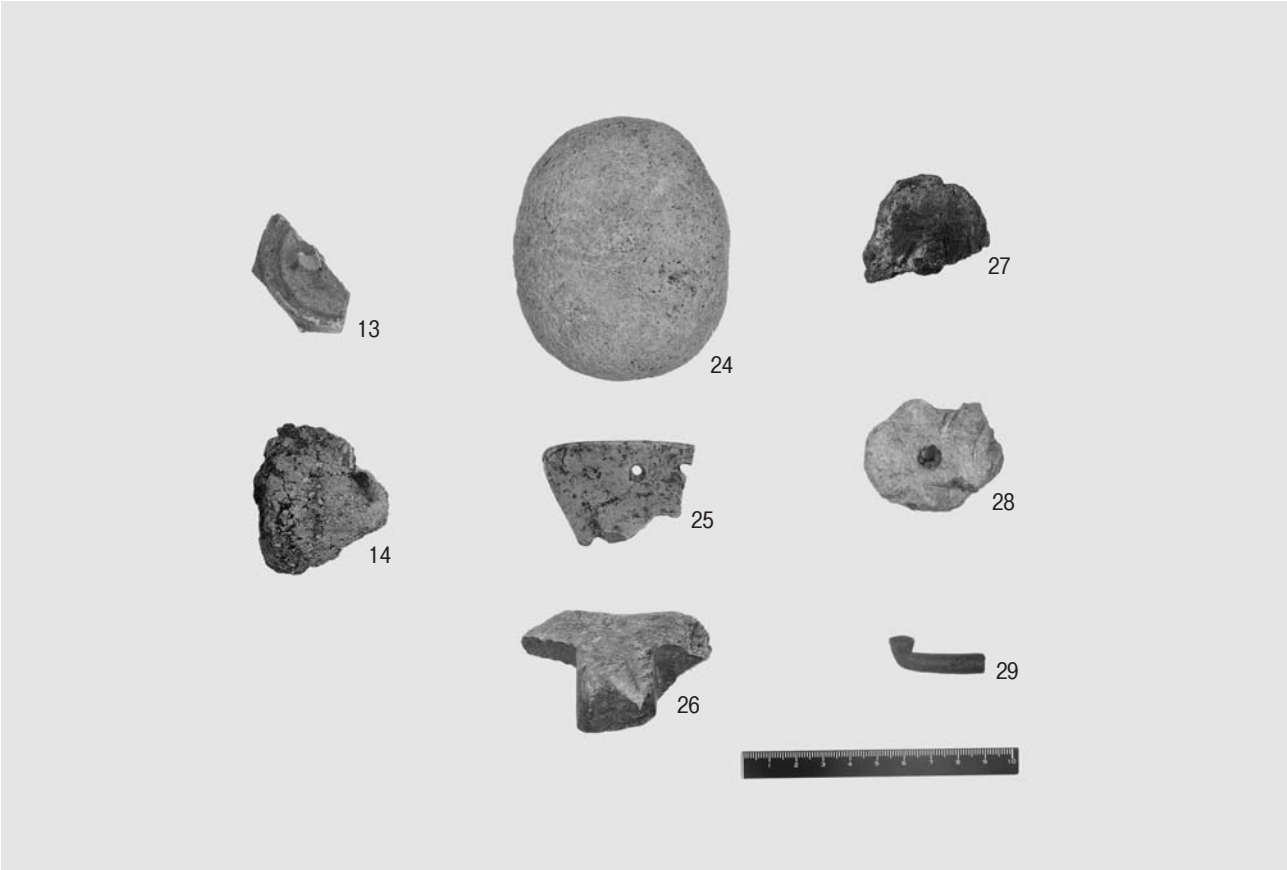


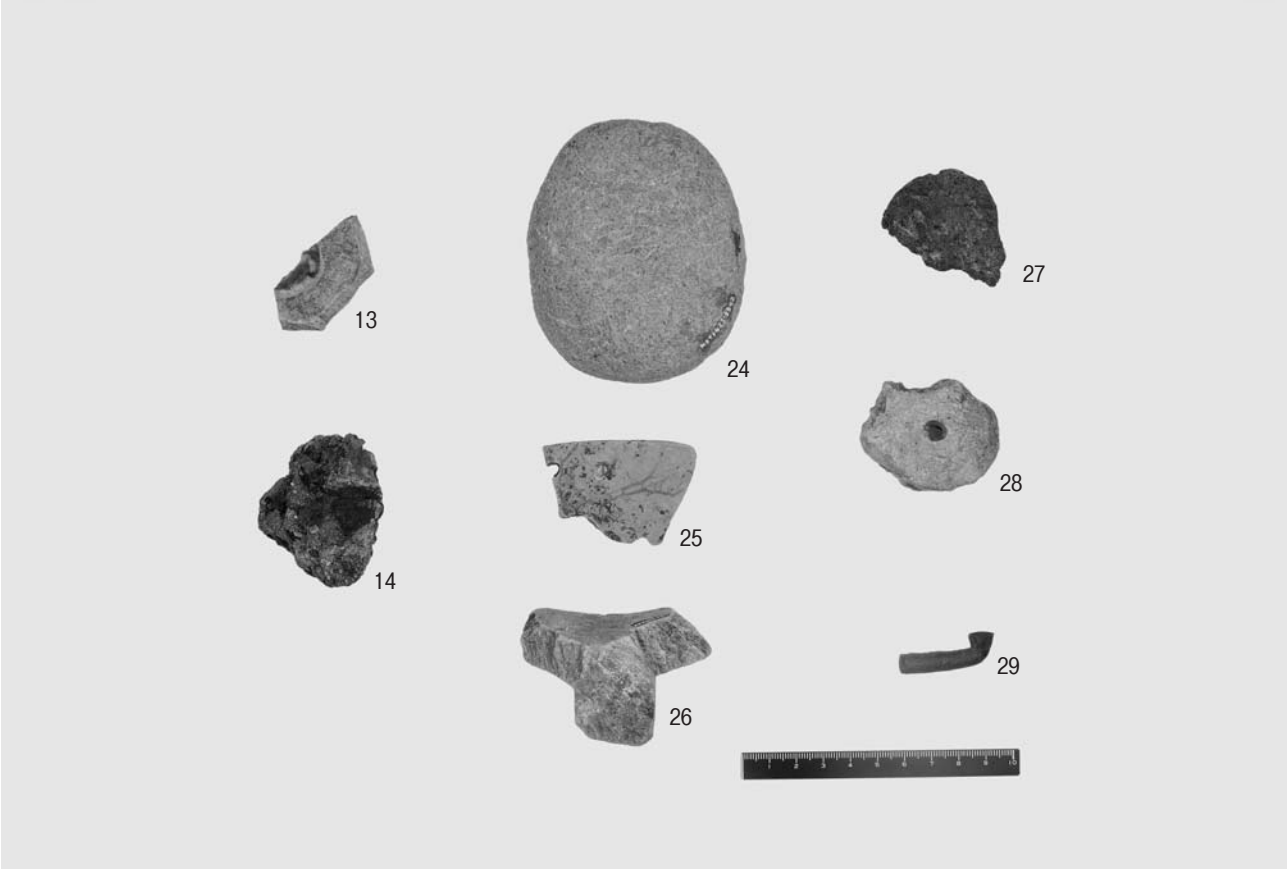
図版11　小手田遺跡出土遺物⑧



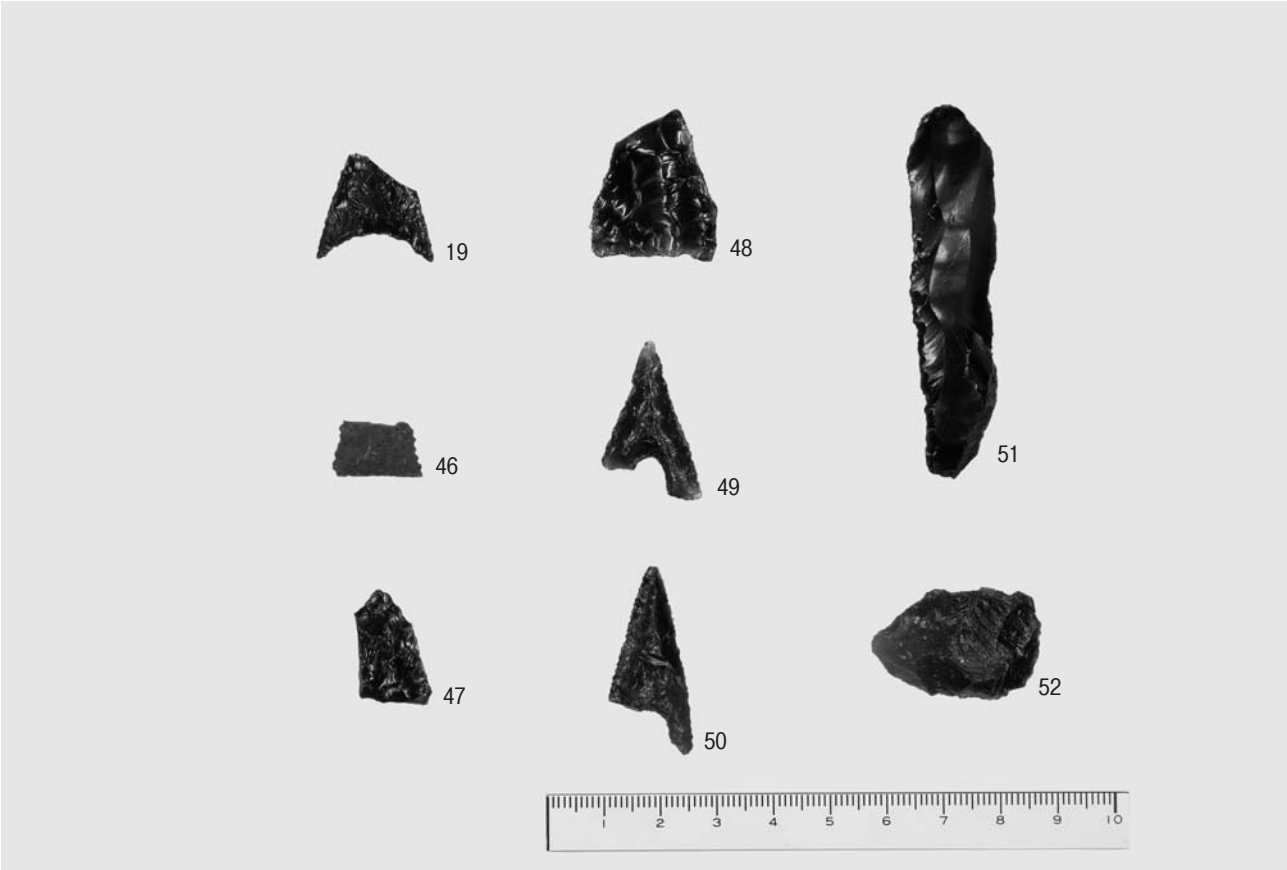


図版12　小手田遺跡出土遺物⑨

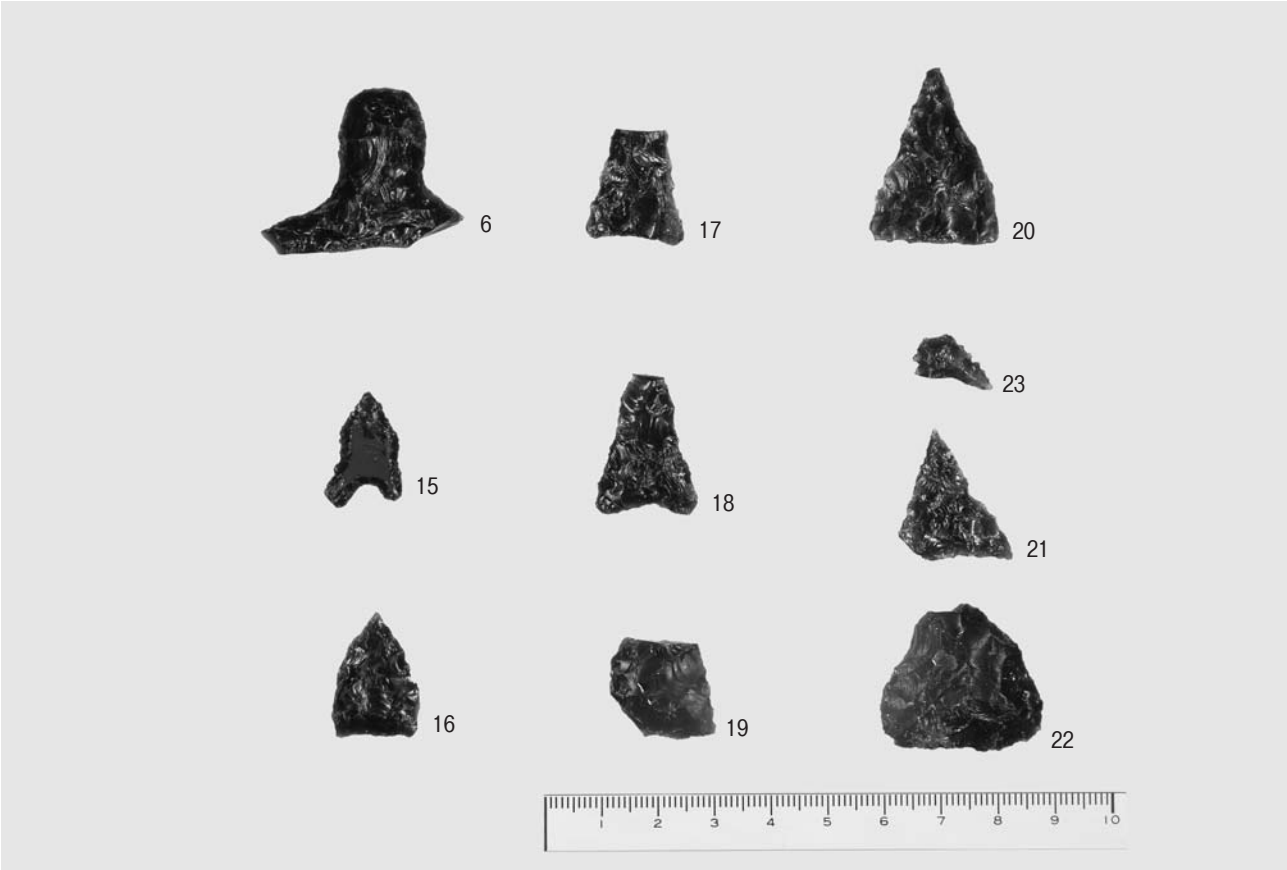


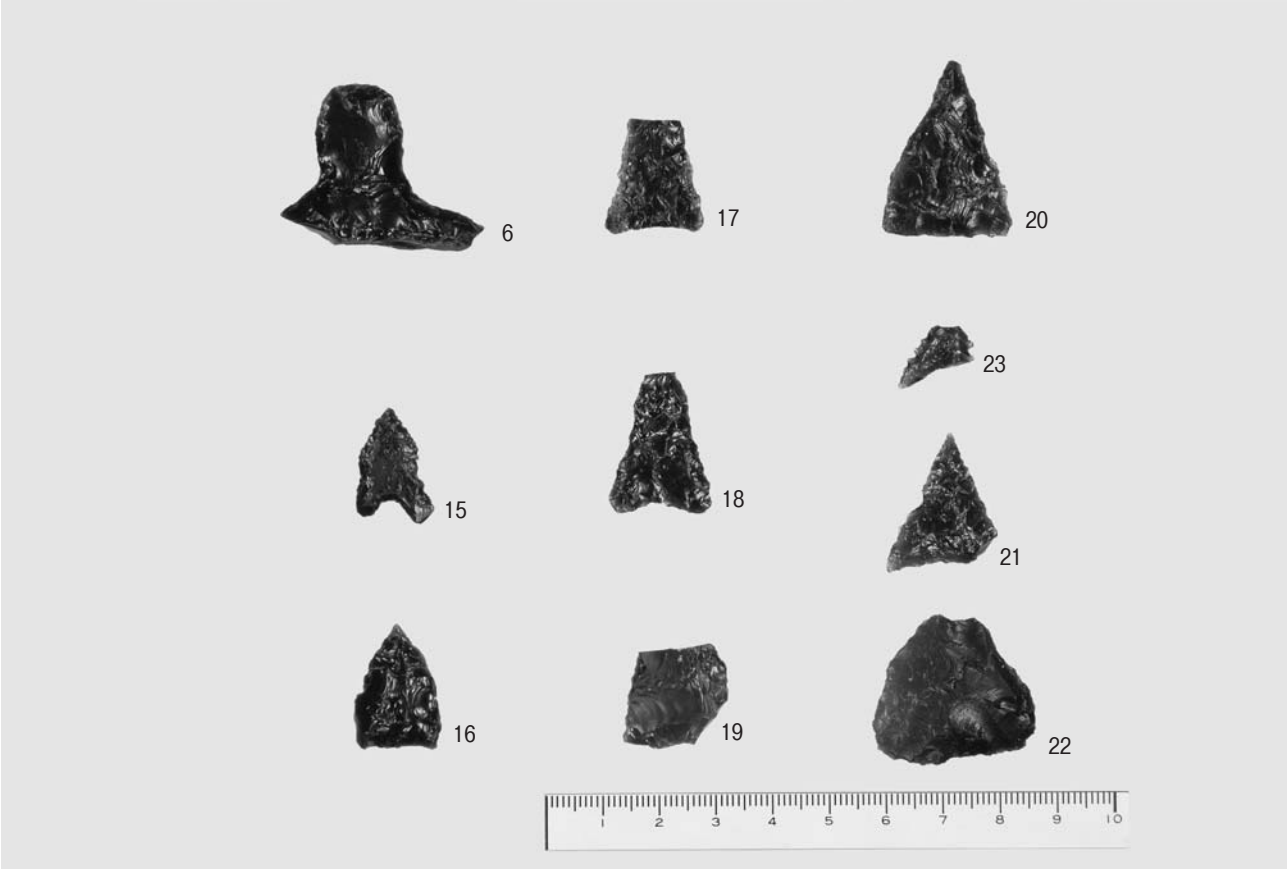


図版13　小手田遺跡出土遺物⑩

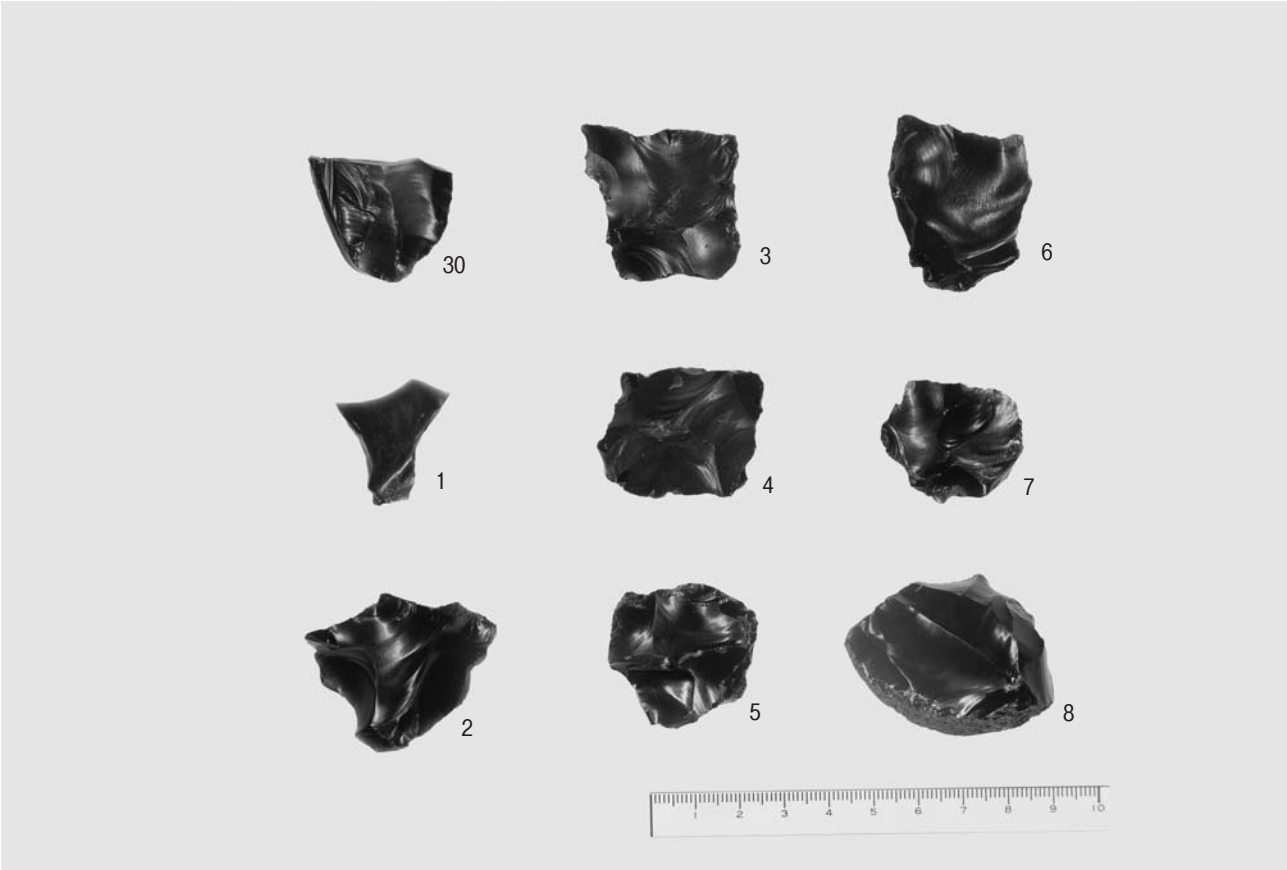


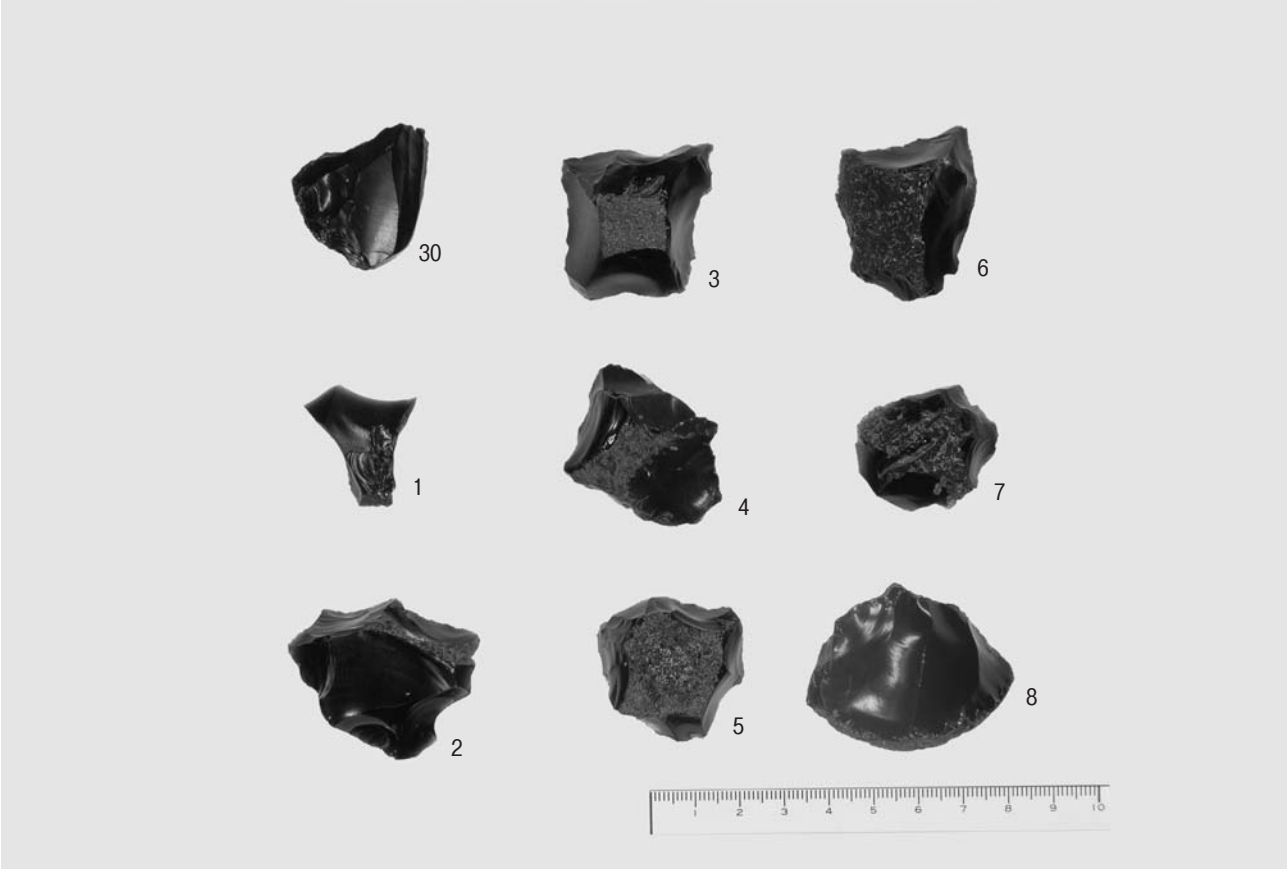
図版14　小手田遺跡出土遺物⑪





図版15　小手田遺跡出土遺物⑫





図版16　小手田遺跡出土遺物⑬

小手田遗址的考古发掘

小手田遗址是一处被定为绳文时代的遗址。2014 年 11 月 25 日至 2015 年 2 月 27 日，为配合地方道路平户田平线的整修，长崎县埋藏文化财中心对工程范围内进行了考古发掘。本次发掘的区域为长条型，宽 12 米，长约 125 米，面积达 1508 平方米。

主要遗迹有灰坑 2 座，干栏式建筑遗迹 2 处。还发现了有回填痕迹的谷地以及多数柱洞等。从出土遗物初步断定干栏式建筑为中世以后，而谷地在 13 世纪被回填的可能性较大。出土遗物有旧石器时代台形石器，绳文时代石簇，弥生时代石器、陶器以及通过贸易所得的中世陶瓷器等。

（翻訳：王達来）

고테다（小手田）유적의 발굴조사

고테다 유적은 조몽 시대의 유물 포함지로서 알려진 유적이다. 주요 지방도 히라도（平戸）다비라（田平）선 도로 개량 공사로 인해 2014 년 11 월 25 일부터 2015 년 2 월 27 일에 걸쳐서 발굴 조사를 실시했다. 발굴 조사구는 폭 12m, 길이 약 125m 로 가늘고 긴 형상을 보이며, 조사 면적은 1508 ㎡이다.

발굴 조사의 결과, 피트 다수, 굴립주 건물지 2 동, 토갱 2 기, 산골짜기 지형을 묻은 흔적이 발견되었다.

굴립주 건물지의 연대는 명확하지 않으나, 출토된 유물로 볼 때, 중세 이후의 유구로 생각된다. 또 산골짜기 지형은 유물의 연대에 의해 13 세기에 매립되었다고 생각된다. 유물은 구석기 시대의 사다리꼴 모양 석기（台形石器）, 조몽 시대의 석촉, 야요이 토기, 야요이 시대의 석기, 중세 무역 도자기 등이 발견되었다.

（翻訳：古澤義久）

報告書抄録

ふりがな	こてだいせき
書名	小手田遺跡
副書名	主要地方道平戸田平線道路改良工事（田平工区）に係る埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	川道寛・白石渓冴（編）・下山正一（元・九州大学大学院理学研究院）・古澤義久
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　電話0920（45）4080
発行年月日	西暦2016年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
小手田（こてだ）遺跡	長崎県平戸市 田平町小手田免	42207	51-122	33°21′23″	129°35′07″	2014.11.25 ～ 2015.2.27	1508m²	主要地方道平戸田平線工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小手田遺跡	遺物包含地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古代 中世	掘立柱建物 谷状地形	台形石器 石核 細石刃核 石鏃 土器 貿易陶磁 滑石製品	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第16集

小手田遺跡

2016（平成28）年３月31日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂